

多摩美術大学美術館

鈴木大拙
没後五十年記念
大拙と松ヶ岡文庫展

(公財) 松ヶ岡文庫

凡例

・本書は平成二十八年(二〇一六)七月二日(土)から九月十一日(日)まで多摩美術大学美術館において開催する「鈴木大拙 没後五十年記念 大拙と松ヶ岡文庫展」の図録である。
・本展で扱う松ヶ岡文庫の正式名称は「公益財団法人松ヶ岡文庫」であるが箇所により「松ヶ岡文庫」「文庫」と省略し記載する。

・作品番号は各章毎に通番号を割り当て、「I・1」のように章をローマ数字、ハイフンを挟んで通番をアラビア数字で記載する。

・作品番号は展覧会場の番号と一致するが、展示の順序とは必ずしも一致しない。

・解題は淵田雄(多摩美術大学美術館)、メインテキストは伴勝代氏(松ヶ岡文庫)、各論は重松宗育氏(静岡大学・関西医科大学元教授)、安藤礼二氏(多摩美術大学准教授)が執筆した。またI章扉解説は小林宏道、II章扉解説は吉田公子、III章扉解説は淵田雄(以上、多摩美術大学美術館)が担当した。

・作品解説の執筆者は左記のとおりで、分担は文末に苗字のイニシャルを示した。(五十音順) 安藤嘉則氏(駒沢女子大学)Ⅱ(A)、小林宏道Ⅱ(K)、淵田雄Ⅱ(F)、吉田公子Ⅱ(Y)(以上、多摩美術大学美術館)

・III章に掲載する、『新編仏法大明録』(Ⅲ・65)、『臨濟録抄五逆人聞雷』(Ⅲ・66)、銅造観音菩薩坐像(Ⅲ・67)、『石造三重塔』(Ⅲ・68)は出品されない。

・作品解説は図版掲載ページに作品名称と制作年の順とし、英字作品名については横書きとした。指定文化財は解説末尾に記した。

・III章に掲載する版画作品中、版本のみの掲載作品については版本の制作年代を参考として記した。

・出品リストは作品名、作者・作家、制作・出版年、員数、材料・技法・寸法(単位はセンチメートル)の順に記載した。またIII章については、出品されていない版本についても参考としてデータを記した。

・年譜は伴勝代氏から提供を受けた。

・掲載写真は主に大屋孝雄氏が撮影した他、松ヶ岡文庫から提供を受けた。

・編集は多摩美術大学美術館(淵田雄、小林宏道、吉田公子)が行った。

・デザインは百瀬梓(多摩美術大学美術館)が行った。

・出品掲載作品は全て公益財団法人松ヶ岡文庫所蔵。

ごあいさつ

日本の仏教と精神文化を世界へ伝えた鈴木大拙は昭和四十一年（一九六六）七月十二日に九十五歳で逝去し、本年で没後五十年の節目を迎えます。大拙の言葉と馨咳に接した数多くの後進は宗教界だけでなく芸術界や財界にも多く及び、その影響は世代と海を越えて未だ止むことはありません。大拙の学問的研鑽は禅と浄土学の成果としては尚も学究の徒にとって里程標であり、禅や日本の霊性を根底にした文化論は、近代史や近代思想の対象ともなるべき価値を見出されるようになって参りました。殊に我々美術大学にとって戦後の日本前衛芸術家達が思想的支柱として大拙の言葉を消化していたことは見逃すことができない事実です。近年欧米でも高まる戦後日本芸術を理解する上で、鈴木大拙は了解しておくべき存在として今後さらに注目が増して違いありません。

多摩美術大学美術館では、没後五十年を記念し鈴木大拙及び大拙が創立を主導し初代理事を務めた公益財団法人松ヶ岡文庫（以下、松ヶ岡文庫）の展覧会を開催いたします。松ヶ岡文庫は大拙が、師である釈宗演の遺志を継承し発願した仏教文庫であり、昭和二十年（一九四五）北鎌倉に設立されました。七万冊の仏教関連書籍を蔵するこの日本有数の仏教文庫は七十年の歴史を刻み、禅籍を中心とした収集と閲覧・公開の拠点として世界とのネットワークを構築してきました。また大拙が起居し研究・執筆を続けた場所としても知られ、実際に大拙が用いた典籍と共に書簡や日記など大拙に縁を持つ品々を多く伝えていきます。

本展は松ヶ岡文庫の所蔵品によって鈴木大拙の足跡をあらためて浮き彫りにすると共に、松ヶ岡文庫の歩みを提示する初の試みとなるものです。会場では手稿・日記の他、写真や動画などの映像資料が描く大拙の姿、大拙と強い繋がりを持った西田幾多郎や柳宗悦、夫人ビアトリス・レーンなどの手紙や墨蹟、仏教学への思いが明らかになる書籍やノートなどをご覧いただけます。これらの出品は彼らを結んだ絆を語り、皆様にも活き活きと届くことでしよう。さらに大拙の理念に賛同し松ヶ岡文庫の草創に寄与した安宅彌吉、出光佐三の尽力、大拙亡き後に松ヶ岡文庫の運営に腕を振るつた古田紹欽などについても取り上げる他、柳によって松ヶ岡文庫に備えられた民藝作家の工芸品も出品致します。これらから人と人の信頼や友情が紡いできた松ヶ岡文庫の歴史、そして仏教学の碩学として常に影響を与え続けてきた鈴木大拙のヒューマニズムを感じていただければ幸いです。

本展では同文庫が所蔵する文化財として、観音菩薩半跏坐像および東大寺連弁拓本が出品される他、これまで未調査であった江戸・明治期の仏教画像や神像が刻まれた版木が初公開となります。本展の為に制作された版本と共に、美術的・近世日本の精神史を語る文化的意義を有するこれら版画をお楽しみください。

末尾となりましたが、本展の開催にあたり惜しみないご協力をいただいた松ヶ岡文庫の皆様、貴重なご助言とご協力をいただいた各機関と皆様に深く御礼申し上げます。

二〇一六年七月

主催者

多摩美術大学美術館

鈴木大拙博士没後五十周年記念展

本年七月、也風流庵大拙居士没後五十年を迎えることになりました。そこで、多摩美術大学のご協力を頂き、大拙居士の人徳によって設立された「松ヶ岡文庫」の所蔵する書籍、美術品、骨董品などの収集品を展示、公開することになりました。今回の展示品の中には、初めて展示、公開するものが多数あります。また、今年度の本財団『松ヶ岡文庫研究年報』第三十号には、松ヶ岡文庫設立の経緯について、永年、文庫の事務職として文庫の運営を守って下さった伴勝代女史に、文庫の歴史の整理をお願いし、その一部を発表致しました。展示会の図録等と併せてお読み頂ければ、文庫の設立及び存在意義も深くご理解頂けると思います。

今回の記念展によって大拙居士の研究生活、禅の修行等、大拙居士の生涯をご理解頂くと同時に、禅の発展を祈念する次第です。

公益財団法人松ヶ岡文庫理事長 鈴木省訓

(公財)松ヶ岡文庫

多摩美術大学美術館

大拙と松ヶ岡文庫展の開催を喜ぶ

二〇一六年七月十二日に鈴木大拙博士没後五十年を迎えるに当たり、「大拙と松ヶ岡文庫展」を多摩美術大学美術館で開催することになりました。

財団法人松ヶ岡文庫の設立経緯は、鈴木大拙博士及び大拙の発願に賛同する有志（明石照男、石井光雄、岩波茂雄、安宅彌吉、小林一三、五島慶太、近藤滋弥、酒井忠正）により、昭和二十年北鎌倉松ヶ岡に設立され、翌二十一年二月財団法人として認可を受けて発足しました。文庫の設立は、かつて大拙の師であった釈宗演老師（一八五七―一九一九）によって発案されたものであります。平成二十五年に認可発足した公益財団法人松ヶ岡文庫になっても、その目的は変わらず、「寄附行為」には、「本文庫は、仏教殊に禅宗に関する文献図書を収集及び保存し、これを研究者の閲覧に供するほか、広く一般読書人に公開してその教養に資し、併せて禅に関する知識の普及を図ることを目的とする」としています。特に東慶寺の裏手の入口に建つ「松ヶ岡文庫 安宅自安居士頌徳碑文」には、文庫の基礎は安宅彌吉氏（一八七三―一九四九）の援助によるとし、研究生活の私的援助も大きかったと大拙博士は述べています。

今回の松ヶ岡文庫展の最大の魅力は、大拙博士の貴重な遺品や文庫所蔵の文化財、未公開の版木と新たに刷られた版画などが数多く出品されていることでしょう。また、大拙博士と日本を代表する多くの有名人との交流を同時に知ることができるに違いありません。

公益財団法人松ヶ岡文庫長 石井修道

本展覧会の開催にあたり、貴重な作品、資料、写真等を貸与いただき、また、作品の調査、文献や写真などの調査及び様々な協力とご教示を賜りました左記の諸機関と関係各位に深く謝意を申し上げます。またここにお名前を載せることができなかつた皆様にも、この場を借りまして心より御礼申し上げます。

(敬称略 五十音順)

公益財団法人朝日新聞文化財団
岩波書店
鎌倉市教育委員会
唐草書房
春秋社
長命寺
東慶寺
竹芳洞
日本民藝館
ノンブル社
公益財団法人松ヶ岡文庫

多摩美術大学美術館

安藤嘉則
安藤礼二
石井修道
内田啓一
大屋孝雄
金子智哉
小林義昭
重松宗育
島尾 新
十文字 美偏
白井 四子男
宋木 文美士
杉山 亨司
鈴木 省訓
高井 正俊
高橋 秀栄
高橋 康行
田中 菜穂子
露木 恵子
中野 慶一
新田 雅章
伴 勝代
松田 修哉
村上 豊隆
吉永 進一
若松 英輔
渡辺 明義(故人※)

※作品調査においてご教示を賜っていただきました渡辺明義氏が、二〇一五年三月三十日にご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(公財) 松ヶ岡文庫

目次

多摩美術大学美術館

ごあいさつ

鈴木大拙博士没後五十年記念展 鈴木省訓

大拙と松ヶ岡文庫展の開催を喜ぶ 石井修道

大拙と松ヶ岡文庫―「結晶」 淵田 雄

公益財団法人松ヶ岡文庫 大拙先生の歩みを顧みて 伴 勝代

Ⅰ章 鈴木大拙の軌跡と遺物

Ⅱ章 鈴木大拙の交友と松ヶ岡文庫

Ⅲ章 松ヶ岡文庫の文化財

D・T・スズキとビート世代 重松宗育

来たるべき「東方哲学」―鈴木大拙の可能性 安藤礼二

鈴木大拙略年譜及び主要著作一覧

出品目録

131 124 119 114 65 49 33 10 8 5 4 3

(公財) 松ヶ岡文庫

大拙と松ヶ岡文庫 ― 「結晶」

淵田 雄

昭和四十一年（一九六六）七月十日早朝に罹病、同月十一日午後東京聖路加病院に入院し翌十二日に逝去。日本の仏教文化を世界に伝導した鈴木大拙は享年九十五歳にしてあまりにも突然に去った。晩年まで『教行信証』『臨濟録』『碧巖録』といった仏籍や仙厓について、または禪語字典の英訳などを進め、病に倒れた朝は仕事を遂行するために軽井沢の出光寮へ出発する矢先だったという。叶っていればまさに「夏安居」となったに違いない。大拙が願い、昭和二十年（一九四五）に創立された北鎌倉の仏教文庫「松ヶ岡文庫」は大拙の終の棲家となった（図1）。主を急に失った部屋には、それ特有の雰囲気が残っている。没後およそ四ヶ月の後、大拙の信任篤かった古田紹欽が記す「近ごろは文庫を訪ねてくる人もめっきり少なくなった。いるべき人がいなくなっただけということがどうも違ってくるものかとつくづく感じる。しかしこれでいいのだろう」（註一）からは静謐なる時がそこにあつたことを窺わせる。爾来半世紀が立つ今日、松ヶ岡文庫へは国内外研究者が頻繁に足を運ぶ。目的の多くは「蔵」に取められた七万冊にも及ぶ仏教書籍（図2）の調査、拝見だが、またここは十九世紀末から二十世紀の英文雑誌を蔵する有数の文庫でもある。

松ヶ岡文庫を訪れる者は、厳格であるもなんとも懐かしい雰囲気を感じるに違いない。本展の為、足繁く通った私もその一人だ。数々の遺品や夥しい書簡や自筆原稿、そしてその人に集った人々が残した有形無形の遺産が今に伝わり、それら全てが松ヶ岡文庫の雰囲気を感じさせている。亡き夫人の号を冠した「青蓮文庫」の掛欄に挟まっていた大拙宛ての手紙を手にしてみると、そこには生前の和暦が記されていた。大拙の息吹がまだ感じられる所、それも松ヶ岡文庫が持つひとつの「顔」である。明治四十二年（一九〇九）米國から帰国し教鞭を執った学習院では教え子に柳宗悦がいた。柳は常に「師への思慕」を持ち続け、松ヶ岡文庫の設立を聞くと協力を申し出たという。民藝運動の旗手となった柳の美意識は、可視化される形で松ヶ岡文庫に宿されている。室内に設えられた仏間をはじめ建築の節々に柳の尽力が垣間見える。また柳が用立てたという民藝作家達の陶器がごく自然に文庫の建築に馴染んでいること、そのことに柳の美が醸し出されているように思えてならない。仏教学を研鑽した柳にとって大拙は賛仰する師であった。教学を修する者にとって仏典はもとより関係書籍はまさに命のようなものであるが、柳は自らの墨跡で著した目録と共に仏書や禅籍を松ヶ岡文庫へ寄贈する。

柳だけでは無い。米國資産家のコーネリアス・クレインからの寄付によって『新編仏法大明録』（重要文化財）を含む石井積翠旧蔵の典籍が収蔵され、出光興産創業者の出光佐三の采配と尽力は松ヶ岡文庫の運営を支えた。さらに松ヶ岡文庫創設で無くてはならなかったもの、それが大拙と同郷の人で日本有数の総合商社「安宅産業」を興した安宅彌吉の惜しみない援助だった。現在松ヶ岡文庫の仏間には墨書「自安堂」が掛かっている。「自安」とは安宅の「号」であり、同じく同郷の心友西田幾多郎が揮毫したものだ。また大拙亡き後、現在まで続く松ヶ岡文庫の姿を整えたのは、冒頭に記した古田紹欽であった。まさに中興の祖である。

ここに記すことが出来ない人々を含む数多くの縁が松ヶ岡文庫をつくりあげてきた。それはやはり「いるべき人」たる大拙が故に集ったものであろう。没後五十年を迎える現在にも通じているに違いない。主要四十冊を超える著作や数々の講義・講

演で大拙が広く世界へ伝えたもの、そして『禪と日本文化』（一九三八）・『日本の霊性』（一九四四）を読んだ戦後日本人へ与えた影響はここで述べるまでもなく、その功績を積んだ叡智を社会は放っておかなかった。一方で大拙と直に接した人を突き動かし続けているのは、自らの「生」と使命を全うしようと最後の時まで数々の構想を遂行し執筆を進めた意思と姿、そしてまさにその人そのものではなかったか。古田が追想する恩師の姿「先生はきわめて平常の人であり、どこにも超人的なところはなかったが、凡人のように見えて非凡なところがあった。あるときは恐ろしく怖いものと受け取られた。その点きびしい居士禅者の風貌があった」（註二）は、何人も受け取ったものであろう。

松ヶ岡文庫の室内からはその人への思いと重層する縁がいたる所に透かし見える。大拙の遺風と大拙への思いそして創設から七十年に及ぶ歴史と遺産が「結晶」する所、それが松ヶ岡文庫である（註三）。

本書では、ここに記す縁と人間大拙の姿に注目し、本書Ⅰ章・Ⅱ章では出来る限り近づこうとした。またⅢ章では松ヶ岡文庫が蔵する文化財を掲載し、観音菩薩半跏坐像（鎌倉市指定文化財）や近世日本の信仰と精神をあらわす版木などの他（註四）、前出の『新編仏法大明録』（重要文化財）や『臨濟録抄五逆人間雷』（重要美術品）（註五）などを紹介する。この度の展覧会として本書をご覧になり、大拙が愛した松ヶ岡文庫の扉が「開かれん」ことを祈念したい。

（多摩美術大学美術館学芸員）

（註一） 鈴木大拙『大拙つれづれ草』

（あとがき 古田紹欽） 読売新聞社

一九六六年十一月

（註二） 註一同

（註三） 本図録に所収する伴勝代氏「公益財団法人松ヶ岡文庫大拙先生九十六年の歩みを顧みて」には大拙として松ヶ岡文庫が宿す人との歴史が詳しく綴られている。

（註四） 本展に合わせて新たに摺った版木を展示・掲載する。作品調査においては高橋秀栄に多大なご教示をいただいた。

（註五） 『新編仏法大明録』及び『臨濟録抄五逆人間雷』は本図録所収のみ。



図1 1951年頃の松ヶ岡文庫



図2 現、松ヶ岡文庫第2書庫

公益財団法人松ヶ岡文庫

大拙先生九十六年の歩みを顧みて

伴 勝代

I 言霊ことだま

松ヶ岡文庫は、大拙没後四十（平成十八）年の記念展を機に、鈴木大拙没後四十年記念寄稿集』（平成十八（二〇〇六）年六月八日、松ヶ岡文庫発行）のあとがき（その一）に記した。その後の経緯は、当文庫のホームページをご参照いただければ一目であろう。開設以来膨大な資料を年々デジタル化し、今後も更なる詳細を予定している。また、書籍方面でも、次々に発表される未公開資料など、各出版社をはじめ、当文庫の年報や叢書等々をご覧になれば、おわかりいただけるかと思う。

少年時代から天性の学問的資質ひとつをたよりに国を出て、広く師友をもとめ、名師に会い、益友を得、その激励や推薦によってあらゆる困難に打ち克ち、禅と禅文化を欧米に広く紹介しようという、前人未踏の大計画を胸に秘めていらした少年時代の大拙先生、それは、弱冠十九歳で『反省会雑誌』（『中央公論』の前身）に寄せられた巻頭言（二十四頁上段参照）にも充分滲みでている。

この先生が亡くなられて、本年、五十年の星霜を迎える。松ヶ岡文庫は創立七十年となった。九十六年の生涯を通して、仏教を基本とする東洋文化の精髓を世界に伝えることを終生の使命とされてきた大拙先生。その先生の残された膨大な原稿、書簡、書籍をはじめ、国内外の事務的書類にいたるまでも、あらゆる言葉の端々に、少年時代から持つ強い求道精神と気概が感じられ、その思いはいまだ、この松ヶ岡文庫の隅々まで響きわたっている。日々、仕事に携わりながら文庫の現場をあらゆる身にとって、それは、感無量に尽きる。あれから、更に十年、地道ながらも、文庫の経営状況にあわせて、一步一步着実に歩んできたが、そこでは、常に、多くの関係者の方々のただならぬご尽力と、献

身的など協力を仰いだ。まずはこの場をお借りして、松ヶ岡文庫一同衷心より感謝の念を表したい。

平成二十三（二〇一一）年六月三十日に「公益財団」としての認可を受け、平成二十四（二〇一二）年十月十二日には「公益財団法人松ヶ岡文庫」として認定された。翌二十五（二〇一三）年四月一日から新たに発足し、現在に至っている。

私文庫から公的な文庫を目指し、禅文化を世界に発信するという大拙先生の壮大な計画の一端でも実現出来たことは、ひとえに多くの協力者の賜であり、深謝に耐えない。

人は、たとえ姿形をなくしても、言霊ことだまとして生きることがあると、よくいわれる。いかに優れた人物でもそれを伝える人がいなければ後世に伝わらない。

今回偶然にも、大拙先生没後五十年を記念して「大拙と松ヶ岡文庫展」を多摩美術大学美術館が開催してくださるといいうれしいご縁を得た。このことも自然の成り行きとはいえず、文庫関係者一同深く感謝申し上げる次第である。

現在、文庫に残されている外国語の未整理分整理作業は、総勢十名体制で前途有望な若手研究員によってすすめられている。また、ビアトリス関係資料の整理や、外国人に宛てたすべての英文書簡、仙厓未公開資料、真宗関係資料等々は、本誌『松ヶ岡文庫研究年報』第三十号より順次掲載の予定である。更に、コロンビア大学セミナー講義録や重要文化財・重要美術品などの指定を受けている和漢書をはじめ、その他の松ヶ岡文庫所蔵すべての禅籍目録等、各々関係者メンバーで着実に作業が行われ、まもなくこの没後五十年を記念して叢書第五、第六として刊行の運びとなる。

これら現場にみるように、大拙先生の言霊ことだまを受け止める人びとがこの世に

存在する限り、大拙先生は今後も、世界に向かって更に限りなく生き続けることと確信する。

II 松ヶ岡文庫の起源と由来

松ヶ岡文庫の構想は、円覚寺元管長で東慶寺住職であった釈宗演老師の遺言【大正七（一九一八）年十二月二十五日の「賊後引」】の中に「一金三千円松ヶ岡文庫若クハ松ヶ岡宝蔵ノ建築費ニ充ツヘシ」とあることに始まる。

この遺言で注目されるのは、宗演遷化（大正八（一九一九）年十一月一日没享年六十二）の時に、「松ヶ岡文庫」という名称が成立しており、仏教の国際的普及活動の中心として、「松ヶ岡文庫」が考えられ、その設立基金が遺贈されていた、ということである。松ヶ岡というのは、北鎌倉における鶴ヶ岡、亀ヶ谷などと並ぶ鶴亀松の三つの吉祥名をつけた地名で、東慶寺と裏山の一角を指す。「この地に文庫を」という願いがあつたことになる。がしかし、大拙先生は法人組織としても、この文庫名を恩師宗演老師の宿号、楞伽窟の名を取って「楞伽文庫」と名づけるつもりであつた。ところが戦時中、法人としての認可がおりるには、個人的意味での文庫名ではむずかしい事情もあり、結局、師の遺言である「松ヶ岡文庫」が正式名称となつたのである。

また、この文庫設立の計画は、自分とピアトリス（青蓮）夫人との蔵書を併せて文庫を作りたいという思いと重なつていたのかもしれない。なぜなら、この計画は夫人が亡くなられた昭和十四（一九三九）年頃より始まつており、さらに具体化するのには、東慶寺に井上禪定住職が赴任してきた昭和十五（一九四〇）年に入ってからである。禪定閑栖住職が書き遺したように、往時の東慶寺は寺経営も窮迫し、折角の宗演老師の遺贈金三千円も、禪定少年が大卒を出るまでの教育費などに消えてしまった。このことを十分に承知していた禪定住職が、大拙先生に東慶寺裏山の永久無償提供を申し出た。戦争の最中であることから、軍部からの建築規制もあつて建築が思うように運ばなかつたと古田紹欽は話していた。また、ある時、建設中の文庫が米軍に接収されかけて、先生が軍命令を断固はねつけた経緯など、松ヶ岡文庫裏玄関の書庫に向かう石段のあたりで大拙先生を囲んで米人と撮っている写真がある。これは、その時

のものであろうか。

この文庫建設にあつた資金は、主として安宅産業安宅彌吉の寄附によるもので、さらに初代監事加納實らの寄附も加わり、そうして木造ながら書庫一棟（現在の書齋、のちに大拙先生が名付けられた名称「青蓮文庫」と、閲覧室（現在の仏間、「自安堂」と住宅一棟（現在仏教講座に使用している「随庵」）の三棟が完成したのが、昭和十九（一九四四）年の三月である。鈴木貞太郎と井上禪定双方が交わした昭和二十（一九四五）年の土地についての契約書には、「……将来主務官廳ノ財團法人設立許可ヲ得タルトキハ本件土地使用賃借契約ニ関スル権利ハ財團法人松ヶ岡文庫ニ移転スベキ手續ヲナスモノトス 宅地 八百坪七合六勺」とあり、東慶寺檀家総代の栗田傳兵衛、小泉權兵衛、小牧源之助の三人が、その契約に同意している。以来、法人化に向けて関係者の折衝が急ピッチで進んだ。

III 松ヶ岡文庫が建つてから

財団法人松ヶ岡文庫として認可されたのは、昭和二十（一九四五）年十二月二十一日、その翌（昭和二十一（一九四六））年二月六日「財団法人」として設立の認定を受け、正式に「財団法人松ヶ岡文庫」として発足した。設立当初の役員（設立趣意書署名人）（注1参照）に就任した大部分は、安宅彌吉は勿論のこと、文庫に若干の寄附をする責任を負つた人達であつた。この設立趣意書作成の完成にあつては、野口信二（注2参照）の協力を仰いだ。その趣意書には、以下の「後援会案内状」の如く、大拙居士及び青蓮女史によつて集められた禅及び仏教一般に関する書籍を基礎にして松ヶ岡文庫を建設したい旨が記されており、切に願つた二十九名の発起人の名が連ねられていた。

（注3…後援会発起人名簿参照）

拜啓愈々御清榮奉賀候

陳者我國の仏教を世界に紹介の爲、今回渡米の途につかれし禅学界の耆宿大拙鈴木貞太郎博士は別紙趣意書の通り、同博士及び故青蓮夫人永年

禪に因縁深き鎌倉に財団法人松ヶ岡文庫設立を計画せられ候事は、戦後混迷せる我思想界に一大光明を点ずる美挙たるを疑わず候

同文庫の企画せらるる所は、仏籍の出版、その英訳、研究者の養成など多々あるも、就中仏教文化の國際的宣揚こそ其の眼目にして、この文庫をして東西学徒の交流機関たらしめんことに有之候。想ふに日本の文化財として将来真に西洋に寄与し得るものは、仏教と芸術との二大門と存候が、近時欧米諸國に於て大乘仏教研鑽の熱意鬱然として昂まり、外国人の同文庫來訪希望者も逐次に増加の折柄この事業の使命愈々大なるを覚え、下名等敢て微力拙らざる、同事業達成の爲、斡旋の勞を執らんとするものに有之、大方の諸賢に於かれても本文庫設立の趣旨に御賛襄格段の御高慮御支援相賜り度願候

昭和二十四年 月 日

發起人（五十音順）に掲げられている。（注3参照）

*財団法人松ヶ岡文庫設立趣意書

日本の靈性的自覺ハ鎌倉時代ニ入り大ニ其ノ内容ノ豊富性ヲ加ヘ就中禪ハ其ノ中ニ在リテ本質的ニ重要ナル地位ヲ占ムルニ至レリ。即チ禪ハ直ニ當時ノ武士階級ニ取入レラレ多クノ戰國武士ヲ其ノ鉗錘下ニ向ハシメタルノミナラズ進ンデ京都文化ノ中心部ニ迄モ浸透シ更ニ室町時代ニ及ビテハ實ニ日本藝術ノ各方面ヲ席セルアリ而シテ爾來江戸時代三百年ヲ經過シテ禪ト日本人ノ生活トハ多クノ面ニ於テ最早相離ルルコトヲ得サルモノトナリ從テ日本人ヲ了解セントセバ何等カノ意味ニ於テ必ス禪ノ研究ニ俟タザルベカラザルモノアルハ今更架説ノ要ナキ所トス。加之禪ハ畜ニ日本人ニ取リテ歴史的意義ヲ有スルノミニ止マラズ今後我國ガ世界文化ノ各方面ニ對シ何等カ寄與シ得ルモノアリトセバ禪ハ其ノ最モ有力ナル一項目タルベク尚又我國ガ大東亞ノ中心勢力トシテ諸民族ヲ結合セシムル上ニ於テ必要トスベキ強ナル精神的帶ハ亦之ヲ禪ニ求ムルヲ尤モ適切ト信ズルモノナリ。由來禪ハ之ヲ實修スベキモノニシテナル學問的研究ノ對象ニアラズト雖之他ニ傳心セントスル場合殊ニ從來何等傳統的環境ニ親交スルノ機會ヲ有チ得ザリシ民族ノ間ニ傳ヘントスル場合ニ於テハ職トシテ禪文學ノ研究ニ

俟タザルベカラズ然ルニ從來我國ノ禪人及學者ノ此點ニ意ヲ用ユルモノノ極メテ寥寥タリシハ吾人ノ最モ遺憾トスル所ナリ而シテ其ノ原因タルヤ固ヨリ一ナラザルベシト雖我國ニ於テ整備公開セラレタル禪文庫ノ缺如セルコト亦之ガ有力ナル一因タラザルベカラズ。

不肖鈴木大拙夙ニ此點ニ顧念スル所アリ幸ヒ大拙及亡妻青蓮兩人ニ於テ永年ニ亘リ蒐集點セル禪及佛教一般ニ関スル書籍（國・漢・英・獨・佛・梵・各文）約五千冊並ニ日本・支那・印度ノ思想研究、宗教哲學等に関スルモノ萬餘冊ニ上ル固ヨリ未タ以テ完璧トスルニ足ラズト雖我國ノ現狀ニ於テハ尚此方面ノ研究資料トシテ一個有數ノ存在タルヲ疑ハザルモノナリ仍テ之ヲ文庫ノ基本トナシ別紙目錄ノ設備及資金ヲ合セテ一個ノ財團ヲ組成シ禪ニ由縁深キ鎌倉ニ財団法人松ヶ岡文庫ヲ設立シテ永ク我文化事業ノ發展ニ貢獻セントス。

本文庫ハ上述ノ趣旨ニ基キ一面特殊ノ禪研究者ニ研究ノ資料ヲ提供スルト共ニ一面廣ク一般読書人ニ公開シテ其ノ教養ニ資シ更ニ進ンデ禪ニ関スル一般知識普及ノタメ有效適切ト認ムル書籍ノ編纂重要文献ノ複製等ヲ兼營セントスルモノニシテ其ノ國家公共ニ及ボス效ノ決シテ尠ナラザルベキハ設立者ノ堅ク信ジテ疑ハザル所ナリ。

昭和二十年 月 日

鈴木貞太郎（居士大拙）

（以下、寄付行為目錄等々有）

（設立趣意書署名人） 鈴木貞太郎 安宅彌吉 明石照男 石井光雄 岩波茂雄 小林一三 五島慶太 近藤慈彌 酒井忠正 栗田傳兵衛 加納實野口信二 平田佐矩

IV 松ヶ岡文庫と安宅彌吉

明治二十四（一八九一）年、金沢の学徒達が上京した時に下宿していた「久徴館」が本郷にあった。安宅翁は大拙先生とその下宿で初めて出会った。また、大拙先生と一緒に鎌倉円覚寺に参禅していたという鈴木達夫は、「叔父、鈴木大拙の思い出」で、そのことに少し触れている（『鈴木大拙全集』全三十巻別巻

二巻「月報」。以降五十、六十年もの長期にわたり、精神的物質的支援を大拙先生に惜しみなく続けた安宅翁の存在は計り知れない。大拙先生は安宅翁十七年忌（昭和四十一（一九六六）年二月五日）の折に、「安宅君を偲んで」と題して次のような話をされている。（要約）

「……自分はもういつ死ぬかもわからないので、死ぬ前にこの境内に是非安宅君の頌徳碑^{*}を建てたいと思います。……私がアメリカで苦学をしていた頃、ときどきお金を送ってくれました。私がアメリカから帰ってきて、仏教に関する英文の本を書いた時のことです。出版社はわれわれ貧乏書生を相手にしてくれなかったが安宅君に相談すると、喜んで出版費を出してくれました。その本を外国の大学や図書館などへ無料で配布したので、これが大きく役立って、ヨーロッパやアメリカに仏教が広がるというか、研究者が次第に多くなってきたわけです。……寺に布施することを喜捨と云いますね。喜んで捨てるというわけです。ところがある時から、安宅君は「わしのは喜捨ではなくて苦捨だぞ、苦しくて捨てるんだ、けれども君のことなら、いくらでも出すぞ」と言うて出していった。……苦捨という言葉は、安宅君の発明ですね。……安宅君はだいぶんお金を持っているから、喜捨でも苦捨でもかまわない、金を出すことは何でもないだろう。その裏にどれ程の真実の情誼があるかというについては、これまで深く考えませんでした。私が『楞伽経』を梵語から英語に訳したことがあるんですね。それを出版したときに安宅君が「ありがたい、いかにもありがたい、近頃君の本を出版してくれるのを見ると、ありがたくて涙が出る」という手紙をくれたことがあるんですね。その当時は何でもなく思うていたが、ほんとうにそんな気持ちであったのか、まことにすまんということで、今日も……泣こうまい、泣こうまいと思うがどうも涙が出るが……そんなこともあってその後、「わしが死んだら君の墓のそばに寄せてくれ」ということで、今でもお互いに墓が隣合わせになっているようなわけです。……」

（安宅彌吉、昭和二十四（一九四九）二月五日没、享年七十七）

古田は、大拙先生の全集を編纂する時や、また各ゼミ等のときなど、必ずこの安宅居士の話をされた。

「……翁の晩年の生活は枯淡そのものであったが、先生への財的援助はどんなに苦しい中にも果たされたこと。／戦災で本宅が焼失してから事業の第一線は退いて……永い間に亘って京都円福寺の本堂に不自由な室住いをさせていたということ。／大拙先生のお使いで翁を訪ねたことが度々あったが、日々の暮しは禅僧の生活のように思えたこと。／しかし、翁の晩年の生活に安住を与えたものは、この円福寺での起居ではなかったかと思うが、それは、多分、かつて鎌倉円覚寺で参禅されたことがあったその経験が翁の生活の精神的大きな支柱となったことは間違いない等々。」

昭和七（一九三二）年六月二十九日 鈴木貞太郎様（京都市小山大野町三十九 大阪市東区今橋五 安宅彌吉）

「廿六日附御面拝受、御著述の方も大に進捗之御様子にて大法のため歎喜の情に堪えせん。財界は烈いが自分は健康だから御後援は出来ると思います。醉生夢死しても貴君の著により自分の志の万分が残ると思へば、自分の一生は無駄ではなかった様な気もして、無限嬉さを感じます。何卒御健康に御成功之様と念じます、不悉」

（注）「御後援」とあるのは、同八年に刊行になった興聖寺本『六祖壇経』の影印本の出版費を指す。

また、全集編集の最中、上記の葉書が見つかったとして、古田は、「翁への慕情の切なるものを覚える。」として記述している。（『鈴木大拙全集』全三十巻別巻二巻「月報」）

この安宅の厚志友情に対し、大拙先生は翁の居士である自安に因んで、文庫の附属している建物を「自安堂」（現在の仏間）と名づけられ、以降翁の遺徳を偲んだ。また、この話を機に、頌徳碑建立の計画が急速に具体化していき、昭和四十一（一九六六）年九月の秋分の日、頌徳碑は、松ヶ岡文庫への通路と墓地への参道の交わる絶好の一角に建てられた。大拙先生は「自安」の文字と上記の「頌徳文」を六月に書き終えられて後、奇しくもこの年、七月十二日九十六歳の生涯を閉じられた。

このお二人の墓碑の横には毎年春になると鮮やかな赤いサルズベリが咲きほこる。これは古田がお二人が大好きだったことを思い、大拙先生の死後植えら

れたものである。また、最晩年古田は大拙先生有縁の方々の墓碑によく行かれた。大拙先生もまた同じように晩年よく行かれたという。安宅翁やビアトリス夫人、西田幾多郎先生の墓碑の周りの小さな落ち葉をこまめに拾い集めては、「わしが死んでしまったらこうやって掃除ができなくなるなあ」と、「でも、それは当たり前のことだなあ」と、誰に言うでもなくそれは大拙先生の独り言で、腰を伸ばしてしみじみと三人の墓碑を眺めていたこと、しかし、大拙先生のいう「当たり前」ということばに秘めた奥には、生死の事実を徹しきった何ともいえないような響き―それは実感と覚悟のともなったことば―で、「浮薄な人間を吹き飛ばすような威厳があった」と、墓碑の前で話して下さった古田の言葉は今思い出す。(因みに文庫の仏間に掲げられてある「自安堂」の文字は西田幾多郎直筆)

(*頌徳碑)「自安」

自安居士安宅彌吉君は石川県金石よなごに生まれた。君は安宅産業株式会社やすけ産業株式会社の創立者として、商社の経営に成功し、産業界に、また政界に、幾多の業績を残したことは説くまでもない。君が今ここに君の遺徳をたたえようとするのは、我が国の文化・教育の面に尽くされた君の功績のゆえんである。君はこのために財を惜しまなかった。財団法人松ヶ岡文庫設立の基礎は、まったく君の援助によるものである。また個人的なことだが、自分が研究生生活に専念し得たのも君の好意によること大であった。欧米国民が禅思想および東洋的物の見方を理解するために、自分の英文の著作が、いくらかなりとも役立つものがあつたとすれば、それはひとえに、君の精神的物質的支援のためである。君が育英事業に力を尽くし、多数の人材を養成したことも、また周知の事実である。安宅産業株式会社の今日あるを見て、君がいかに人材育成に心を砕いたかの一面を知ることができる。ここに君のこれらの功績を頌してこの碑をたてる。

V 松ヶ岡文庫と柳宗悦

昨年、関係者数名と日本民藝館をお訪ねした。書簡確認のためである。村上豊隆氏と杉山享司学芸部長とが出迎えて下さり、西館(旧柳宗悦邸)へ案内された。この邸宅から漂ってくる空気、その雰囲気が何故か松ヶ岡文庫に似ていた。文庫の設計をはじめ、民芸を漂わせる天井、柱、扉、仏壇などの建築資材、飾り棚や筆筒、電灯の笠、置物、机、長火鉢、また大拙先生が普段使われていたという茶碗類の数々、名工の花瓶、茶碗、湯呑等の陶芸品、仏間にある平銅鐶、古くなつてはいるが現在炊事場で使用しているラッソ編椅子等々、これらはすべて昭和二十五年の増改築にあたり、柳氏のお骨折りで準備された品々なのだなあ、ということが一瞬にみえてきて一同本当に驚嘆した。九月の半ばのまだ暑い最中のことであった。

安宅翁の死後、何よりも文庫存続の経営が大拙先生の脳裏を悩ましていた。しかしその一方、それに前後して、柳は「師と生徒」という間柄でこの文庫を頻繁に行き来されていた。(『鈴木大拙研究基礎資料』財団法人松ヶ岡文庫叢書第二、平成十七(二〇〇五)年三月三十日発行、桐田清秀編及び、以下書簡参照)柳の大拙先生に宛てた書簡から察するに、先生には、いつも「師に対する礼」を尽くしていることがよく伺える。それは、病床に倒れられても尚、この文庫と大拙先生をお助けしなければという、深い思いやりのある数々の言葉が、柳の書簡から多々読みとれる。

大拙先生九十歳の寿をことほぐために、知人、門下の方々からの論文が集められて一冊の記念書が出版された。それが『仏教と文化―鈴木大拙博士頌寿記念論文集―』(鈴木大拙博士頌寿記念会昭和三十五(一九六〇)年十月十八日発行)である。柳はそこに、「佛法多子なし」と題して一文している。

「……只因縁と云えば、大拙先生が米国から帰朝せられて、初めて学習院に教鞭をとられた時偶然に私はその最初の生徒(注4参照)の一人であった。多分明治四十年頃であつたらう。しかもその時先生から教えを受けたのは、仏教学ではなく、英語であった。当時私共の独逸語の先生は西田幾多郎先生であった。その頃は、両先生とも著書は殆どなく、世間でも殆ど知らない頃であった。……今から、丁度半世紀も前になる。大拙先生はその後何

年か経て、京都の大谷大学に移られたので、その間暫くご無沙汰でしたが、再び上京され、鎌倉円覚寺の正伝庵に住まれ、また近くの東慶寺内に松ヶ岡文庫を建てられたので、また、縁が結ばれて屢々お訪ねする折があり、遂には、その文庫の理事長までお引き受けする身になった。……」（昭和三十四（一九五九）年六月 下旬、於病床）

ここに次の一言も付記しておく。三重県立美術館十五周年を記念して「柳宗悦展」が催された。その時発行された図録（平成九（一九九七）年九月発行）の年譜をみてみると、大拙先生関連内容が僅かに載っている。

・昭和二十二（一九四七）年七月（正確には、七月二十九日からおよそ一週間）／大拙先生らと北陸地方講演旅行。

・昭和二十三（一九四八）年三月／鈴木大拙の委嘱により鎌倉松ヶ岡文庫理事長となる。

・昭和三十（一九五五）年一月／鎌倉松ヶ岡文庫へ禅籍を寄贈。／「佛書目録宗悦蔵」として柳墨筆の目録が現在文庫に保管されている。その寄贈仏書には、室町時代の古写本、中世末期の『碧巖録』『臨濟録』の抄物の写本や語録類などの貴重な善本が多数ある。それらは、『松ヶ岡文庫研究年報』第十二号（平成十（一九九八）年三月二十五日、松ヶ岡文庫発行）に掲載した。

・昭和三十五（一九六〇）年六月（正確には六月十六日）／鎌倉松ヶ岡文庫へ鈴木大拙を訪ねる。（現在の書齋大拙机上にある写真は、その文庫訪問の折に撮られたものである。最晩年松ヶ岡文庫へ戻ってきた大拙先生（当時九十歳）と柳宗悦（七十二歳）と松方三郎の三人の写真である（三十二頁写真）（書簡18）

・昭和三十六（一九六一）年五月三日／（柳宗悦没、享年七十三）

この大拙先生頌寿記念論文集に柳は「また縁が結ばれて屢々お訪ねする折があり」と記してある。柳と大拙先生の交流が再び始まったのである。恐らく柳との再会は、柳や明石関係書簡からも見えるように、昭和十七年前後であろうと推測できる。この柳の屢々の訪問に際して、先生は柳に多くの著書を贈られていることもわかる。（書簡2）

柳は、妙好人などの研究に尽力され、独自の仏教美学を確立した人でもあるから、先生から頂いたこれらの書籍を読みすすめるうちに、柳の心に歓喜の情が湧き起こってきたそのお姿が目に見えよう。きつと、柳の念仏観の琴線に触れたのであろう。そして、この『日本の霊性』に収められている才市の歌を読んだ柳は、妙好人の存在に、改めて認識を深められるものがあつたのではないだろうか。それは昨年、旧柳邸を訪れた時に漂っていた見えない空気のようなものを感じたと同じような感覚、つまり「ことばにはなし得ない宗教経験の事実から発せられる深遠なことばの響き」のようなものが、この僅かな文面から聞こえてくるからである。

また、この時の書簡（書簡2）の日付は、昭和二十（一九四五）年十二月十八日とある。

その頃先生は、文庫の建物は建ったものの、まだ認可されておらず、複雑な財団手続きの書類等や今後の経営と運営、刊行物出版等々で悩まれ模索しておられた時期でもある。先生との久々の邂逅で話が弾み、すっかり長居をしている内に先生から偶然文庫設立他等の話を聞いた。「先生ご計画の文庫の発展を祈って止みませぬ／陰乍ら何かのお役に立つことを致したく存じます／文庫の方へも逐次器物をお届け致します心組でをります」。柳から先生に宛てた礼状である。ここにも柳の一念の思いが響いてくる。「先生の意図をうけて積極的に関係がさらに展開されるであろうことの子測が、この一文からも読みとれる。

（書簡1）

昭和十九（一九四四）年正月元旦（円覚寺正伝宛て封書 静岡市大谷

二六一〇 鈴木篤方 柳宗悦）

よき元旦をお迎えの事とお喜びいたします／先日は久しぶりでお目にかかり／真に嬉しき想ひでありました／ちつとも変わっておられないのと／元氣なお話ぶりを見／て祝福にたえません／併し先生の事いつも念頭を去りません／宅からの便り／によりますと御本をお送り下されし由／まだ廻送して参りませんが／きつと希ひせし禅宗史の本だと存じます／随分

探して得られませんでしたので／有難き極みです／過日頂きし「禪百題」はここに持参致し有難く読んでをります／ここは静岡市郊外で久能山の真近くであります／その内是非お訪ね申上度／前以て御都合お伺い致します／小生の所へも是非御光来希度／之も何れお打合せ致します／先は御礼迄
昭和十九年正月元旦 大拙先生 柳 宗悦

(書簡2)

昭和二十(一九四五)年十二月十七日付け封書(正伝庵宛 東京都目黒区駒場町八六一)

大拙先生 過日は思はずも長居を致し失礼致しました／久々で親しくお会い致し御／元氣な御様子を見大変嬉しく存じました／その節は予々欲しく思ひし書物沢山恐縮致しました／誠に「幸な重さ」を背負って帰り／あの晩から読みました「禪の思想」中の「行為」篇は先生による文字禪の極致の様に感ぜられ／大変有難く読みました／「日本的靈性」中の禪と念仏との交流に就ては／小生の心中を目下往来せる最も魅力ある題材とて／此冬に熟読するのを楽しみにしてをります／浅原才市の歌を拾ひ読み致しましたが／誠に驚嘆すべきものを感じました／先生ご計画の文庫の発展を祈って止みません／陰乍ら何かお役に立つことを致したく存じます／去る十二日同心会に御出席かと存じましたが／御会ひ出来ず残念でありました／実は不断使ひにして頂きたき湯呑一個致したのでした／この次は二十六日と存じます／そのうち抹茶碗もよろしきもの選んで参ります／文庫の方へも遂次器物をお届け致す心組でをります／又是非お訪ね致します
／二月十七日 柳 宗悦

(書簡3)

昭和二十一(一九四六)年十二月二十八日付け葉書(正伝庵宛 東京都目黒区駒場町八六一)

御平安の事と存じます／去廿六日同心会へ出席かと存じ／御約束の抹茶碗及湯呑持参致したるも／御見えなく残念でありました／小生正月及二月東京を離れますので／三月の参上致す心組でをります／「日本的靈性」日々
拝読

(書簡4)

昭和二十一(一九四六)年三月二十四日付け葉書(正伝庵大拙先生宛 駒場柳宗悦)

京都では失礼申上りました／御無事御帰宅の事と存じます／東京にて御講演の件一同／大楽みに致してをりましたが／先方から僅か宗教講演には十分間より時間をくれぬので／それで鎌倉より熊々お出下さるの失礼に思へ／断念致す事と相成りました／大に残念に存じます／来月早々一度参上の心組であります／…急ぎ／(書簡1〜4)『鈴木大拙全集』第二次「月報」

昭和二十一(一九四六)年、長野県松本市に民藝協会が発足した。そこで柳宗悦や陶芸家の濱田庄司らは松本訪問の機会が多くなった。なぜなら、民藝運動の創始者であるからである。池田三四郎の言葉の一部を挿入してみよう。

「……松本市は、戦災をうけなかつたものの、伝統的木工技術を伝えてきた職人群を抱えて、また、インフレの波にさらされていつのまにか木工業は、他の地方に立ち遅れていた。大正末期の木工業の隆盛を思いながらも、この巻き返しをどこから手をつけたらよいか迷っていた松本市は、柳先生に相談したことから、安川慶一氏との交流がはじまった。……民藝の理想主義は職人達に希望はもたせても、当時日本の経済はそれを受け入れるにはまだ日が浅かった。……ましてや朝鮮李朝木工は当時松本の木工界には奇異としか写らなかつた。そこに松本木工指導を民藝運動の中心とするため、昭和二十三(一九四八)年四月、富山の安川慶一氏が松本市へ乗り込んで来た。……この安川慶一氏は、当時民藝協会において重きをなしており、柳直伝の審美眼は相当の域に達した人であるといわれていた。……柳からその話を受けた安川は「鎌倉松ヶ岡文庫の仏壇の設計を受け、富山の木工職人を引き連れて鎌倉に出張したという、これは終戦後幾らも経っていない頃の話であったというから、多分昭和二十二、三年の頃であったと思う」と、池田は云う。『生涯求美』平成二(一九九〇)年一月十五日、株式会社用美社発行、著「安川慶一、文」池田三四郎)文庫の仏壇の設計を大拙先生は柳に托したのだということが、次の書簡からも読みとれる。

(書簡5)

昭和二十四(一九四九)年四月二十八日 加納実・一枝様(富山県高岡市大坪光誓寺 神奈川県大船岡覚寺正伝庵より)(以下、部分のみ抜粋)

……/文庫によい仏壇が出来た/柳君と安川君の御陰だ/亡きおこのが居たらとお思ふが/彼女の位牌もそこに納めておかう……/取りあへず早々/四月二十八日 鈴木拝

(書簡6)

昭和二十四(一九四九)年五月三日 加納実様(富山県高岡市大坪光誓寺 神奈川県大船岡覚寺正伝庵より)

……/安川氏仏壇を作ってくれました/柳君もよく出来たと云っています/死んで帰れば/そこへ入ります/ご家内様へもよろしく/ご心配でしよう/人生色々の事がある/君らはまだ先がながい

五月三日 大拙拝 加納君侍史(『鈴木大拙全集』[増補新版]第三十七巻 書簡二(一九四〇—一九五三))

大拙先生は安宅自安居士の位牌をなんとしても文庫に奉安しなければならぬと考えていた矢先であったから、この柳を介しての安川との関わりにはきつと安堵されるものがあつたかと察せられる。

先生は、またこの柳の民藝館を屢々訪れている。その何かの集まりの席で、先生は、「學術助力を仰ぎたい旨」を明石をはじめ若干の財界人に依頼された。柳と共に同席していた古田はその時のことをよく覚えていてとしてさらに続ける。

「……大拙先生が明石照男と初めて出会われたのは、この柳に招かれた柳邸宅にお出になつた時、それは、柳が前もって明石に通じてあつて、出会われることになつたのか、或いは偶然のことであつたか、そのあたりは定かでないが……何れにしろ先生と明石双方を引き合わせたのは柳によるもので、民藝館に大拙先生をお迎えの縁をつくつて下さつたのである……また、この明石と柳とは、かねてからの昵懇の間柄であり、当時明石は、金融経済界の長老で第一銀行の頭取でもあり、日本學術振興会の理事でもあつた……」と。(『鈴木大拙全集』第二次「月報」)

終戦前後、建築資材の入手が困難な時期に、大拙先生は文庫建設の工事を急いでいた。というのは、当時大拙先生は、自分の集められたこれら膨大な貴重な文献が混乱の中に散失し、或いは、戦渦によって失われることを危惧しておられた。また、そうした非常事態にあればあるだけに、文化施設に力を入れなくてはならないとも考えていたからである。大拙先生の脳裏には、はやくから戦後処理に備えなくてはならないとする用意があつたことは、先に述べた文庫の設立趣意書にもはっきりと示されている。

文庫が設立認可を受けたのは、昭和二十年十二月末である。大拙先生は既に七十五歳に達していた。柳の一文を引いてみる。

「……大拙先生は早くから古典的禅籍を立派な永久的善本で出版することに熱意を注いでこられた。しかしそれは、大隈限定出版であるから、禅の分野に疎遠な一般の読者には全く知られていないせいにか、「限定本目録」等を好んで出している人達の収録の中にも先生の編集本は決して現れてはこない。……先生を禅学の鴻学として尊ぶ人は大勢いるが、先生の学者としての一生の半面に、こういう善本の刊行への並々ならぬ熱意があることを知っている人は少ないのではあるまいか。また日本に禅者は多く、また禅文学を尊ぶ人は多いだろうが、先生のように禅籍の善本の編纂刊行に心を込められた方は殆ど他にいないのではあるまいか……」と。(昭和三十四(一九五九)年『春秋』(第一巻第七号「かけがえのない人—鈴木大拙先生のこと—」)

この大拙先生と明石との初対面がやがて二人の間に親しい交渉が結ばれていく縁となり、「このお二人の談合から助成金を幸に得る所以となつた」と、古田はのちに記している。(『鈴木大拙全集』第二次「月報」)

その後、明石から大拙先生宛に、その申し出を快く受け入れて下さつたことの「助成金交付確定」の書簡がある。(書簡7)

(その日付は、昭和十七(一九四二)年十一月三日付とある)
(書簡7)

昭和十七(一九四二)年十一月三日付

東京小石川区茗荷谷町六六 鎌倉円覚寺内鈴木先生宛

拝啓

益々御清適奉賀候

陳者予而御申聞の件先日役員会ニ於確定致候処 多忙の為つい御しらせも延引致本日正式の通知貴方へも参候ものと存じ候へ共 右以書中得貴意度如此御座候 敬具 十一月二日 鈴木大拙先生

明石照男

VI 松ヶ岡文庫の増改築

大拙先生は、昭和二十四（一九四九）年以後、三十三年まで、休暇を利用して短期間の帰国はあるが、主としてアメリカを拠点にして、精力的な活動を続けていた。晩年の小林勇は、「大拙先生追懐」に次のように一文をしたためてゐる。

「……先生が戦後はじめてアメリカに行かれたのは、昭和二十四年のことである。出発に先だつて、明石照男理事の胆いりで、財界の人々が工業倶楽部に集まった。『松ヶ岡文庫』のために寄附を仰ぐためであった。その時の先生の挨拶は、自分が老齢の身を以てアメリカに行くのは、アメリカの人々が大乘仏教を少しでも知ることが世界の平和に役立つと思うからだという趣旨であった。その後先生は何回も渡米され、多くのアメリカ人に影響を与えられた。それと共にアメリカ人からの先生への寄附（『略年譜』参照）があった。」（『鈴木大拙全集』全二十巻 別巻二巻「月報」）

因みに、この小林勇を松ヶ岡文庫理事に推薦したのは明石照男である。

明石の世話で、松ヶ岡文庫後援会（注3参照）が日本工業倶楽部に設けられたことは先に述べたが、一方その頃文庫は、文庫の蔵書の増加にともない、この財界からの財募金をもとに、昭和二十四（一九四九）年、松ヶ岡文庫の増改築の企画があがっていた。

柳と相談した明石は、それに関係するような役員選出相談なども大拙先生宛に多々書簡で触れている。例えば建築方面協力の面からの清水や、出版面からの小林等の協力を仰ぎたい旨の理事推薦者に関する書信内容（昭和二十三年二月十七日及び五月二十七日付大磯より円覚寺正伝庵宛書簡）や、また、先生か

ら贈られた数多の書籍に対してのその都度の謝辞や、その読後感を含めた書面（昭和十八年一月十二日付、二十二年二月七日、二十三年二月十八日付円覚寺正伝庵宛書）や、また、先生が渡米される二十四年二月には、突然円覚寺訪問等からは、明石の人の柄の一面が偲ばれる（昭和二十四年二月七日付円覚寺正伝庵書信）等、何れの文面にも明石が先生に対して畏敬の念を懐いていることがこれらの書面からはよく読みとることができる。（紙面上、各々の書簡内容省く。詳細は、『鈴木大拙全集』第二次参照）

松ヶ岡文庫後援会による文庫増築工事が完了したのは、昭和二十五（一九五〇）年四月である。現在の二階建の応接間と閲覧室である。この二階建応接間（先生の名付けた「也風流庵」）と閲覧室の増改築にあたっては、重ねて明石の並々ならぬ援助を受けたと古田は記す。大拙先生はこの増改築の間在米中であり、現在の応接間と閲覧室すべての工事が終わった後、昭和二十六（一九五二）年六月九日に、一時帰国された。その帰国を待つて完成報告会が開かれることとなった。大磯から松ヶ岡文庫へ宛てた明石の昭和二十六年六月十五日付書信は、その報告会開催日の書信である（書簡8）。

昭和二十六（一九五二）年六月十五日附 松ヶ岡文庫鈴木大拙先生宛て 大磯明石照男

拝啓 益御元氣ニ御婦朝被遊候段奉慶賀候 陳者一度伺申上度候存

不得貴意失礼仕居候 松ヶ岡文庫後援会役員会ハ二十九日ト決定仕候ニついでハ 従來の経過を申上げ又將來ノ運行など御懇請仕度候……（以下省略）

……敬具 六月十四日 鈴木大拙玉案下

明石照男

明石の先生宛書信は、他、国際葉書等も含めると、文庫に二十二通遺る。（明石照男、昭和三十一（一九五六）年九月二十九日没、享年七十五）

その後、先生が尊敬してやまなかったコーネリアス・クレイン氏の協力より、昭和二十六（一九五一）年アメリカから先生経由で氏の寄附金が送金されてきた。この寄付金によって、石井積翠の大部分を収めた。さらに、翌昭和二十七

(一九五二)年、再びクレイン氏の寄附が先生より送金されてきた。それによって、二階建第一新書庫(現在和漢書保管の第一新書庫「クレイン文庫」)が完成したのである。大拙先生は、このクレインのちに「釈迦涅槃図」^{***}を贈られた。^{***}「釈迦涅槃図」をはじめ、現在文庫に保管されている多くのこれらの版木は、平成十七(二〇〇五)年十月に、寸法を測り写真に収めて整理した。これらの版木が多摩美術大学美術館の目に留まり、今回のご縁に繋がったことをここに敢えて記す、多摩美術大学美術館で展覧される。

また、大拙先生は昭和二十七(一九五二)年十月十二日ニューヨークから、新たに建築されたこれらの名称を付け、これら総称して「松ヶ岡文庫」というと、古田宛に書信している(書簡10)。

古田は、また、このクレインの人名を次のようにも記している。

「ニューヨーク滞在の先生の身辺を何かと世話し、松ヶ岡文庫の増築費や図書購入費に多額の寄附を惜しまれなかった人である。またニューヨークの禅研究会を創立した人である。文庫には、その遺影を掲げてその徳を追慕している」と。(上記『全集』第二次「月報」)

(「コーネリアス・クレイン」、昭和三十七(一九六二)年没、享年五十七)(書簡9)

昭和二十六(一九五二)年五月二十三日

神奈川県大船局内山ノ内円覚寺正伝庵 古田紹欽様 二九二二

Oahu Avenue, Honolulu, T.H. U.S.A.より「航空便」(抜粋のみ)

古田君／……六月九日(土曜)十一時三十分羽田着、しばらくぶりに御目にかかること信ず／わしが帰国すると、間もなく、即ち十三日に、紐育からの自分の知人二名が日本に来ることになってきた、／この人は自分が勧めて日本視察をやるやうになったのだ、禅の日本文化における影響を実際に見たいと云ふのである、一人はクレインと云って、自分の兼て知付きになった人の甥に当る、……クレインは大金持、文庫のために尽力してくれる約束をした、石井さんの本を全部買ひとり、庫を今一つ建ててくれると信ずる、……それからその人々を案内しなくてはならぬ、アランに頼んだ、わしも少しは連れ立って歩こう、伊深へ案内したいと思ふ、クレイ

ンは二週間ほどしか居られない、……出来るだけ二人のために各種便宜を計りたい、アランに相談してみてくれ、柳君にも相談して、二人の視察者のために考へてやりたい。／五月二十三日大拙拝

(書簡10)

昭和二十七(一九五二)年十月十二日

神奈川県大船局内山ノ内円覚寺正伝庵 古田紹欽君 Butler Hall, 88 Morningside Drive, New York 27 N.Y., U.S.A.より「航空便」

古田君

楞伽の梵語をこちらへ送って貰ったことがあるが、今探すが見えぬ、わしが使った分は文庫に残してあると思ふが、／如何、／庫の建築は十分に用心してほしい、／必ずしも急ぐに及ばぬ、／それよりも水の供給が豊富でなくてはならぬ、／火事の場合を考えると、ぞっとする、／何れも『火の用心』をよく言ひつけておいてほしい、／建築の名をそれぞれ付けておく、／一、柳沢の居るところを、随庵、／一、段の上を自庵堂、／一、新築の二階建てを也風流庵、／第一書庫(現在の書齋をいう)を青蓮文庫、／一、今度たてるのをクレイン文庫、／全体を松ヶ岡文庫、／……以下省略／御大事に／十月十二日 鈴木拝

(『鈴木大拙全集』「増補新版」第三十七巻 書簡二(一九四〇)一九五三)

【補足】V「松ヶ岡文庫と柳宗悦」の関連書簡資料

①柳宗悦→鈴木大拙宛書簡文庫に三十三通遺るうち、十四通(他、関連事項のみ柳!古田宛一通、大原総一郎!大拙宛一通)抜粋した。

②鈴木大拙!柳宗悦宛書簡十八通のうち、四通(他、大拙!古田宛一通)を抜粋した。

【柳宗悦→鈴木大拙宛】(三十三通のうち十四通のみ部分抜粋)

(書簡11)

昭和二十七(一九五二)年一月二十四日 東京目黒駒場より NY大拙先生宛

「賀正 御壮健にて新年をお迎えの事と存じます。此手紙が着く頃はNYへお移りのことかと存じます。大に筆無精致し申し訳なきことではありますが、何かにつけ先生のお噂をしています。正月には放送あり長与との対談で先生の事が話題に上がりました。去年の暮れには、松ヶ岡文庫で古画禅籍などの陳列を致し、今までにない大勢の来観者でありました。春秋社より出版の先生の選集は第一巻『妙好人』が出ました。今度はどうやら引き続き出版されそうで、有難い事に思っています。今年英国で世界陶織工大会があり、小生招かれて濱田志賀等とこの五月に渡英致します。十月頃には米国に参りますが、先生はその頃もうご帰国でしょうか。若し御滞在中でしたらお訪ね致したく、その日を楽しみにしております。……」昭和二十七年正月
大拙先生 柳 宗悦

(書簡12)

昭和二十七年十一月二十五日 minesoda U.S.A. St. Paul Gallery 氣付先生宛

「……今日古田君から便りあり、材料費が急に高くなったので工事を急がねばならぬ様子であります。寒さが加わって参りましたから、事実上仕事は来春になると存じます。竣工は早くて四五月頃故、二月に帰京致しましたら、早速古田君と連絡をとり、善所致したく存じます。先生の選集出版無事進捗の模様、大変嬉しく存じました。吾々は多くの人々の好意に浴し、どこでも大歓迎をうけ幸な旅を続けております。東洋思想、特に仏教思想から見た美への解釈は各方面から悦ばら、東洋人が将来為すべき仕事の色々あることが、切に感じられました。之だけでも今度の旅の利益であったと存じます。……」大拙先生 宗悦 十一月二十五日

(書簡13)

昭和三十三年(一九五八)年六月十一日

「大拙先生 Scotland 及 Spain よりの絵葉書嬉しく拝見致しました。いつも御見舞い頂き恐縮に存じます。先生の御健在を何よりお喜び致します。七月頃一度ご帰京とかお噂を聞きました、併し小生はまだ文庫に先生をお迎えする事が出来ぬ身で大変残念に存じます。中風は大に厄介な病氣にて今

以て歩行不自由にて此頃は目眩甚しく食事もし困難を来しました。併し全体としては少しづつよろしき様子に覚えます。文庫の事は常に念頭にあり、先生にご心配を残さぬよう、色々考えを廻らせております。只目下不自由の身で誠に相すまぬ心であります。」
六月十一日

(書簡14)

昭和三十四(一九五八)年十一月二十一日

「お手紙頂き恐縮に存じます。カレンダーは昨日発送致しましたので、休心希ひ上げます。古田君より電話で、火鉢その他は入用の事分り、それそれ手配致しましたが、湯釜と自在鉤は、急には、得難く、暫くお待ち希ひ上げます。それまでにお役に立つように長火鉢と土瓶、火ばし、灰ならし、土瓶敷その他い入用と思われるもの揃いととのへましたので、近日中に発送申し上げます。但し長火鉢に入用の吉原五徳は月末迄入手出来ず、之は後よりお届け致します。又使つて頂いた上で、更に入用の品あらば、何なりと御申付希ひたく存じます……」
十一月二十一日

(書簡15)

昭和三十五(一九六〇)年二月二十八日

「御無事御迎春の事とお喜び申し上げます。過日朝日新聞社の人が参り、小生の今回の授賞には先生のご推薦があった由を聞かせてくれました。……過日岡本さん御来訪下されその節は大変美味なお菓子を頂き、丁度松方三郎も来合せて共々大変おいしく頂戴致しました。……『趙州録』のこと秋月君からその後連絡なく、近々是非会いたいと存じております。又その上にて御報告申し上げます。……」

(書簡16)

昭和三十五(一九六〇)年四月二十二日

「過日は御来駕頂き恐縮に存じます。その節一寸お話致しましたが、小生病気回復の日まで松ヶ岡理事長の位置を豫てよう松方三郎君に代わってもら方よろしくと存ぜられ同君相談いたしたく存せしところ、幸ひ昨日来訪

を受けましたので、話し合いましたところ、内諾を得ました。……就いては五月下旬、先生のご都合よき日を伺った上で二人で参上し、お打ち合わせをしたく存じます。……久々に文庫に先生生お訪ねするのを楽しみにしてをります。」四月二十二日 大拙先生 柳 宗悦

(書簡17)

昭和三十五(一九六〇)年五月二十九日

「京都より既に御帰りの事を知りました。松方三郎と一緒に伺いたく思いますが、同君は、火、木、土が都合よろしき由、就いては来る六月九日(木)又は、六月十一日(土)に参上致したいと存じますが、先生のご都合は如何でしょう。……先生のご都合を御一報希つれば幸甚に存じます。」五月二十九日 大拙先生 柳 宗悦

(書簡18)

昭和三十五(一九六〇)年六月十三日

「前略 もう病院より鎌倉の方へお帰りの事と存じます。何事もなく御健在である事をお祈りしております。扱、古田君や松方君を通じ、お話し上げました来る十六日(木)参上致し度存じてをります。雨さへ激しくなくば同日午前十一時に鎌倉に着く予定でをります。松方夫妻も参上の筈。午後一時頃まで御邪魔致したく、弁当持参で参りますから、何もそちらにて御用意なき様希ひ上げます。同行者は多分五六名になるかと存じます。先は万々お会ひの上取りあえずお報らせ遣……」

六月十三日 鈴木大拙先生 柳 宗悦

(書簡19)

昭和三十五(一九六〇)年十月三十一日

「度々の御見舞い頂き恐縮に存じます。……一昨日松方の来訪を受け、文庫募金の件、漸く軌道に乗りし由を知り大変嬉しく存じました。川北さんの御考えもあり、一仟万円の募金計画もほぼ立ちし由にて、有難く存じます。何れ一度先生の都合良き日を待って、国際会館にてお集まりを希ひ、小生も是非出席いたしたく存じております。先生にお届けしたき一物あり、何れ乙訓君に托してお届けしたく思います。先ずは御礼方々御挨拶まで、

十月末日 大拙先生 柳 宗悦」

(19関連書簡)

昭和三十五(一九六〇)年九月二十日付 柳宗悦―古田紹欽宛て

「お便り拜見。松方とは、二回ほど会って色々相談しました。結局、川北さんその他四、五人の方々が集まって募金をして下さる事になり、来月に一同国際会館で集まりをする事にほぼ決めました。丁度、十月中旬から二十五日頃まで民藝館で唐招提寺所蔵の平安鎌倉時代の印佛と摺佛との大きな展示をしますので、鈴木先生にも貴兄にも見て頂きたく、十月二十二日(土)に御来館希ひ、その日一緒に国際会館に向く事に、ほぼ決めて、万事松方が世話してくれる事になりました。先生の方には小生も右の旨を書きます。」

(書簡20)

昭和三十七(一九六三)年一月二十五日

大原総一郎より！大拙先生宛

「拜啓 今年は思いがけぬ厳寒にて、特に西日本は関東よりも寒く、雪も水も十日以上も残って居るような有様でございますが、その後お変わりませず御壮健の事と拝察致します。偕者、此の度は『趙州禪師語録』一卷御恵送にあずかり有難く落手致しました。一見故柳宗悦氏からの贈物かと思ひ、中を開いて、『亡友柳君を偲びて』と記されてあるのを見出し、はじめて先生の御真情を理解致しました。何よりの記念として座右に備え、養心の糧と致したいと考へに居ります。小生十代の頃備後仏通寺にて参禅、無字の公案を与えられた事を思ひ浮かべました。先は取敢へず右御礼申上げたく、尚此の上とも一層御自愛の程をお祈り申上げます。草々 一月二十六日 大原総一郎 鈴木大拙先生」

【鈴木大拙先生↓柳宗悦宛】(十八通のうち四通のみ抜粋)

(書簡21)

昭和三十五(一九六〇)年六月二十七日 大拙拝

柳君/先日は御障りもなく、御帰京のように伺いまして、何れも喜んでおります。/その節は色々の御志を頂きまして、ありがたく御礼申し上げます。

まんじゅう蒸し、堂々したにも。時に使用いたします。／松方くんも快諾してくれて、有り難く御礼申し上げます。／わしもまだ生きて居るうちは、理事長として勝手に何とかやりますが、死後は、君等御両君、古田氏の相談相手になってやって頂ければこれにこしたことはありません。／何とそよろしく。増築「第三書庫」はまだ始めて居ません。／梅雨の中に、樹木の移植するとういことかと思ひますけど。／御大事にと祈り上げて居ます。

頓首

(21 関連書簡)

昭和三十五（一九六〇）年六月二十七日付 大拙先生→古田宛（抜粋）

古田君／六月二十七日／大拙／お手紙拝受／普請はまだ始めて居ない／梅雨のうちに、移樹をやっておけばよいと思ふ／先頃柳・松方、何れも来山／柳君中々元気で／無事に帰った様子／何よりであった／文庫後援会のよなものを作って／松方君に音頭をとって貰ふたらとの事であった／君も何やら考えて居るはずと信ず／帰ったら、何れもと相談してくれ玉へ、／あさって（水曜）に、出光さんが来るとの電話があつた、／……御大事に匆々

(書簡22)

昭和三十五（一九六〇）年十月十四日 朝八時 拙拝

柳君／少しお加減が悪いとの事、無事ですか。／御養生、無理をしないように、なさいませ。／只今から関西地方に旅立ちます。十日ほど留守に致します。／帰ったらお目にかかりたいと思ひます。／下の工事進捗します。多少金槌の音がします。／切に御無事を祈ります。 草々

(書簡23)

昭和三十五（一九六〇）年十一月十二日 大拙拝

柳君／乙訓君を通じて、結構な行燈、御志のほど、厚く御礼申し上げます。／少し良くなったと云つても、注意に注意を加えてくれぐれも御大事になされませ。／切に切に望む。／わしは毎日あくせくとして居る。／「仏教と文化」への貴稿面白く拝読。／平常心是道、これが中なか思うように行かぬ。一生の修行です。 頓首

(書簡24)

昭和三十五（一九六〇）年十二月十六日 鈴木大拙拝

柳君／その後御起居如何。／余り無理をなさらぬよう希い上げます。／明晩いよいよ印度へ参ります。／好加減にして参りたいと思ひます。／「日暮れて途遠し」で、こまっています。何れ帰ったら御目にかかります。／暖かくなつたら、文庫を見に来てください。／何れもさまへよろしく。

頓首

(当市寿福寺の伝、趙州の木像の写真をとりました。若過ぎるやうです。)

VII 大拙先生の若者への願いと松ヶ岡文庫の『文化財』

昭和三十一（一九五六）年十月、アーノルド・ジョセフ・トインビー夫妻が来日になった。先生は在アメリカであつたので、先生からは、斎藤寿福庵老に細かい配慮をするように指示があり、わざわざ松ヶ岡文庫に来庫なさつた。その案内役には、当時文庫の理事で、先生の晩年に交わりが柳と共に深かつた松方三郎夫妻（共同通信社長、国際ジャーナリスト）と翻訳家の深沢正策氏があてられた。その時の状況を、朝比奈宗源（花押）老師は、同年十一月十九日付大拙先生宛に次のように書信している。

「……十三日に来鎌倉、古田君も柳君も不在なので、私にいわれ、午前中雨の日でしたが、松方三郎夫妻と深沢氏の通訳で書庫をくまなく御見せしました……書庫は決して豊富とはいえないが、みな鈴木が若い時から乏しい生活の中から購入し研究した彼の血肉のようなものだ、ただ買い集めたものではない」というと、教授も深くうなずいていました……」と。

一九五〇（昭和二十五）年二月から、大拙先生（当時八十歳）は、ハワイ大学の講義を終えて、アメリカ本土に渡り、クレアモント大学に続いて、イエール、ハーバード、コルネル、プリンストン、コロンビア、シカゴの諸大学で講義を続けられ、その十月には、ニューヨークのユニオン神学校の客舎に止宿になつていた。先生が松永安左エ門に宛てた手紙がある。その一部を紹介する。

「……先頃フォード財団の設立が公にせられたとき、その趣意書の中に、近代機械文化の進むにつれて、人間創造力の減退に関する一項があつたと憶

えている。これは自分が当地に来てから更にその感を深うするもので、このままに進めば、米国人の思惟の上にも創造的深遠性及自由性を欠くようになるに決まっていると感ぜられるのである。

それにつけても、自分は東洋、特に日本の若い人達が、何かにつけ欧米化せられて、東洋的深さと自由とを失うようになりはしないかと危むものである。全体化傾向を帯びること頗る深厚な共産主義の如きも、人間を機械化し奴隷化せんとする恐れがある。欧米殊に米国の万事を機械で押し通さんとするとところにも、この危惧が感ぜられる。個人主義にも民主主義にも共産主義にも、共通なところがあるように感ぜられる。これは近代思想又は科学思想の流行と共に発生したものであろう。

若い人達は、東洋心理の奥に自然そのものと融合せんとする華嚴思想の深きもののあることを感得して欲しい。

「流転は是れ不流転の転」なりとか、「一異無礙にして流れて礙流れざるなり」というような思想には、今日欧米の人の考え方と行方を異にするものがある。これを認得しなくてはならぬのである。……科学者の心の奥にも、遂に東洋的なものに到礙らざれば止まぬものがあると、自分は信じて疑わない。欧米人の著述によりて東洋人自らが反省の機会を与えられるも、亦時勢であらう。

西暦千九百五十年十月 紐育市ユニオン神学校の客舎―右にグラントの墓を見、左にリバーサイド教会の高塔を仰ぎて 鈴木大拙記

松永翁は、トインビー著書『歴史の研究』の第一巻邦訳にあたり、「刊行のことば」の中に、この書を邦訳して刊行するに至った経緯について触れている。本書の出版を大拙先生にすすめられたこと、自分が自らヨーロッパに赴きトインビー博士を訪ね、オックスフォード大学出版部から、この『歴史の研究』全巻の日本語版の版權を得たことや、翁に宛てた先生の書信が続いている。

「自分はトインビー博士に貴君が行くことを手紙で知らせておいた。できるなら、博士の『歴史の研究』を日本人に読ませたいからだ。／戦前の日本人は、一種偏狂の頭でっかちで、物質面と精神面の調和を取り損なうて識者からみれば判り切った敗戦という惨めな時代をつくり出した。／戦後は反対に、

工業力においても、生産技術においても、世界のどこの国にも負けない状態になりながら、なおかつ敗戦と敗北感につながるコンプレックスが、とくにインテリ的な指導者の間に甚しい。『歴史の研究』が広く日本人に読まれることになれば、こういう傾向に対し良薬になるだろう」

翁は大拙先生からこの励みの手紙を頂いてヨーロッパにトインビーを訪ねるため出かけたのが、一九五四（昭和二十九）年のことである。この『歴史の研究』日本語版第一巻が邦訳になったのは、一九六六（昭和四十一）年四月である。大拙先生はこの邦訳刊行にあたり、推薦文を本書カバーの袖に一文している。

「……トインビーの歴史に関する思想を批評し、紹介する専門的知識は、自分にはない。それで推薦文など書くべく資格もないのである。それにも拘らず、今何か筆をとらんとするのは、少し理由がある。それは、トインビー氏が宗教に関して寛容的精神の保有者であるからである。東洋の思想についても能く了解して居る。その一例は仏教における菩薩の存在である。人間は死後天界または極楽に往生して無限の歓楽をわがものにすることを、その生涯の目的とするべきでない。たとひ自分は成仏しなくても、菩薩の地位に止まるとも、一切衆生のために、無功用の働きをして、すべてを幸福の途に進めたいと云ふのである。無功用の働きとは無縁の慈悲である。これが理想的人間像であると云ふ仏教の思想をトインビー氏は十分に理解して、快くこれを自分の学説に取り入れるのである。これだけを見て、トインビー氏の学者的態度の公平にして少しの偏見もないことを知るべきである。」

その博識宏方なる点については、此の龐大なる氏の著述を見ただけでも、驚歎に値する。今更自分の如きものの吹聴を要せぬ。とに角、どの一部でも取上げて精読するそれだけで、読者は何れもその分に応じて、それぞれ思想的に何か利益するところ多きを疑はぬ。末尾ではあるが、松永氏が此大事業を完成せんとして、この余生をこれに捧げると云ふ大奉公の精神は、実に東洋的菩薩行の真面目の発揚に外ならぬことを云っておきたい。

鈴木大拙

（『歴史の研究』第一巻（昭和四十一（一九六六）年四月五日発行、著者A）

J・トインビー、発行者松永安佐エ門、発行所「歴史の研究」刊行会）この大拙先生の文に目を通した時、直ぐに先生の『反省会雑誌』に寄せられた巻頭言（当時十九歳）を思い出した。

「夫れ吾人が有する前途無限の希望は誠に遠大にして、其之を成就せんと欲するの熱衷、亦実に鞏固也。目下吾人の有する希望の海路へ帆掛んと欲するものなり。研磨刻苦、其の多事にして且迅速を要するは、言を待たず。吾人の歩み運び力を致すは、肉体の快楽にあらずして、知識上の快楽にあり。知識上の快楽にあらずして、道徳上の快楽にあり。否肉体知識及び道徳上の快楽よりは、寧ろ、仏陀のために身心を犠牲に供する無上の快楽にあるなり。」

松永翁の夫人は、晩年よくこの文庫へ大拙先生を訪問している。夫人の遺影が今も自安堂の仏壇に安置されている。（松永安左エ門、昭和四十六（一九七二）年六月十六日没、享年九十五）

古田宛書簡より大拙先生の若者に奮起を願う文もここに抜粋しておく。

（書簡25）

昭和二十五（一九五〇）年十一月三十日 神奈川県大船局円覚寺正伝庵
古田紹欽様 六〇六 West 122nd St., New York 27, N.Y., U.S.A.より「航空便」

古田紹欽君侍史／色々御世話になります、多謝多謝／大久保君の増経受取／デマチーノの博士論文の世話をやいて居るので、その材料に要るのです、大分時間を割かなくてはならず、多少困ると思ふこともあるが、中々熱心であり、禅に関する了解も次第に深まり行くやうだし、何とかして一人でも、その方面に働くものがあればと思つて、手伝つて居る、機会があれば、又日本に来て参禅を実際にやってみて欲しいと希つて居る、……ドイツ及マカオからの手紙受取る、ドイツにもフランスにもイギリスにも、いくらかつつ禅が知られてくるのは、うれしい、こちらの大学でも先生や学生と大に問答した、学生に関心を持つものも出来るやうだ、先生など、わしの講ずるやうな仏教は初耳だと云つて居る、東洋即ち支那や日本に発達した仏教は西洋に知られて居ない、これの出来るのは、今のところ日本だけだ、

若い人達の奮闘を望む、自分がいくらか途を開いておいても、続くものがない、いけない、決して小成に安んぜぬこと、吾等の使命の大なることを十分に感じて、それに応ずる準備を怠らぬこと、……何れへもよろしく、御大事に、十一月三十日鈴木生拜

（書簡26）

昭和二十六（一九五二）年五月二十七日 神奈川県大船局円覚寺内正伝庵
古田紹欽様 二九二二 Oahu Avenue, Honolulu, T.H.より「航空便」

古田君／……石井さんの蔵書中、神会録や絶観論のなくなったのは惜しい、行先がわかればマイクロフィルムで撮影すればよい、沢庵の臨濟録抄は残つて居るのだろうか、珍本は悉く撮影しておくべきである、蔵書は（懸物なども入れて）悉く買ひたい、散佚しては惜しい、松ヶ岡文庫を禅文庫として、世界唯一のものとするべきだ、藤川君からは十数万円ほど寄附すると云つて居た、……／今度十三日に日本へ入国するクレイン氏は何かと頼りになるべし、愈々上陸の上は、文庫を実地に案内したい、それがため自分も多少の時間を削らなくてはなるまし、生きて居る間は、文庫も何とかなるとしても、死後の経営が大事だ、どうしても、この文庫を基礎にして、学問的に大に役立つものを作らなくてはならぬ、若いものの奮起を要する、……当地はかなり暑く、……／シャツ一枚で大に身軽である、到るところに花が咲いて居る、蘭は美しいが、ぼたんやしゃくやくが見られぬのが惜しい、／四宮さんや田辺さんの死去可惜、／此地出発までに、論文をかなければならぬので、毎日タイプする、何れへもよろしく／五月二十七日、ホノルル、オアフ街にて

鈴木生拜へ上記書簡『鈴木大拙全集』「増補新版」第三十七巻 書簡二（一九四〇—一九五二）

尚、ここに石井さんとあるのは、石井光雄（石井積翠）のことである。石井積翠の禅籍蔵書の大半は今、松ヶ岡文庫に収められている、「松ヶ岡文庫所蔵（旧積翠軒文庫の一部）クレイン文庫目録」として、松ヶ岡文庫研究年報第十四号（平成十二（二〇〇〇）年三月二十五日、松ヶ岡文庫発行）に掲載した。

「重要文化財所有者変更届」一 名称及び員数 紙本墨書佛法大明録 八冊

／二 指定年月日、番号 昭和十四年五月二十七日 番号／三 所在場所

鎌倉市山ノ内東慶寺山上財団法人松ヶ岡文庫／四 変更前氏名、住所 鎌倉市極楽寺四〇〇 石井光雄／五 変更後の住所 鎌倉市山ノ内東慶寺

山上財団法人松ヶ岡文庫／六 変更年月日 昭和二十七年一月／

旧所有者 石井光雄／新所有者 財団法人松ヶ岡文庫責任者理事長 鈴木貞太郎／ 書第三八二号／「重要文化財指定書」

紙本墨書新編仏法大明録 自巻第一至第九、自第十三至第十七、第廿巻第一二正嘉元年三月嘉廿二日書 写ノ奥書アリ「普門院」「光明院」ノ印記アリ

八冊／（巻第一）／寸法 縦二五・〇センチメートル 横一四・八センチメートル／紙数 五十一丁 表紙欠／（巻第二、三）寸法 縦二十四・八センチメートル 横十四・八センチメートル 紙数 五十丁／（以下附書）

／右を重要文化財に指定する／昭和二十五年八月二十九日／平成二十四年五月十六日 交付／

文部科学大臣平野博文 角印／所有者 石井光雄／神奈川県鎌倉市極楽寺四〇〇／所有者変更財団法人松ヶ岡文庫／神奈川県鎌倉市山ノ内一三七五

／変更年月日 昭和二十七年一月／

石井翁からの書簡は大拙先生宛十一通遺る。後年になって積翠文庫を買収する方法に石井より苦情を呈している。

「……／自分の蒐集した禅籍が金銭にして買えるものではない／この澤庵和尚真跡『臨濟録抄』は自分にとってはバイブルである」と、「金銭を返すから禅籍を全部返して欲しい」と、この時大拙先生アメリカから帰朝されてまもなくのことである。昭和三十七（一九六二）年二月二十四日の書信では、石井の思いが見えてくる。一応、すべてを返却いただいたのち、石井は更に続ける……「いま、文庫へ収めている禅籍すべてと、この金銭すべてを改めて松ヶ岡文庫のもとへ寄贈する」と、大拙先生宛に、積翠用箋に自分の心情をしたためた書信である。

多年にわたって蒐集した石井にとっては大事な典籍である。それを手放すにあたり相手方の動きに対しての石井の苦情がこの書簡から見えてくる。古田逝

去後、書齋を整理している最中にこの書簡が見つかったので、敢えてここに報告しておく。

この沢庵自筆巻の『臨濟録抄』は昭和十三（一九三八）年九月五日に文部省（朱角印）より重要美術品として指定されており現在文庫に茶箱で保管されている。

昭和十三年九月五日／文部省／石井光雄殿／貴殿所有ノ左ノ物件本日昭和八年法律第四十三號重要美術品等ノ保存ニ關スル件第二條ノ規定ニ依リ認定セラレタリ右通知ス／一紙本墨書澤庵筆五逆人間雷（臨濟録抄）四冊／（石

井光雄、昭和四十一（一九六六）年三月十七日没享年八十六）

とはいえ、積翠の禅籍が松ヶ岡に入ったことについての感慨は極めて深いものがあつたかと思う。この積翠と大拙先生蔵書と併せて先に触れた柳の蔵書、その他ご遺族関係者などからそれぞれの蔵書がさらに文庫に寄附された。禅籍を中心としたこれらおよそ一万点の和漢書は、質量ともに屈指の文庫となったのである。今、第一新書庫（クレイン文庫）に収められている。

また、昨（平成二十七年（二〇一五））年秋には、五十年ぶりに「観音菩薩半跏坐像」（鎌倉市指定有形文化財）が文庫に戻ってきた。五十年前、文庫の仏壇に安置されていた観音像である。自然の巡り合わせで再び大拙先生のもとへ戻ってきたのである。多摩美術大学美術館で展観を開く、是非、ご覧いただきたい。また、大拙先生が最晩年好んだという「常行一直心」の墨筆を没後五十年を記念して作った「墨蹟曆」に「観音菩薩半跏坐像」と一緒に載せた。これも是非併せて鑑賞いただきたい。

「指定書」

彫刻 木造 観音菩薩半跏坐像 一軀／上記のとおり鎌倉市文化財保護条例の規定に基づき鎌倉市指定有形文化財に指定します。／平成十九年十一月二十二日／鎌倉市教育委員会／所有者（財）松ヶ岡文庫／所有者住所 山ノ内一三七五番地／交付又は再交付年月日 平成十九年十一月二十二日

／所有者変更（公財）松ヶ岡文庫／変更年月日 平成二十七年一月七日

昭和二十四（一九四九）年十一月、先生は在米中に文化勲章を受けられた。が、その後その年金や、自分の著作権収入をはじめ、その他すべての収入を文庫のために捧げられたので、これらの収入のお陰で、文庫はそのあたりから些少な

りとも楽になったと、古田は記している。こうして松ヶ岡文庫の基礎が漸く固まったのである。自然の巡り合わせとはいえ、決してひとえにとどまることのない多くの不思議な縁^{よじ}によって、漸く松ヶ岡文庫の経営は、実りをもつていくのであった。

Ⅷ 法縁・仏縁の引き合わせ

大拙先生(当時八十六歳)は、一九五六年ニューヨークでその頃、武術(兵法、剣道)について執筆中であつた。古田に次のような書簡を宛てている。(抜粋)

(書簡27)

昭和三十一年(一九五六)年七月二十七日付

神奈川県大船局下円覚寺正伝庵 古田紹欽様 172 West 94 St., New York

25 N.Y., U.S.A.より「航空便」

「……一、仙厓和尚の戯画と云ふものは、余程多数に上るものと信ぜらる、先頃も加州のオークランドで、日本文化展があつて、その時仙厓、白隠、良寛のものが陳列せられたと云ふ、仙厓の分には、ブライスの英訳がついて居る、白隠及び良寛のにも、何かあるかと思つて、尋ねてみるが、まだわからぬ、／仙厓画の賛には、余程面白いものがある、実に天才だ、白隠はどこまでも教育家だ、それで今までの法系が続く、盤珪や仙厓は独立孤行の禅僧である、盤珪は教育家ではなかつたらしい、その面も固よりあつたが、後継者を得なかつたのが、残念である、その中に『近代禅』を代表するものが出る面白いがどうなるか知らん、／何れ又、／御大事に、匆々」

(書簡28)

昭和三十一年(一九五六)年十一月十九日付

この年(昭和三十一年)の秋十一月十九日付けで、朝比奈老師が大拙先生

に宛てたご相談の手紙がある。その内容は、このオークランドでの展示が既に終了したあとなのだが、(まだ、その頃は、先生は出光を存じていない)「……一、出光氏がこの催しをオークランドだけで終わらせる事をとても残念に思つていること、／一、また、オークランドの美術館に保管してあること、／一、出光氏の紹介、／一、この遺墨展の開催企画の理由等々……」

であつた。

(書簡29)

昭和三十一年(一九五六)年十一月二十九日付 鈴木大拙先生宛 中央区銀座東四丁目 出光興産株式会社出光佐三「航空便」

この書簡内容は、／一、オークランドでの仙厓遺墨展が開かれるに至つた

経緯とその内容が詳細に大拙先生に報ぜられている、例えば、一、来年二月からオレゴン大学美術館で東西展を開催したい希望があり、現在オークランド美術館の下に保管していること、／二、朝比奈宗源や学習院のブライスの関係や経緯、／三、今回の展示にあたり、冊子作り翻訳等々の助力をこの諸氏外の先生方に頂いた旨のこと／等々、／四、更に、このオークランドの展覧終了後の計画について、自分の自ら希望するところを述べておられる私見、／五、以上についての先生の意見と協力を求めている内容である。

(書簡30)

昭和三十一年(一九五七)年一月二十日付 上記「航空便」古田紹欽宛て

翌年(昭和三十一年)には、先生は、『禅と日本文化』(「Zen and Japanese Culture」)の挿画の点検をやっていたのであるが、その不足の分がかなりあるので、至急斎藤、石井、松下諸君に頼んで、出来るだけ早く写真(光沢紙)送って欲しくないか、……／仙厓和尚の頂相か肖像、これは、朝比奈さんから、出光さんといふ人に頼んで探して貰ふこと、……君には大分世話をかけるが、今、三、四年のことだろう、よろしく頼む、……／何れ又、大拙拜

以上の手紙をうけて、出光氏に連絡が行き、

(書簡31)

昭和三十一年(一九五七)年二月一日付では、鈴木大拙先生宛て、上記住所

出光佐三より「航空便」

その内容は、氏が仙厓の書画を通じて学生時代から人生の指針として教導をうけることの多かつたこと等を述懐されている／そして、その氏の思いがやがて、財団法人出光美術館の創立となつて結実することになつたの

であること等々。

先生と出光との文通がこの頃屢々あったことが、これらの書簡（昭和三十四年から同三十六年にかけて遺存『鈴木大拙全集』第三十二巻、書翰集）することからも推しても、その後もずっと続いたことがわかる。それは、文通ばかりでなく、先生の帰国後は、先生を度々訪ねられている。また、時にはお招きして歓談されることなど、幾度にも及んでいる。（基礎資料及び書簡参照）

大拙先生がオークランドでのこの展覧のカタログを手にしてしたのは、先の書簡でもお分かりのように、朝比奈老師の出光紹介状を受け取る前からであった。

出光のこうしたアメリカでの企てに先生は感銘されて、ご自身の感想を店主にしたためていたのであった。

出光は、大拙先生から「お前とは数十年來の知己のような気がする……」という手紙を受け取ったが、この仙厓さんのパンフレットがどういう経路でニューヨークの先生の手元に届いたのか、それまでは、先生がどんな人であるか全然知らなかったという。「これが、先生を知った始まりである……」と。さらに出光は続けている。

「……当時、先生は教典の英訳で多用であったが、そのかたわら、仙厓をヨーロッパやアメリカに紹介するために、いろいろな計画や努力をなされた、そして、出光のカレンダーを英訳されて、海外の知己の方々に配ったのが、縁となって、仙厓展がヨーロッパで開かれることになり、昭和三十六（一九六一）年十一月から三十九（一九六四）年七月まで、欧州十一カ国、十四の美術館で開かれた。この時のカタログは先生が解説を書かれたが、ヨーロッパに仙厓を広めて下さったのは全く先生のお力の賜である。」

その後、そういう美術館館長たちが日本の文化に接したいというので、三十九年秋に日本に招待したが、その時、団長としてこられる予定でいて、病気のため参加出来なかった英国のハーバード・リード卿は、その翌年お招きした。この人たちは皆大拙先生に会うということが最高の楽しみであったらしく、ことにリード卿は、鎌倉に先生を訪ねて親しく話された。……

その後、先生は仙厓書画百数十点を選んで、これを英語で本にして、ロンドンの大変有名な書店から出版することを計画されたのである。……リード卿は、それまで日本の新聞社あたりが、再々訪日の招待をするが、どうしてもこなかった人である。それが、仙厓のヨーロッパ展を契機として、仙厓さんに興味をもって来日され、鈴木先生とも親しく話された。そして帰国されてからも、その大変有名な出版社と仙厓の本の出版を交渉され、自らプレフェースを書いてくれたりした、したがってこの本の出版には、リード卿の力によることも大きかったが、前書きを書いて出版社に渡され、まもなく亡くなられた。（ハーバード・リード、昭和四十三（一九六八）年六月二十二日没）……こうして鈴木先生は私の人生、あるいは、私の会社にとつては、思想的基盤に確信を与えられた大聖人であり、大きな灯台であったが、今もその教えは光輝いており、われわれを導いておられることを尊く思っている。」

と、一文している。——鈴木大拙先生の思い出——（出光佐三）『鈴木大拙全集』全三十三巻別巻二巻「月報」

『SENGAI』FABER AND FABER出版、鈴木大拙著（一九七二）。『仙厓の書画』（鈴木大拙著、月村麗子訳、平成九（二〇〇四）年三月十九日、岩波書店発行）が刊行された。残りの仙厓未公開資料を本誌に掲載する。

◆出光宛大拙先生書簡より

（書簡32）

昭和三十四（一九五九）年六月十二日 出光佐三 在東京都中央区銀座東四丁目 出光興産株式会社 出光佐三氏宛「封筒欠」

出光佐三様 六月十二日 鈴木大拙拜／昨日は失礼いたしました、／御求めの文章封入、御気に召すか、如何、／其節御話しの文庫援助の貴意有難く承はりました、／文庫は財団法人経営、わしが死んだら事実そうなるのですが、今は殆んど私有、政府からの年金の全部（それは税をひくと三十万をいくらか越えます）、それでやって行き「ま」す／しなくてはならぬ事を二、三択んでやるつもりです、／先を五年ときめて、その間全心を傾注する、ひとりで出来ぬので、米国からも支那からも、人を頼むつもりで、

金策最中、一所からは出ないだらうから、あちらこちらへあたらずにはなるまし、執筆、思考の心配から、金策まででは、少し重すぎる、少し増築すると、もう金がなくなる、貧乏学者は、四苦八苦、／何か御援助をいただければ、それで世界文化開展の方向に何分かの仕事が出来る、／当用まで、匆々

〔別紙〕出光様／日本人は宗教心に乏しいと云ふ声が、内外人の間に、時々聞こえるが、これは卒爾に決められぬ問題だ。宗教と云ふ言葉の定義にもよる。西洋流又は基督教式にのみより定められぬ。われらの宗教は文化及び生活そのものの中に深く沈潜して居ることを忘れてはならぬ。仙厓和尚の如きは、仏教者として、聖者の位置にすえられる人であるが、その仏心は、念仏とか、誦經とか、礼拝とか、慈善行とか、云ふところにのみ発露しないで、大に文芸の上にも見られる。それがまたユーモアに富んだものである。そうして吾等もその作品に対して、宗教的と云ふ型に、はまらぬ、宗教情操を感得するのである。出光氏が仙厓和尚に傾倒せられるところも、単に文芸の上のみに在るので、ない。そのうちには、心の底になにやら深いものの動くのを覚えるからである。この深いものの在るところ、たとひ無意識であっても、そこには宗教がある。それから、西洋の聖者には却つて此種の余裕に欠けたのが多い。不思議な対照で在るとも云ひ得る。／鈴木大拙〔出光興産発行『仙厓』カタログ序文〕

さらに、石田正實の一文を長くながるが是非入れておきたい。

「……昭和三十八年の夏でしたか、先生が軽井沢の出光寮に避暑された折、丁度支店長会議が寮で開かれ、先生のご講話を願ったことがありました、それが、会社の関係者が一同で先生のお話を承った初めかと思えます。そのご講演の時、先生が親猫と仔猫の話をして、仏の無限の慈悲というものがどういふものであるかを噛んで含めるように話して下さいました。その時、先生御自身深く感動されて、机に伏して泣かれました。私は今でもその情景を思い出しますが、先生は仏の道を説かれるのに実に熱情をもっていられました。……昭和四十一年七月急逝されるまでの八年間、店主は全く無条件で、先生の全人格に傾倒しました。先生が亡くなられた時、店主

は暗夜に燈を失った思いだと慨きました。先生にお目にかかっていると、何か大きなものの傍に居るように、ゆつたりと感じまして、私も先生と御縁があったことを改めて感謝する次第です。

先生と店主のことを述べる時、仙厓和尚がこの間の強いきずなとなつていたことを申さなくてはなりません。」

―「思い出すままに」―(石田正實)

私は、この石田の語る「先生の涙」に涙した、と同時に、科学者マイケル・ファラデー(一七九一―一八六七)の言葉を直ぐに思い出した。ファラデーは、ある時授業中、学生たちに水の入った試験管を手にして、こう云つたという、「学生諸君、この試験管に一滴の水がある、この水を科学的に分析すれば、酸素と水素にすぎないが、母親の涙の一滴は、科学では決して、分析しえない遥かに深いものがあることを心して学ぶがよい……」と。

ファラデーは、生涯を通していつの時も「科学への探求心と神への深い信仰」を持ち続け、この二つの関心を越えた問題に心を煩わせることはなかったという。信仰とは、神と自分との個人のみに関与する問題であると信じていた屈指の科学者であった。

大拙先生もまた、同じである。先生の論文「自力と他力」で関連部分をすこし、拾い読みしてみる。

「……自力を尽くさなければ本当の他力というものは出てこない。この自力を尽くすとは、心を求むるに不可得なりというまでに、どの位の辛勞を続けたかわからないのだ、不可得なりというときに自力が尽きた、それと同時に、他力というものがでてくる、他力を向こうに置いて、そしてそれを頼むというのではなく、自力を尽くすと、おのずと、他力がそこに表れる。不可得ではないけない、可得にならなくてはと、もがくとき、それが、自力である。……「他力には、自力も他力もありません、いちめん他力」の絶対他力である。絶対他力は自力を尽くさなくては出てこない、自分に言わせると、他力を頼む、頼む、というが、それよりも寧ろ『自力とは何か、自力の出所はどこか、自分は業が深いとか浅いとか云う、その自分とは何か』と、言いたう……。」

つまり、台風の目のように、その真つ直中に自分が置かれているようなことでありましょう。この時、他力が向こうからやってくる、私は、これを「仏の力」といいたい。私はいつもそう思っている。

昨年（平成二十七（二〇一五））十二月十五日、宝林寺ご住職閑栖の告別式に参列した。この宝林寺は、かつて仙厓和尚が青年時代修行された横浜の東輝庵である。昭和三十八（一九六三）年十一月に出光店主の発願でその地に仙厓の碑を建てた。大拙先生はそのことを大層お喜びになり、「碑を建つるの記」と「由来記」を書かれた。この碑の前に立った時、五十年さかのぼった気がした。その「由来記」の全文をここに掲げておく。

「仙厓は、その本分よりも、画僧殊に戯画師のやうに看做されて来た点が多い。甚だ遺憾である。高踏的生涯が禅者の本領ではない。上下貴賤、老若男女の差別なく、一視同仁的に、近より易く、親しみ易いのが、禅者の為人度生底でなくてはならぬ。それには、その人々の特性を最も有効的に發揮するに如くはない。仙厓は画才に長け、脱酒飄逸の性格上に、禅的修業を加へた人である。それで自然に今日吾等が見るところの如きものを製作した。幾千に余る遺作の上に、その人の創造的才能の、如何に豊富であつたかを感得する。そしてそれは大慈大悲そのものの発露である。併し為人度生の教化地に居た菩薩的遊戯三昧の生活から見れば、それも別に不思議ではない。宋代の智覚延壽が、その宗鏡録百卷の終りに、「欲達吾宗旨、泥牛水上行」と云つて居るが、仙厓の画生活にも亦此の趣きがあるを覚ゆる。吾等は出光佐三君の仙厓に寄せられる異常な関心に対して深謝すべきである。君は仙厓幻住の地に生れたと云ふ因縁だけでなく、仙厓の為人と作品に対して、徹底した了解をもち、善き意味における宣伝を世界的に行つた。仙厓は今や九州辺隅の一泥牛的存在でなくて、世界文化史上における東洋的なるもの、又殊に最も日本的なるものを代表するところの一人となった。世界の人々が種々の文化的方面において、相互間の了解を深め且つ強めることは、人間生活の真義に目覚めて行くことである。喜ぶべきではないか。吾等は何れも谷響的遊戯三昧の実在をここに認識しなくてはならぬ。而して吾等はまたこの認識の機会を与へてくれる一人として出光佐三君を記憶

すべきである。 昭和三十八（一九六三）年十月 九十四翁鈴木大拙記」

出光店主はその後も、先生創立の財団法人松ヶ岡文庫の経営維持に尽され、先生の日常についても何かとお世話され、毎年夏になると酷暑の間中、軽井沢の山荘雅楽園を先生のためにご提供くださった。先生の晩年の著作活動は店主のこうした好意に与えられたことが大である。また、店主は先生の逝去に際し、その葬儀委員長をつとめられた。その後、昭和五十六（一九八一）年三月七日亡くなられた。（出光佐三、享年九十五）

今改めて、人間の機縁を思う。尤もその縁は、奇縁というレベルではなくて、出会うべくして出会ったという機縁であろう。文字通り時期因縁であろう。

以降、出光佐三の援助によって、松ヶ岡文庫は、第二書庫（現在九千点の洋書が所蔵されている書庫）の完成（昭和三十五（一九六〇）年）をみるようになる。

そしてさらに、文庫の増築がなされた。昭和二十年に建てた最初の書庫（青蓮文庫）の一階を最晩年の先生の書齋に改造、そして、現在の応接間に隣接した炊事場を二階建てにし、大拙先生最晩年の寝室（昭和三十五年）に増改造するなど。また、部屋の暖房をこの広い応接間に、職員が毎日灯油を運んだという話をいつも聞かされた。

これまで尽くして下さった方々はじめ、出光興産の恩恵を、決して松ヶ岡文庫は忘れてはならない。

最晩年、大拙先生のその悲嘆を救ったのは、出光佐三である。その翁の墓碑は、先生のお墓に隣あつて建つ。「先生の最晩年をこの人くらい厚く見守つた人はいない、その詳細を記して遺さなくてはならない」と、常々口にされていたことを忘れない。古田紹欽の遺言でもある。

IX その後の松ヶ岡文庫

禅籍の整理にあたり、大拙先生は在アメリカから度々古田先生や乙訓氏へカードの重要性や作成整理方法について指示、教示している。『松ヶ岡研究年報』第十二、十三、十四号刊行の運びとなるまでのお骨折りが、十五冊にわたるびっしりの目録ノートから想像できる。一言一言手書きでびっしり分類された

このノートが、今文庫に保存されている。「整理しながらホトホトいやになった」と、どこかで古田先生がぼやいていた箇所に触れたが、それは、洋書目録においても同様である。この洋書目録作成にあたっては、中心になって若手グループを引っ張って下さった長谷氏の言葉にもあるように、その分類は大拙創案の固有体系により、分類番号はカード目録に従って記述した（平成二十〇〇八）年十二月十二日『松ヶ岡文庫洋書目録叢書第三』松ヶ岡文庫洋書目録共同研究作業グループ編、松ヶ岡文庫発行）。本場にきつい作業であった。ことの発端はいたって単純なひと言のご縁からはじまった。今から十七、八年前になるであろうか、ある日、米人リチャード・ジャフィー氏が文庫を訪れた。あの厳しい古田先生が何故か、「書庫をお見せしてあげなさい」と言われた。その洋書の書庫を見られて、ジャフィー氏が「この洋書目録が出来るといいですね」と、ご助言下さったそのひと言である。完成の見えない文庫の書類整理をいつか終わりが来るだろうと思っただけなのに、この目録もいつか完了をみる日がくるだろうと素人の発想である。素人であるからこそ、こういう発想ができたのである。世界の印税調査はじめ、文庫の整理にあたっての第一歩は、すべてみなこうした単純な発想からであった。仕事の合間を縫って打ち込みはじめて一、二年過ぎた頃、埒が空かないと悩んでいた矢先にあらわれて下さったのが、佐藤先生を筆頭にこの洋書グループの若手のメンバーであった。このボランティアのメンバーは現役の図書専門の方々である。それから足かけ五年の歳月を要した。毎月一回編集会議を重ね、土、日を中心に集まって作業を続けて下さったが非効率で、思うように作業が捗らなかつた。そこで長谷氏の提案で、目録カードやタイトルページをコピーして送ってもらい、各自の自宅でデジタル資料を使って目録化するというのである。直ぐ行動に移した。しかし、佐藤先生がいうようにタイトルページ等のコピーといっても、そう簡単なことではない。ひと月約千冊を目標にして事務局の指示で一年間コピーと一緒に続けて下さったバイトの方々には、いまだ感謝している。そして、何よりも感謝は、土、日にかけて長い年月この仕事を遂行して下さいたグループである。

現在、文庫閲覧室のロッカーには、文庫創設以来さまざまな人によって作ら

れた目録カードがびっしり詰まっている。大拙先生ご自身の手になるものをはじめ文庫にやってきた内外研究者の協力によるものなどである。この目録カードが洋書目録作成事業の貴重な第一歩となったことはいうまでもない。

古田先生逝去後、当時の文庫は、財団としての寄付行為や計算書類がまだ、県からチェックだらけであった。その上、契約書、特に海外との印税契約がどのようなになっているのか不明で、まず、世界の印税を確認するにも、大拙先生、古田先生の遺した書類の調査と点検、確認からはじまった。定款関係や計算書類、また、海外との印税再契約書作成等々の事務的整理に数年を費やす羽目になったため、大拙先生の英文原稿を手がけるには、まだ、ほど遠かった。手が出せない状態であった。この海外の印税再契約書作成にあたっては、当時、タトル・モリの副社長であった武田氏、丸善の笹井氏が力を貸して下さいた。

そして増補新版『鈴木大拙全集』刊行開始以来、完結にあたるまで四年有余の長期にわたり、文庫に通い続けて時には防寒に身を包んで書庫での作業をして下さった岩波書店鈴木編集者、また、時には書齋と書庫の間の踊り場に座布団を敷いて黙々と原稿を整理し続けて下さった桐田、横山ウェイン両先生のお姿は忘れられない。こうして平成十五（二〇〇三）年十二月二十五日全四十巻の完結をみる。

さらに、没後四十年前後、中国武漢大学の麻教授ら数名が文庫を訪れた。武漢大学で国際シンポジウムをやるが、「是非、四十年を記念して松ヶ岡文庫を発表してほしい」という話があがった。このご縁を機に、それでは、古田先生が最後まで、大事にしておられた風呂敷包み数個の英文原稿の中から、中国関係だけでも抜粋して、翻訳にかかろうと英文委員会を立ち上げ、まず、「鈴木大拙と中国」と題して、研究年報第二十二号特集号を発行するにいたった。それらをご専門とする末木、木村学者両諸氏で、その翻訳や分類をお手伝い下さったのが酒井氏である。その後、大拙先生の在米最終講義「禅八講」叢書四（平成二十三（二〇〇一）年三月三十日）を常盤先生、酒井氏の協力を仰いだ。そして、その後各ご専門諸先生方メンバーを中心に、真宗関係、碧巖関係、禅宗史関係、和漢書関係等々のご活躍で今に至っている。また、未整理であった大拙先生の写真及び版木の撮影整理、文庫の隅々までの撮影を一手に引き受けて

下さった菊池カメラマンの撮ったこれらの写真は、今、当文庫のホームページに載せた写真の原点でもある。

没後四十年にあたっては、四館合同の記念展までの、あのあわただしだった一年は忘れられない。特に親鸞仏教センター本多所長、長谷岡事務局長他センターの皆様方には、拙い事務局に何かと献身的なご協力をいただいた。いまだ決して忘れることができない。感謝に尽きない。そのほか、大拙先生のテープ類を整理しながら、毎日個別講義を受けているようでもあり、お陰でうれしい日々も過ごせた。

出光翁（昭和三十五（一九六〇）年）の援助によって完成したこの第二書庫には、現在およそ九千点の洋書が所蔵されている。そこには、大拙先生が「松ヶ岡文庫設立趣意書」に述べられているように、印度・中国・日本をはじめとするアジアの仏教思想はもとより、世界の諸宗教・思想等々、人文科学全般に及ぶ壮大な蔵書を形成しており、言語も英語ばかりでなくヨーロッパ諸言語、さらにはサンスクリット語にまで及んでいる。

昭和四十一（一九六六）年七月十二日、大拙先生急逝のあとも、財団法人松ヶ岡文庫増築や蔵書の拡充、またその文庫の運営維持など、文庫の歴史に無償で関わってきた古田紹欽文庫長の想いとその気力は、死の寸前まで続いた。

（古田紹欽、平成十三（二〇〇〇）年一月三十一日没、享年八十九）

また、昭和三十五（一九六〇）年以来、平成十五（二〇〇三）年三月に至るまでの、およそ四十年有余もの永きにわたりお力添え下さった出光興産の恩恵は礼を尽くしても尽くしきれないと常々話していた古田先生の言葉を思い出す。

こうして大拙先生のとりにしによる色々な才能を持った多くの方々のご尽力により、学術研究機関としての充実した松ヶ岡文庫が、今ここにある。創建になって以来七十年、この松ヶ岡文庫の歴史に携わってきた文庫に対する愛情愛着というものは、無償で文庫に関わってきた人たちにのみ感慨無量を覚えるものではないだろうか。それは、日本文化を世界に紹介され、禅人及び禅文学者のために、禅文庫の設立を切に願った、大拙先生の学問に対する不屈の遺志の継続でもあるような気もする。「生きる」ということが、我が身の魂の震いを誰かと分かち合うということだとするならば、大拙先生亡きあと三十五年もの長

期にわたって、文庫の護持に生涯を捧げ、師の遺徳を守り高めることを歎びとされた古田先生の生涯は、まさに、大拙先生のいのちと共鳴しつついのちを全うされたといえよう。

平成十二（二〇〇〇）年の秋、金沢市の富田館長と事務長が文庫に訪問下さり、是非、大拙先生生誕百三十周年にお出かけいただきたいという趣旨であった。古田先生はその献花式の場で、こう叫ばれた。「鈴木先生！よろこびなさいよ、皆がこんなに先生のことを思ってくれてくださるんですよ」と。この一言は、古田先生のいのちの想いの一言だと、その場で受け止めさせていただいていた私がそこにいた。

最後に、今回この記念展開催の機会を下さいました多摩美術大学理事長様はじめ、同大学美術館館長様並びに学芸員の方々のお優しさ、誠実なお人柄に触れ、また、限りなくこれまでご協力ご教示下さいました皆様方に深謝すると同時に、どうかこれを機に更なるご高配を賜りますようお願いして終わりたいと思う。

昭和三十六年五月七日、柳翁告別式場で弔詞を述べられた大拙先生のお言葉が、そのままピツタリ大拙先生に当てはまる気がする。最後の部分だけ抜粋しておきたい。

「柳君を憶ふ」 大拙弔詞（抜粋）

「……大きな思想家、大きな愛で包まれて居る人、このような人格は、普通に死んだと云つても、実は死んで居ないと、自分はいつも感ずるのである。不生不死と云うことは、寂寞寂寂ということではない。無限の創造力がそこに潜在し、現成しつつあるとの義である。これを忘れてはならぬ。これは逝けるものを弔ふの言葉ではなくて、実は参会の方々と共に自分を励ます言葉である。五月七日 謹白。」（『民芸』第一〇二号）

（ばんかつよ／公益財団法人松ヶ岡文庫主任）

※『松ヶ岡文庫研究年報』（二〇一六年、第三十号）より再録

(注1) 初代役員(設立趣意書署名者)―鈴木貞太郎(理事長)。安宅彌吉。明石照男。石井光雄。岩波茂雄。小林一三。五島慶太。近藤慈彌。酒井忠正(以上理事)、栗田傳兵衛、加納實、平田佐矩、野口信二(以上監事)

(注2) 野口信二(石井光雄の紹介で法人化申請書作成、鮎川義介の団体事務所所属)

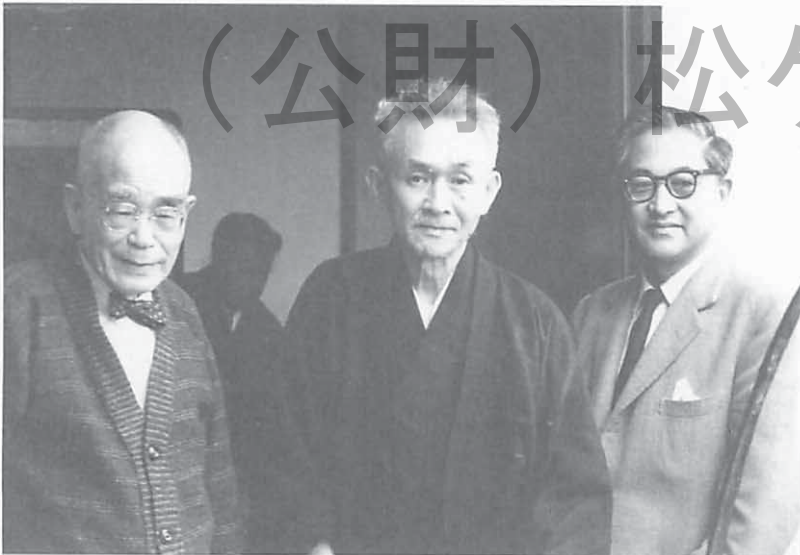
(注3) 財団法人松ヶ岡文庫後援会発起人名簿―合計29人(五十音順)、明石照男、青木均一、一万田尚登、池田成彬、石川一郎、石井光雄、小倉正恒、榊山愛輔、小林一三、小林中、小林勇、櫻田武、清水康雄、鈴木祥枝、杉道助、膳桂之助、高橋龍太郎、徳田昂平、中島久萬吉、中山太一、中村元督、濱口雄彦、原安三郎、藤山愛一郎、宮島清次郎、諸井貫一、矢野一郎、柳宗悦、吉田茂

(注4) 学習院の教え子―木戸幸一、原田熊雄、酒井忠正、長与善郎、柳宗悦、近衛秀麿、犬養健、松方三郎、伊集院虎一等

※書名の()内の「英文」は英文著作、「英訳」は英訳書、「邦訳」は他者の英文著作の日本語訳をそれぞれ示す。

多摩美術大学美術館

(公財)松ヶ岡文庫



昭和35(1960)年6月16日松ヶ岡文庫書齋にて(鈴木大拙、柳宗悦、松方三郎)

鈴木大拙の軌跡と遺物

多摩美術大学美術館

(公財) 松ヶ岡文庫

鈴木大拙の九六年の生涯と業績は、広く世界に大乘仏教を基本とする東洋文化の精髓を伝える使命と悲願に満ちていた。大拙終焉の地である松ヶ岡文庫には、大拙の歩みにまつわる様々な物品が遺されている。それらの中から貴重な大拙の生きた時代や動向、交友を計り知れる多くの写真と、著作や原稿、草稿類や遺品類、そして生前の大拙の息吹を感じとれるテレビ出演のフィルムや録音レコード盤などで大拙の足跡をたどることとする。

鈴木大拙の遍歴と邂逅

I・1 石川県専門学校時代

一八八六年頃



I・2 石川県美川小学校時代

一八九〇年頃



石川県金沢に生まれ育った鈴木貞太郎（大拙）は、石川県専門学校附属初等中学校に入学し、後の盟友となる山本良吉（一八七〇―一九四二 倫理学者）や藤岡作太郎（一八七〇―一九一〇 国文学者）、そして西田幾多郎（一八七〇―一九四五）と出会う。その後第四高等学校（いわゆる金沢四高）に入学するが、皆中退することとなる。後列左端が鈴木貞太郎、前列右端が藤岡作太郎。

I・3 「西洋三字経」(二冊)

(K)

「衛生十二字歌・修身十二字歌」

一八七二年及び一八七四年



(K)

貞太郎は、長兄のついでに小学校英語教諭となった。写真は同校での雪中教練にて。恐らく後列真ん中が貞太郎

大拙の父良準（一八三二―一八七六）が子供たちのために著した三冊の本。「西洋三字経」は西洋の歴史をわかりやすく三字ずつ区切って書かれた概説書。「衛生十二字歌・修身十二字歌」は衛生論と修身論を十二音で区切って諷んじやすく書かれている。鈴木家では毎朝子供たちがこれらを朗誦していたという。

(K)

松ヶ岡文庫

I・4 今北洪川（一八二六―一八九二）



大拙は母鈴木増の死後、小学校教員の職を辞し、東京へと上京する。東京専門学校で学ぶなどの後、寄宿先の久徴館（石川県入宿舎）にて、同じ金沢出身の早川千吉郎（一八六三―一九二二 実業家）の進めで鎌倉円覚寺を訪れたのがきっかけで管長の今北洪川と出会い参禅に励むようになる。

(K)

I・5 鈴木大拙著『今北洪川』

一九四六年



大拙が仏教を志す最初の師であった今北洪川について記した評伝。明治仏教界の激動期を伺い知ることが出来る。

(K)

I・6
 釈宗演（一九〇〇～一九一九）

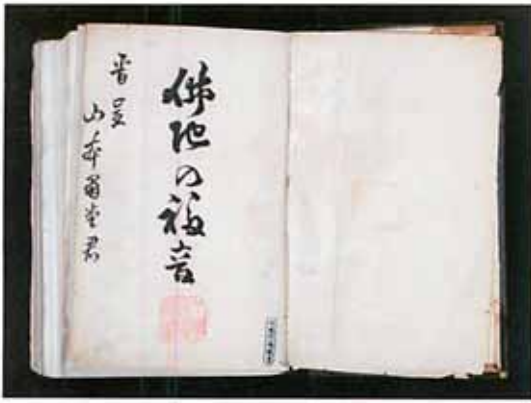


一八九二年に今川洪川が遷化（死去）すると釈宗演が円覚寺新管長に就いた。釈宗演は慶應義塾に学んだ国際派で、一八九三年のシカゴ万国宗教学会議の日本代表の一人にも選ばれる。東京帝国大学哲学科に学んでいた鈴木貞太郎は、今北洪川に続き宗演にも参禅していたこともあって、宗演の講演原稿の英訳を受け持つこととなる。大拙渡米後も、宗演との師弟関係は続き、欧米での宗演の諸活動に随行、通訳を引き受けることとなる。

(K)

I・7 ポール・ケーラス著・鈴木大拙訳

『仏陀の福音』



一八九五年
 ポール・ケーラス (Paul Caillet) 二八五二～一九一九はドイツ生まれのアメリカの哲学者で、一八九三年のシカゴ万国宗教学会議の理念に示唆されて翌年刊行された著作を、大拙が師の釈宗演の命によって邦訳したもの。大拙は渡米後、師の釈宗演と知己のあったケーラスの關係するオーブン・コート出版社の一員となった。

(K)

I・8
 『新宗教論』

鈴木大拙の最初の著作。初版は鈴木貞太郎名で出版された。師の釈宗演の校閲を受け、京都の貝葉書院から『宗教文庫第一篇』として刊行された。

一八九六年

(K)



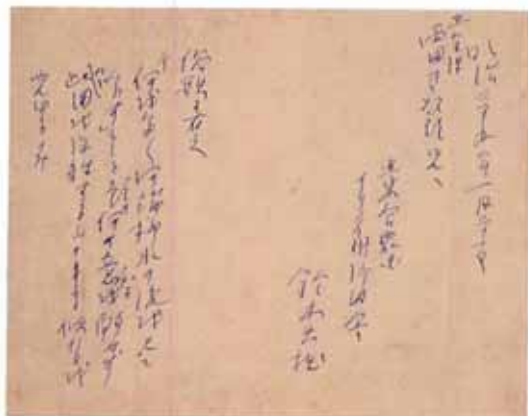
I・9
 米国ラサール滞在時の鈴木大拙

東京帝国大学を中退し、一八九七年から単身渡米しイリノイ州ラサールにて留学生活を送ることとなる。この写真は大拙滞米中の大拙が日本の西田幾多郎に宛てたポストカードである。

(K)



一九〇二年二月二十一日





I・10 学習院寮長時代

一九一八年二月頃

十二年ぶりに帰国した大拙は、一九一〇年より学習院の教授に就任する。一九一四年には学習院寮長にもなり、数々の教え子たちを送り出す。その中には柳宗悦も含まれている。一九一七年からは、かつて金沢四高校長であった北条時敬（一八五八—一九二九）が新院長となるが、後に北条辞任を受けて、山本良吉らと共に学習院を去ることとなる。前列真ん中が大拙。

多摩美術大学美術館



I・11 中国大連にて

一九一八年八月四日

一九一八年に学習院の学生を率いての海外見学旅行に大拙も随行して、青島、北京、天津、大連、奉天、から平城、京城などを来訪する。大連の大和ホテルの写真館にて、同僚の教員と記念撮影したもの。

(公財) 松ヶ岡文庫



I・12 大谷大学教場にて

一九一六年六月二十日

一九二〇年に学習院を辞した大拙は、翌年より京都の真宗大谷大学の教授に就任する。この後一九六〇年退職まで、長きに渡り大谷大学との関わりが続く。最前列右から六番目が大拙。

(K)

I・13 北京大学訪問、胡適らと共に
 一九三四年六月八日
 仏教関係者ら五名で中国各地訪問の際、北京大学も訪ね、胡適（一八九一〜一九六二）思想家、らとも面談、会食している。左から三番目が胡適、隣が大拙。



多摩美術大学美術館

I・14 胡適より贈られた書



年代不詳

I・15 渡英のため横浜より出航する「比叡」にて
 一九三六年六月四日

ロンドンでの世界宗教信仰大会（一九三六年七月二日〜七月十八日）に出席するため、米国経由で出立する際、姉崎正治（一八七三〜一九四九 東京帝国大学教授、宗教学者）と共に。



(公財)松ヶ岡文庫

I・16 横浜ニューグランドホテル屋上
 一九三七年一月九日

ロンドンでの世界宗教信仰大会からの帰路、横浜で帰りを迎えた一同との記念撮影。後列左から三番目にヒアトリス、大拙、アラン。前列右側に関口この。横浜ニューグランドホテルは後に野村洋三（一八七〇〜一九六五）が会長となる。

(K)



I・17 星ヶ岡茶寮にて



一九三八年七月十一日

麴町の料亭星ヶ岡茶寮にて、ディナーパーティを催した際のもの。左から石井光雄（一八八一〜一九六六）、日本勧業銀行総裁、岡部長景子爵（一八八四〜一九七〇）、細川護立侯爵（一八八三〜一九七〇）、鈴木大拙、一人おいて牧野伸顕伯爵（一八六二〜一九四九）、大久保利武侯爵（一八六五〜一九四三）。

多摩美術大学美術館

I・18 岩波重雄邸にて



一九四四年五月二日

鎌倉の岩波邸に招待される。左より鈴木大拙、二番目に和辻哲郎（一八八九〜一九六〇）、四番目に西田幾多郎、六番目に岩波茂雄（一八八一〜一九四六）、八番目に明石照男（一八八一〜一九五六 第一銀行頭取）。

(公財) 松ヶ岡文庫

I・19 安宅彌吉追悼会



一九四九年四月十六日

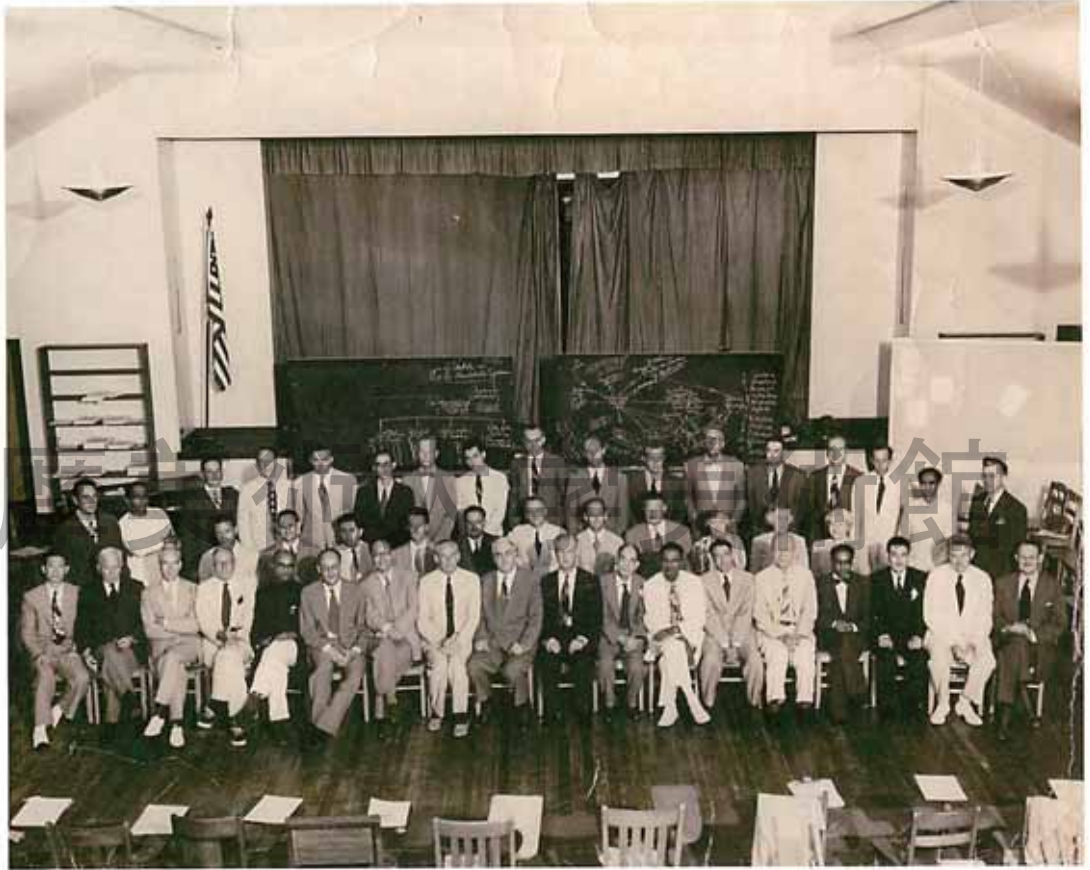
一九四九年二月五日に逝去した安宅彌吉（一八七三〜一九四九）の追悼会が松ヶ岡文庫で催された。左から二番目が下村寅太郎（一九〇二〜一九九五）、四番目が大拙。

(K)

I・20

ハワイ大学での東西哲学者大会

多摩美術大学



一九四九年七月二十九日

第二回東西哲学者大会に参加するため渡航し、最終日に大拙は公開講演を行った。その後一九五〇年一月末までハワイに長期滞在した。最前列右から八番目が大拙。

(K)

(公財) 松ヶ岡文庫

I・21 メキシコのエーリッヒ・フロム邸にて

一九五六年八月二十四日

ドイツの哲学者エーリッヒ・フロム (Erich Fromm 一九〇〇〜一九八〇) と親交の深かった大拙は何度がニューヨーク滞在時にメキシコのフロムを訪ねている。恐らく大拙自身が撮影したフロム夫妻。

(K)



I・22 ハイデッガー夫妻と共に

一九五三年七月八日

大拙は一九五二年九月から一九五四年九月までの長期に渡り米国滞在をするが、その間二回欧州旅行をしている。最初の欧州行きで南ドイツのフライブルクに立ち寄り、哲学者マルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger 一八八九～一九七六) と面会している。

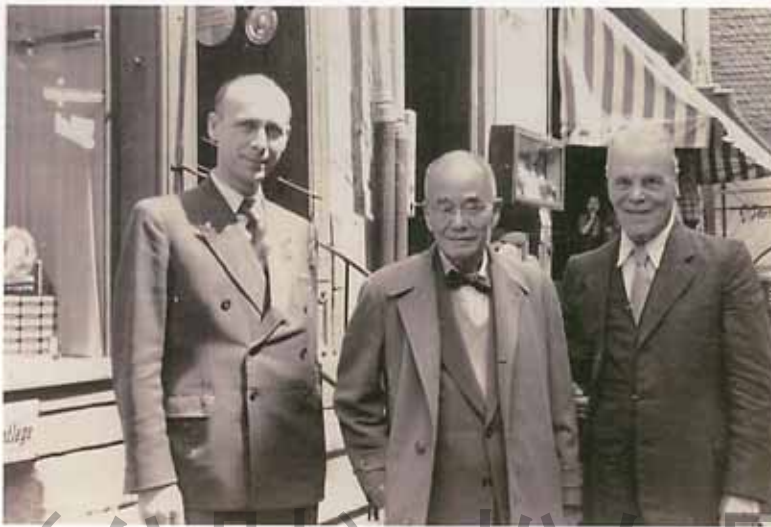


多摩美術大学美術館

I・23 ドイツのマールブルクにて

一九五四年七月二十日

長期米国滞在期の二度目の欧州旅行の際、ドイツ中部のマールブルクに滞在し、ヘルマン・ヘッセの従兄弟にあたる哲学者のヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert 一八八〇～一九七二) を来訪している。右側がグンデルト博士。



(公財) 松ヶ岡文庫

I・24 オーストリアのウィーン来訪時

一九五四年八月六日

長期米国滞在期の二度目の欧州旅行の際に立ち寄ったウィーン市内観光での一場面。右から十二番目が大拙。



(K)



I・25 福岡県大宰府政庁跡の大宰府碑にて

一九六〇年九月二十日

大谷大学教授を辞した大拙は京都から福岡、徳山（出光興産製油所）へ講演旅行をしている。その際に大宰府に立ち寄ったときのもの。

(K)

多摩美術大学美術館



I・26

ジョン・ケージの来訪を受ける

一九六二年十月二日

一九五七年にコロンビア大学での大拙の講義に行き、大拙に傾倒した現代音楽家のジョン・ケージ（John Cage）一九二一～一九九二は、一九六二年の来日公演の際に松ヶ岡文庫を訪ね、大拙との面会を果たしている。

(K)

(公財) 松ヶ岡文庫



I・27 福田恆存との対談

一九六五年頃

評論家で劇作家の福田恆存（一九二一～一九九四）は同時代の様々な文化人との対談を多く遺しているが、『対話人間いかに生くべきか』（出版は昭和四十二年）に鈴木大拙と古田紹欽との対談を収録している。

(K)



I・28
NHKテレビ「ここに鐘は鳴る」

一九五九年九月二十四日

大拙の人生を振り返りつつ、旧知の人々との再会を懐かしむ伝記番組。小学校や学習院、大谷大学での教え子や野村洋三なども出演している。

(K)



I・29
大拙出演のテレビ放送記録
十六ミリフィルム

大拙は晩年、多くのラジオやテレビ番組に出演しているが、松ヶ岡文庫にもそれらのフィルムや音源（録音テープやSP盤レコード）が遺されている。

(K)

(公財) 松ヶ岡文庫



I・31 NHKテレビ「婦人の時間 この人この道」

一九六四年五月十四日
NHKテレビのインタビュー番組。聞き手はジャーナリストの犬養道子（一九二一）。

(K)



I・30 東京テレビ「婦人ニュース」

一九六二年二月三日

東京テレビ（現TBS）のインタビュー番組。聞き手は俳人の中村汀女（一九〇〇～一九八八）。

(K)

鈴木大拙撮影の写真

大拙は米国滞在時より、世界の見識を深めるための写真の必要性を感じ、自ら写真を撮影し、現像することにも長けていた。帰国後も写真への興味は尽きず、松ヶ岡文庫にも大拙が購読した海外の写真雑誌や大拙撮影と思われる写真が多く遺されている。



I・32 震災後の倒壊した円覚寺

一九三三年九月二十五日

大拙は震災後間もない、復興のままならぬ鎌倉の様子を撮影している。

(K)

多摩美術大学美術館



I・34 震災後の鎌倉大仏

一九三三年九月二十五日

鎌倉の大仏は損壊は免れたものの土台から大仏の全体が四五センチ前方に滑り、台座は右後側が九センチ、前側が四五センチ地中に入り込んだ。

(K)



I・33 震災後の倒壊した正伝庵

一九三三年九月二十五日

鎌倉の大拙の居宅であった正伝庵も倒壊した。

(K)



I・35 築地風景

一九二〇年代頃

また市場の出来る前の素朴な海浜風景の築地。

(K)

(公財) 松ヶ岡文庫



I・36

京都の自宅での集合写真

一九二〇年代頃

後列右から二番目が着物を着たピアトリス、四番目が関口この。

(K)

I - 38 『Zen and Japanese Culture』

1959年



禅と日本文化の英文再版だが、装丁を米国のグラフィックデザイナーのポール・ランド (Paul Rand 一九一四〜一九九六) が手がけている。

(K)

鈴木大拙の著作と手稿

I・37 『禅と日本文化』

一九三八年



日本文化の影響を与えた禅思想を通じて、東洋哲学としての禅思想を広く欧米に紹介するための著作。英文で書かれた初版本で、東方仏教徒協会 (EBS) から刊行された。

(K)

I・39 『日本的靈性』手稿と校正

一九四四年



「鎌倉時代と日本的靈性」「日本的靈性の顕現」「法然上人と念仏称名」「妙好人」「金剛經の禪」の五編からなる、精神と物質との人間靈性を「日本的靈性」というテーマで、日本人の宗教的自覚の成立について論じた著作。大東出版社からの初版本のための未入り原稿と校正刷り。

(K)

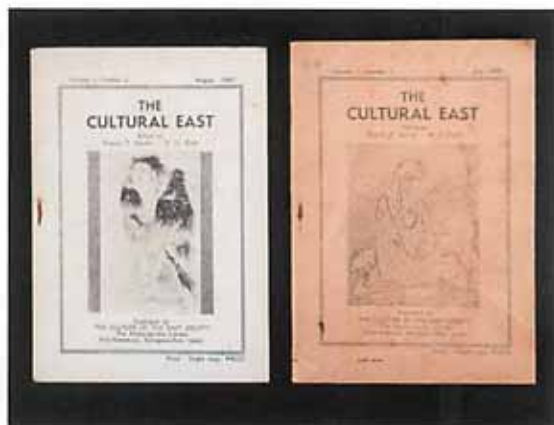
(公財) 松ヶ岡文庫

I・40 『THE CULTURAL EAST』創刊号、第二号

一九四六年・一九四七年

カルチュラル・イースト」はイギリス人の日本文化研究者の R・H・ブライズ (Reginald H. Blaydes 一八九八〜一九六四) と共同編輯で松ヶ岡文庫より発行された英文雑誌。

(K)



I・41 『大乘佛教概論』

一九〇七年

大拙の最初の英文による著作。大乘仏教をわかりやすく概説したもので、自らがスタッフであったオープン・コート出版社のロンドン支社から刊行された初版本。

(K)



I・42

教行信証

一八三八年

『教行信証』は親鸞（一一七三―一二六二）の主著にして浄土真宗の立教開宗の根本聖典で、この版は江戸時代に西本願寺が版本として刊行した。大拙が真宗大谷派から英訳を依頼された際に、ニューヨーク滞在中の大拙に送られた底本。九十歳を過ぎて取り組んだ『教行信証』の英訳は、大拙晩年の仏教研究の集大成ともいえる取り組みであった。上下巻および校正の三冊。



(K)

多摩美術大学美術館

I・43 教行信証のタイプ原稿（未完）



一九六三年

このタイプ原稿は手書き原稿を元に二月から五月にかけて打たれた序文で、更に黒・朱で加筆が施されている

(K)

I・44 教行信証のラフドラフト

一九六二年

このタイプ原稿も手書き原稿を元に打たれたものを印刷して複製したもの。表紙右上に大拙のサインがある。

(K)



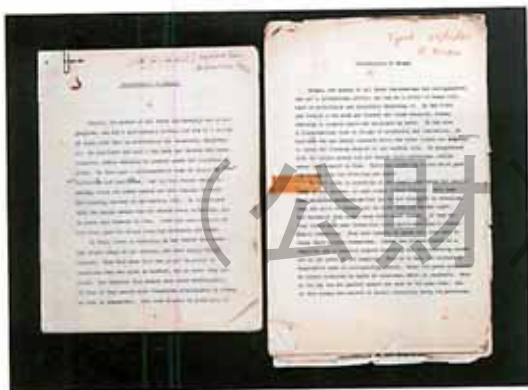
I・45

仙厓序論の英文タイプ原稿

一九六〇年頃

大拙の死後、大拙が晩年に仙厓について書かれた『SENGAI The Zen Master』(1971: Faber and Faber Ltd, London) に収録された序文の朱入りの英文タイプ原稿。

(K)



I・46

「老人と小児性」手書き原稿

一九六六年六月

鈴木大拙の絶筆。雑誌「心」のために書かれ、八月号に掲載された。大拙の死後に古田紹欽により編纂・刊行された『大拙つれづれ草』にも再録されている。

(K)



松ヶ岡文庫に遺された
鈴木大拙の遺品

I・47
大拙のもとに遺された
多くの書簡類



大拙のもとに遺された多くの書簡類
西谷啓治（一九〇〇〜一九九〇）、久
松真一（一八八九〜一九八〇）、山本
良吉、藤岡作太郎、松方三郎（一八九九
〜一九七三）、藤秀環（一八八五〜
一九八三）、関口このらの書簡。

(K)

多摩美術大学美術館

I・48
大拙が執筆した様々な雑誌
や刊行物のための手稿



I・50 若林春暁作「妙好人浅原才一合掌之図」（複製）
松ヶ岡文庫の自安堂の床の間に飾ってある掛け軸。



(K)

一九二〇年

I・49
鈴木大拙著「妙好人、浅原才一を説
み解く」および機関誌『The Way』

東本願寺の英文の機関誌『The Way』に
一九五二年から一九五七年にかけて掲載された大
拙による浅原才一論が、二〇一六年に日英対訳で
ノンブル社より出版された。



(K)

I・51
方君壁作「鈴木大拙肖像」

大拙がボストン滞在時に描かれたもの
と思われる水彩画。



(K)

年代不詳

I・52 「鈴木大拙肖像」

作者不明の水彩画。



(K)

年代不詳



I・54 大拙が愛用していた
腕時計と懐中時計

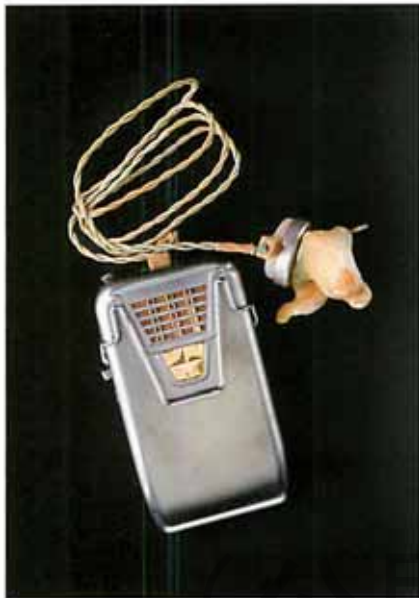


I・53 大拙のパスポート
一九四九―五十年代

多摩美術大学美術館

一九四九年、一九五一年、
一九五二年、一九五五年、
一九六〇年発行の五冊。

(K)



I・56 大拙が愛用していた米国製の補聴器



I・55 大拙が使用していた様々な眼鏡

(公財) 松ヶ岡文庫



I・58 旅行用トランクに納められた
大量の日記類
一九三八年から一九六二年までの十八
冊の日記が収められている。

(K)



I・57 大拙が受章した文化勲章
一九四九年

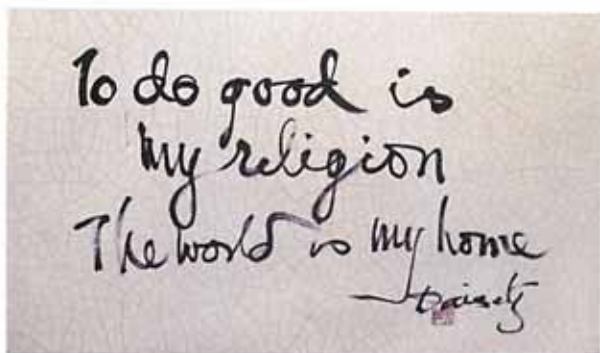


I・60 大拙が使用していた印
松ヶ岡文庫の大拙の書齋跡に保管されている。



I・59 大拙が愛用していた杖

多摩美術大学美術館



I・61 鈴木大拙書「To do good is my religion, The world is my home. Daisetz」
年代不詳
大拙の墨書を印刷プレート加工し、額装されたもの。(K)



I・63 松ヶ岡文庫の大拙書齋跡
松ヶ岡文庫の旧書庫(青蓮文庫)に設置されている大拙の書齋跡。



I・62 ポール・ケーラスの肖像写真
年代不詳
渡米時代の恩人であるケーラスの卓上写真額。松ヶ岡文庫の大拙の書齋跡に設置されている。(K)

II

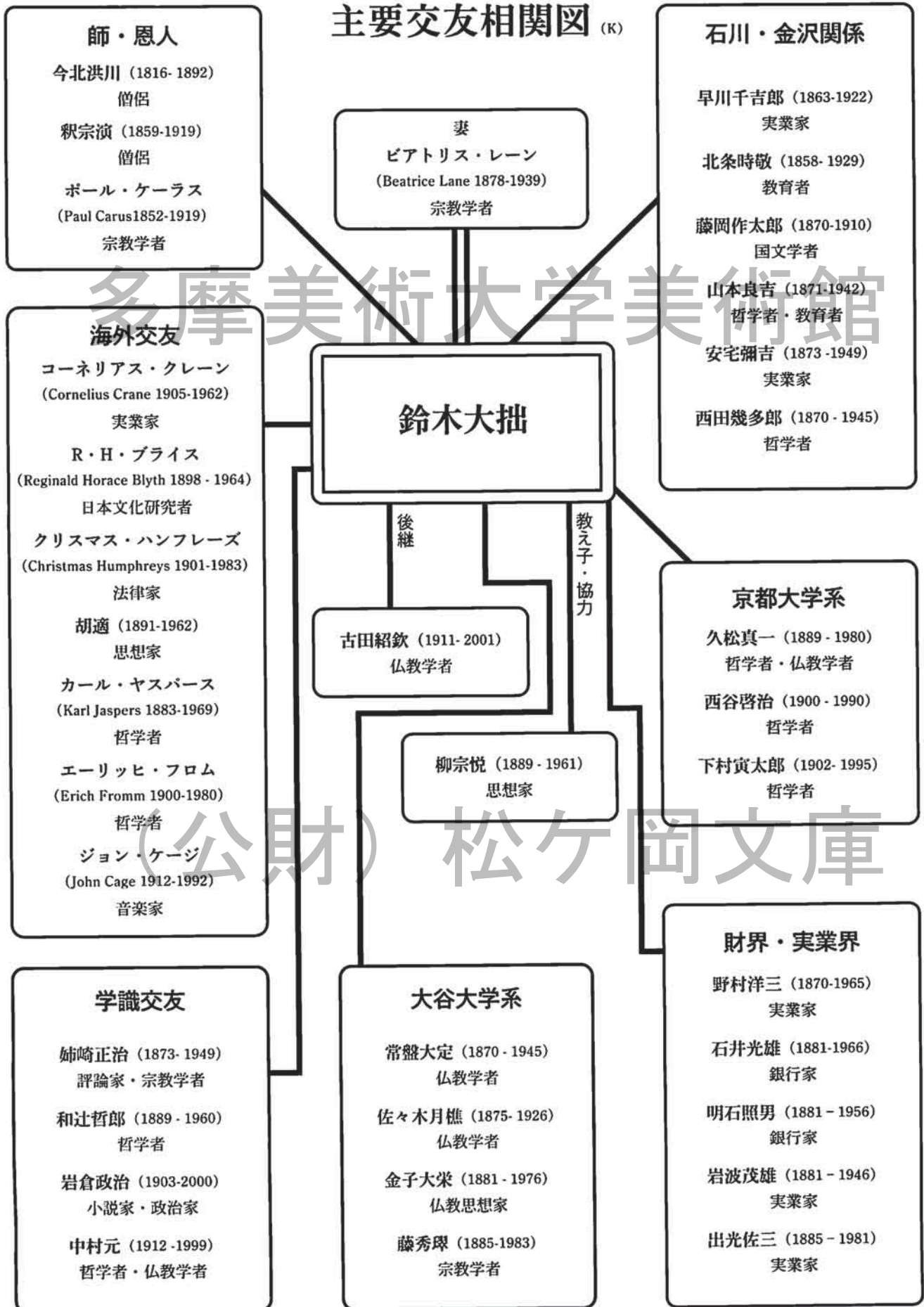
鈴木大拙の交友と 松ヶ岡文庫

多摩美術大学美術館

(公財) 松ヶ岡文庫

松ヶ岡文庫には大拙との縁による叡智の集いがみえてくる。盟友西田幾多郎、夫人ビアトリス、そして柳宗悦と古田紹欽。彼等は仏教学と哲学に響き合い、絆を深めた。また松ヶ岡文庫の設立にあたっては、国内外の協力と支援があった。本章ではこれらの深き縁や絆を辿ると共に、松ヶ岡文庫に残された書簡類から大拙と知遇を得た学者達・文化人との交流を繙いてゆく。

主要交友相関図 (K)



西田幾多郎

(二八七〇—一九四五)

明治二〇年(一八八七)、当時新制の第四高等学校中学校予科は、やがて世界へ知られる二人の学生を迎え入れる。言うまでも無く西田幾多郎と鈴木大拙である。西田と大拙は郷里金沢から離れた後も東京帝大、学習院そして京都時代と引き合うように互いの近くに身を置き、二人ともやがて鎌倉を居とした。哲学と仏教学という人間の本质を問う学問に生涯を捧げた二人は過こした時間以上に密接な心の繋がりと信頼があった。そのことは、大拙が夫人のことを相談する書簡(II・2・3)とその返答、禅の心が響き合うような合筆書、安宅彌吉の号「自安」が冠された松ヶ岡文庫の仏間に西田揮毫の「自安堂」(II・4)が懸けられたことから伺うことができよう。西田家と大拙は末永い付き合いを持ち、西田の没後(II・7)も遺族が大拙を訪ねることもあったようである。

II・1 西田幾多郎



(F)

II・2 鈴木大拙・西田幾多郎宛書状

一九二六年十二月六日



II・3 西田幾多郎・鈴木大拙宛書状

一九二七年一月二七日



II・5 大拙、松ヶ岡文庫自安堂にて

一九二五年

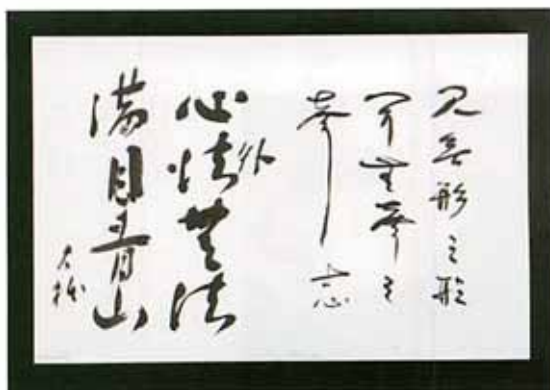


II・4 西田幾多郎書「自安堂」

明治、昭和時代

II・6 鈴木大拙・西田幾多郎合筆書

一九二九年



II・7 西田幾多郎一周忌、西田邸にて

一九四七年六月七日



II・8 花壇 西田静子

一九五六年



ビアトリス・アースキン・レーン・スズキ
Beatrice Erskine Lane Suzuki (一八七八〜一九三九)

II・9
二十代前半のビアトリス
一九〇七年頃



一九〇〇年頃



一九〇七年頃

II・11
『LIGHT ON THE PATH』
一八八六年



II・12
『THINGS SEEN IN JAPAN』
一九〇七年頃



ビアトリスと大拙が一九〇八年にお互いの言葉をたたためて贈り合った書籍
(Y)

ポストンに生まれた夫人ビアトリスと鈴木大拙の出会い、一九〇五年に大拙が師 釈宗演、二度目となる訪米に随行した際であった。大拙をして「キリスト教的伝統信 仰に安心しなかった」というビアトリスは、「この頃すでに自らを「冷静なる傍観者」としておくことは出来ない思想として東洋思想に接し、小乗仏教の研究を進めていた」という。そのビアトリスが大乗仏教の天啓を受けたのが一九〇五年の釈宗演をして大拙との出会いの時であった。やがて惹かれてゆくこの邂逅は、二人が「一体」となり東洋思想を世界へ伝える運命を携えてゆく。松ヶ岡文庫が蔵する書籍に記されたメツセージや書簡には、若き二人が互いを思ふ気持ちが綴られている。(II・11・13)

また、大乘への関心は、ビアトリスの本願ともなる「菩薩心」を導く共に大拙と結婚した後に来日すると参禅や高野山での研鑽、そして浄土教の研究へ展開する。禅・真言・浄土真宗の研究軌跡は研究ノート(II・16)や『EASTERN BUDDHISM』(II・17)などに刻まれている。大拙は夫人の没後に遺稿集『青蓮仏教小観』(II・18)を編んだ。この書は発表論文や随筆、新聞記事などを収め、仏教そして日本を愛する気持ちで克明に記されている。生きた証とも言うべきであろう。円覚寺管長広田天真によって号「青蓮」(伊藤敬宗揮毫)が授けられたこと、参禅と教学への邁進を物語っている。ビアトリスは自ら研究者であると共に大拙が英文原稿を発表する時の欠かさざるパートナーでもあった。その謝辞が著書『ESSAYS IN ZEN BUDDHISM』に記されている。

ビアトリスは多くの僧や文化人と交友を持ち、また日本をほとんど今まで知ろうとした。II・21・22にみる芳名録には大拙を始め夫人が出会った人々の記録が墨跡・書で残っている。大拙は夫人を失い「一体が「半体」となった」と記す。二人の心の絆そして感謝推して知るべきである。

(F)

II・14
ビアトリス・レーン
日記1
一八九二年



II・15
ビアトリス・レーン
日記2
一九一三〜一九三九年



II・13 ビアトリス・レーン・鈴木大拙宛書状

一九〇八年二月二十八日



II・18
『青蓮佛敎小観』

一九四〇年



II -17
『The Eastern Buddhist』
(The Eastern Buddhist Society, Kyoto) 1921年



II・16
ピアトリス・レーン
寄稿スクラップと研究ノート

一八九九〜一九三〇年代

II-19 『ESSAY IN ZEN BUDDHISM』
(Luzac and Company, London) 1927年



ピアトリスへの謝辞が中表紙に記されている。

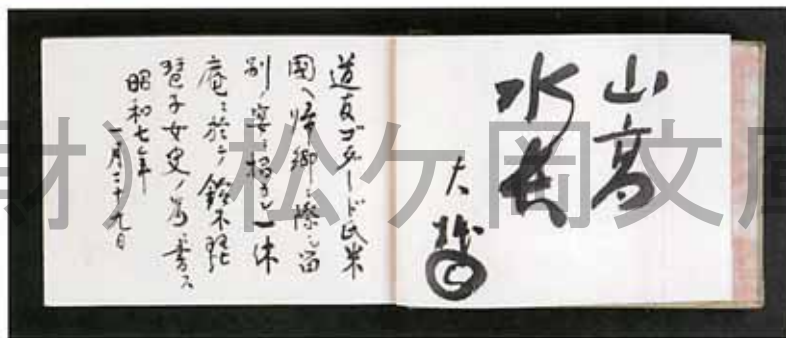
(Y)



II・20 伊藤敬宗墨蹟「青蓮」
一九三五年以前



II・22 芳名録



II・21
鈴木大拙書「山高水長」
一九三二年



II・24
ピアトリスの納骨式、高野山にて
一九四〇年六月四日



II・23
和装のピアトリス
一九二〇年頃



柳宗悦 (一八九一～一九六一)

松ヶ岡文庫には、大拙が愛用し、多くの客人をもてなしたであろう濱田庄司(一八九四～一九七八)や河井寛次郎(一八九〇～一九六六)ら民藝の作家による茶碗や花器などがある。これらは創立間もない松ヶ岡文庫のために柳宗悦の細やかな配慮によって調えられた。現在、仏間で用いられている平銅鑪も柳が文庫のために京都で探し出し、贈ったものである。柳は大拙が著した『禅の立場から』(一九一六)をはじめとして大拙の著作に触れ、自らも禅籍を蒐集するようになったという。これらの和書は一九五六年一月に文庫へ寄贈された。柳は大拙に導かれるように自らの思想を深め、大拙もまた柳を大なる東洋的「美の法門」の開拓者であると評し、文庫の後事を託した。柳が抱き続けた師への篤い思いと、大拙が柳に寄せた信頼が、文庫には当時のまま伝えられている。

II・31 佛書目録 宗悦蔵

大正八年(一九一九年)

宗教哲学者で民藝運動を創始した柳宗悦(一八九一～一九六一)が蒐集した和装本の仏書目録である。柳は学習院高等科に学ぶが、その時の英語の教師が若き鈴木大拙であった。その後柳は妙好人研究を通じて鈴木大拙と交流を深め、松ヶ岡文庫の設立・整備に助力し、自ら所蔵する仏書・禅籍を寄贈している。本書は「經典」・「僧傳」・「三論宗」・「天台宗」・「華嚴宗」・「法相宗」・「禪宗」・「浄土及真宗」・「真言宗」の項目別に分類されているが、貴重な版本・写本が含まれ、いずれも松ヶ岡文庫に寄贈されている。

(A)

(Y)



II・26 前列左から柳宗悦、大拙、三列目左に古田紹欽、松ヶ岡文庫にて
一九五二年九月十日



II・25 柳宗悦・鈴木大拙宛書状
一九四五年二月七日



II・27 陶器

昭和時代



II・30 焼流掛 飯茶碗

昭和時代



II・29 筒火鉢

昭和時代



II・28 平銅鑪

II・32 人天眼目抄

天文五年（一五三六年）

『人天眼目』は南宋の晦庵智昭の撰で臨済・雲門・曹洞・禪仰・法眼の五宗の綱要をまとめた書である。本抄は曹洞宗太源派の川僧慧濟（一四七五）が文明三年（一四七二）より同五年（一四七三）にかけて編纂した抄で、天文五年（一五三六）に金竜寺（群馬県太田市）にて書写された写本である。（識語には「時天文五年丙申正月十日上州金竜寺ニテ是書畢 遠文公拜」とある。）本写本は三巻を二冊に仕立てられており、いわゆる洞門抄物の資料群の中でも古い資料として国語学の抄物研究、中世禅宗史研究において注目されてきた抄物である。川僧は大洞院（静岡県周智郡森町）・乾坤院（愛知県知多郡東浦町）・一雲斎（静岡県磐田市）に住し、『碧巖録』、『無門関』等の抄も残しており、十五世紀の東海地方に展開した曹洞宗太源派の禅林の家風を知る上で貴重な資料である。



II・33 臨済語録抄

寛永十年（一六三三年）

写本、二冊、小口書に「白拈抄」とあり。上巻九二丁。下巻一一一丁。奥書に「寛永拾年癸酉正月於正法下書焉 主示轄」とあり。近世初頭の妙心寺系の『臨済録』に対する抄物である。「宗悦」と「廣沢」の朱印あり。



II・34 碧巖抄 不二鈔

明暦三年（一六五七年）

岐陽方秀（一三六一〜一四二四）による碧巖録の抄である。十巻十冊の版本で明暦三年に京都で刊行された。岐陽は東福寺（京都）にあつて五山派を代表する学僧であり、世阿弥等、当時の一流の文化人も参じている。東福寺住持を引いた後、不二軒に隠居したため、岐陽の抄を「不二鈔」といい、本書の他に『人天眼目不二鈔』等が知られる。五山派の『碧巖録』の抄では岐陽に先立つ竺仙梵徳と椿庭海寿の抄が重要であるが、いずれも完全な形では残されていない。この不二鈔はこの先行する二抄の記述を多く引用紹介している点で重要な意義を有する。また岐陽は先行の抄の説をふまつつも、先行の抄文について修正する部分もあり、五山派の碧巖録抄の中でも特に権威ある抄としてその後の臨済宗諸派の碧巖理解に影響を与えている。本書は柳宗悦寄贈本である。



（公財）松ヶ岡文庫

古田紹欽 (一九二一～二〇〇一)

「鈴木大拙先生」、古田の書く大拙の名には必ずと言ってよいほど「先生」が付されている。東京大学で仏教学を修するために古田は上京し、大拙に出会った。この碩学に接した、青年の心持ちや如何なるものであったらう、その昂揚は想像に難くない。そんな古田に大拙も広く心を開き信任篤くしていた。

松ヶ岡文庫には膨大な古田と大拙の書簡が残る。両名は国内外でも頻りに連絡を取り合っていた。二・38・39はニューヨーク滞在大拙との書簡であり、何気ない近況から日本の若い研究者への期待、さらには文庫の設えについてまで話題が及ぶ。大拙亡き後に文庫長として実際に文庫の舵取りを行った古田は、言葉通り大拙の継承者となった。

二・36は西田幾多郎の急逝直前に大拙と共に西田邸を訪れた時の事を記す日本近代思想史にとっても貴重な原稿であるが、古田が残した文字は、西田大拙という両友が過ごす時間を共にしたことへの感慨、そして西田を失った大拙の落胆を伝えている。自ら禅籍・禅文化(二・37)の研究者として仰がれるようになった後も古田は、大拙の側近として敏を尽くし瑞々しい感慨を貰った。古田の記した資料を読み解くと、「先生」と呼びかけるその声は今にも聞こえるようである。

二・36

「西田幾多郎博士の死と墓所」(直筆原稿)
一九四五年か



二・37

『SENGAI Master Zen Painter』
仏訳 (Editions de la Différence)
一九九四年

英訳

(講談社インターナショナル)
二〇〇〇年

『仙厓』和文(出光美術館)
一九三一年

二・35 若き日の古田紹欽と大拙



仙厓と出光

十代の頃より仙厓(二七五〇～一八三七) 作品を集めてきた出光佐三(一八八五～一九八二)は、仙厓展(一九六一～一九六四年「歌麿十一カ国巡回」の開催について相談したことが縁となり、大拙との知己を得た。仙厓展カタログ序文はハーバード・リード(一九三三～一九八二)が寄稿し、大拙は七十点の作品を解説した。リードは一九六五年十一月に来日し、松ヶ岡文庫を訪ね、大拙の仙厓論について知る。一九七一年に大拙の遺稿は『SENGAI The Zen Master』として英国で出版されるが、その序論とは別の序論が松ヶ岡文庫研究年報第三十号(二〇一六年)において初公開された。(Y)

二・38 鈴木大拙・古田紹欽宛書状

一九五一年一月四日



二・40

仙厓「堪忍柳画賛」(複製)
一九四二年



二・42

松ヶ岡文庫での大拙とハーバード・リード
一九六五年十二月二十三日



二・43

『SENGAI The Zen Master』
リードの尽力により大拙の死後に刊行。リードが序文を寄せている。(K)

二・41

軽井沢の出光山荘雅楽園でのNHKラジオ第2「納涼放談」収録
一九六二年八月十日

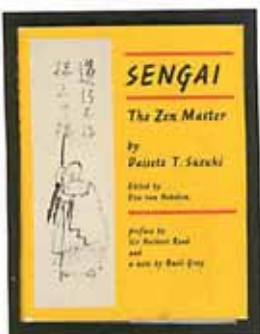


二・39 古田紹欽・鈴木大拙宛書状

一九五一年二月二十日



左から古田紹欽、大拙、出光佐三



大拙に関する書簡

II・44
釈宗演（二八五九〜一九一九）
鈴木大拙宛書状

一九二二年四月、東京帝大講師を辞した大拙は、シベリア鉄道を経由して渡欧し、ロンドンに滞在した際、師の釈宗演から届いたポストカード。表面は鎌倉大仏の写真。



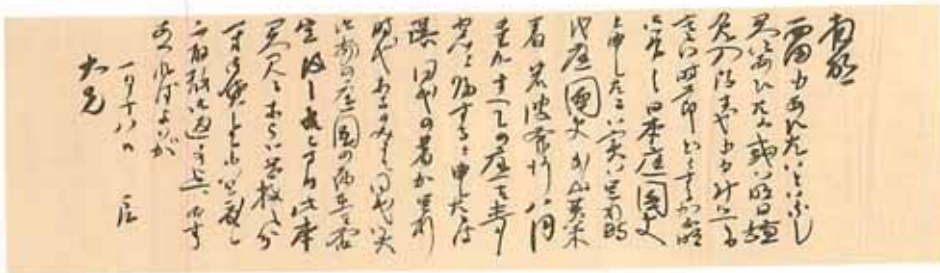
多摩美術大学美術館

II・45
山本良吉

（二八七一〜一九四二）
鈴木大拙宛書状

一九三三年五月二日
当時、武蔵高校の教頭をしていた山本良吉からの書状。

(K)



II・46
藤岡作太郎

（二八七〇〜一九二二）
鈴木大拙宛書状

一九〇三年一月一日
金沢四高の旧友で東京帝大助教授だった藤岡作太郎から米国立ラサールに滞在している大拙に届いた年賀状。

(K)

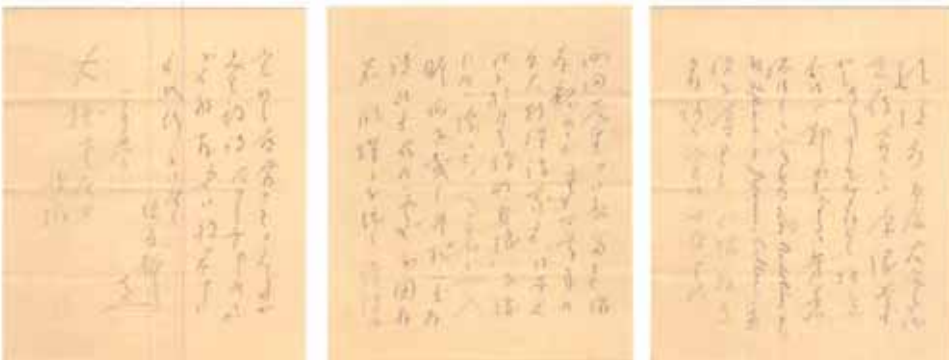


(公財) 松ヶ岡文庫

II・47
久松真一（二八八九〜一九八〇）
鈴木大拙宛書状

一九三九年一月三十一日
西田幾多郎の教え子で、龍谷大学教授であった久松真一からの書状。

(K)



II・48

佐々木月樵（一八七五～一九二六）

鈴木大拙宛書状

一九二二年二月廿六日



学習院大学を辞した大拙を京都の大谷大学教授に招聘した大谷大学学長の佐々木月樵からの書状。大拙らが創刊する『EASTERN BUDDHIST』の口絵に使う夢殿の救世観音の写真を手配すること、京都での住まいについて大拙に知らせている。

多摩美術大学美術館

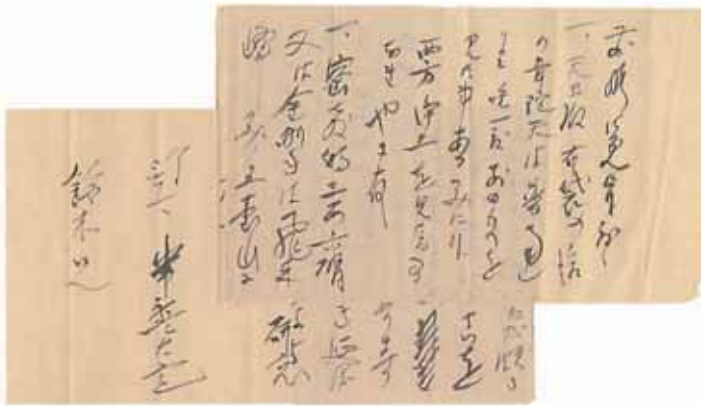
II・49

常盤大定

（一八七〇～一九四五）

鈴木大拙宛書状

一九三四年八月三日



II・50

金子大栄

（一八八〇～一九七六）

鈴木大拙宛書状

一九三九年十月十八日



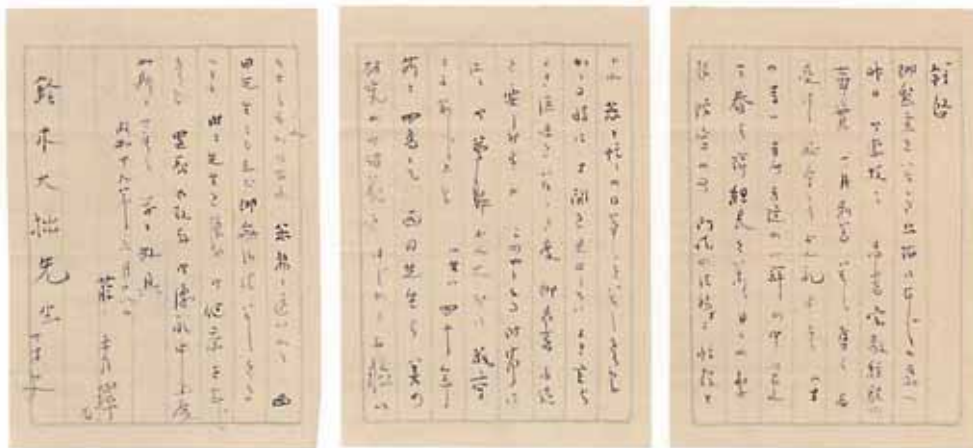
(公財)松ヶ岡文庫

II・51

藤秀環（一八八五～一九八三）

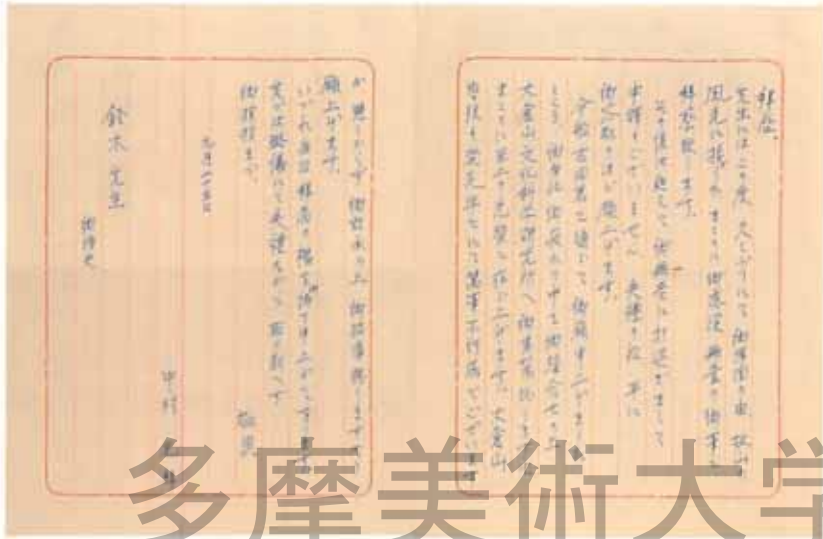
鈴木大拙宛書状

一九三九年十月十八日



II・52
中村元（一九二二～一九九九）
鈴木大拙宛書状

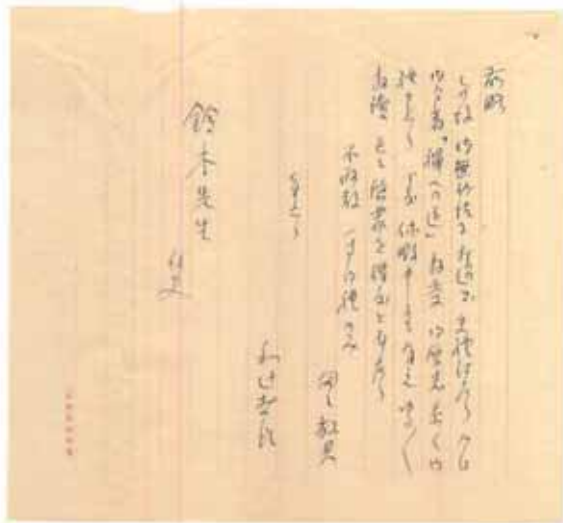
一九五四年九月二十五日



多摩美術大学美術館

II・54
岩倉政治
（一九〇三～二〇〇〇）
鈴木大拙宛書状

一九四三年五月六日



II・53
和辻哲郎（一八八九～一九六〇）
鈴木大拙宛書状

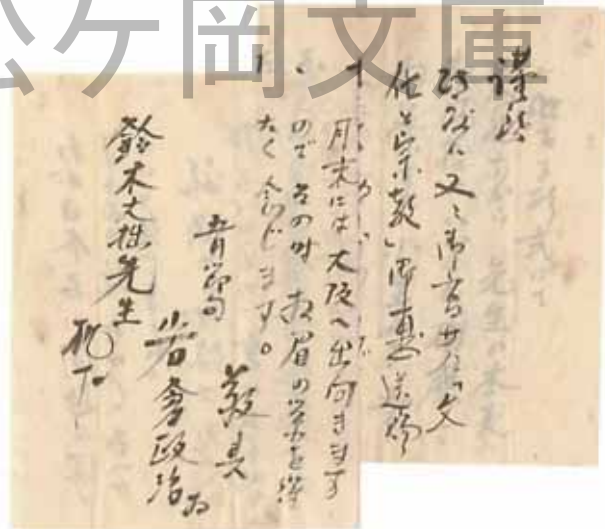
一九四二年七月一日

『禅への道』を和辻哲郎に寄贈したことへの御礼状。

(K)

(公財) 松ヶ岡文庫

得終



II・55
下村寅太郎
（一九〇二～一九九五）
鈴木大拙宛書状

一九五六年六月十五日

西田幾多郎の教え子で哲学者・科学史家の下村寅太郎からニューヨークに滞在中の大拙に宛てた書状。

(K)



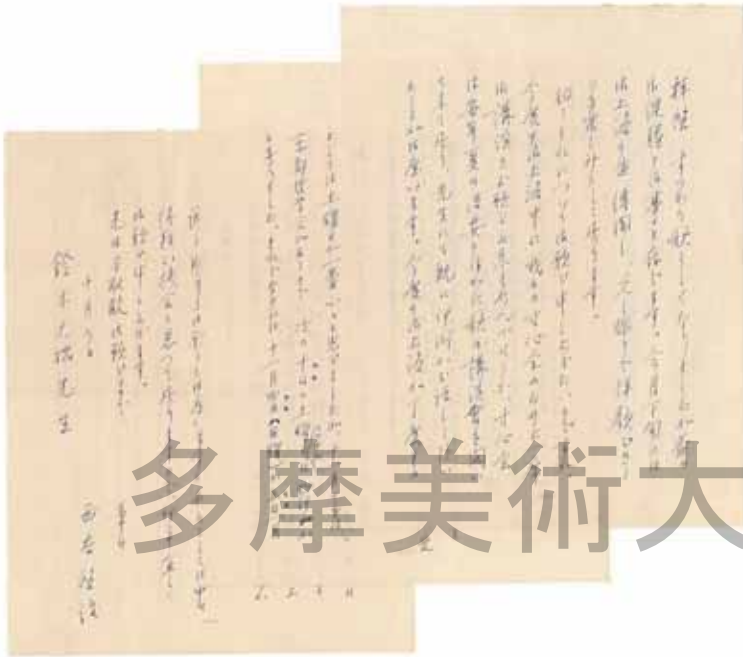
II・56

西谷啓治（一九〇〇～一九九〇）

鈴木大拙宛書状

一九六二年三月七日

西田幾多郎の教え子で哲学者で京都大学教授の西谷啓治から大拙への京都での講演依頼の書状。



多摩美術大学美術館

II・57

鈴木大拙から松永安左エ門（一八七五～一九七二）宛書状に付された原稿

一九六六年二月十九日

アーノルド・トインビーの『歴史の研究』の日本語翻訳版を発行した松永安左エ門宛てに贈られた書状に同封された、翻訳本のカバーに載せるための推薦文の原稿。



(公財) 松ヶ岡文庫

II・58

クリスマス・ハンフリーズ

(Christmas Humphreys 1901-1983)

鈴木大拙宛書状

一九四九年一月十八日

ロンドン仏教協会の会長であったハンフリーズからの、大拙の著作を独語・仏語訳にて刊行することについての書状。ハンフリーズは極東裁判の判事でもあった来日時、大谷大学で講演をしている。通訳を大拙が務めたが、単なる通訳を超えて、ハンフリーズの仏教界積の違いを解説しつつ二人で論争まで始めたという。ハンフリーズは欧州での大拙の著作権の取りまとめをしていた。

(K)



II・59
カール・ヤスパーズ (Karl Jaspers 1883-1969)
鈴木大拙宛書状

一九五三年十一月六日

同年夏にバーセルを訪れてヤスパーズと面会していた大拙に、来年の夏季セミナーに参加して欲しいかという要請の手紙。残念ながら翌年の大拙のバーゼル大学行きは実現しなかった。

(K)

II・60
エーリッヒ・フロム (Erich Fromm 1900-1980)
鈴木大拙宛書状

一九五六年八月九日

メキシコ在住のドイツの哲学者エーリッヒ・フロムの基にニューヨークから大拙は何度も逗留しているが、フロムからメキシコの大学で哲学と宗教学についての講義をして欲しいという要請の書状。しきりにメキシコの快適さを謳っている。一週間後、大拙はメキシコへ旅立ち、大学で講演している。

(K)

II・61
コーネリアス・クレーン
鈴木大拙宛書状

一九五二年七月四日

大拙と交流の厚かったクレーンのハワイからの書状。松ヶ岡文庫への寄付の承諾すること、日本訪問が叶わないことを嘆いている。

(K)

II・62 コーネリアス・クレーンと大拙

一九五一年

クレーンから贈られた大拙とクレーンの家族、友人たちと行楽した際の写真。

(K)



多摩美術大学美術館

(公財) 松ヶ岡文庫



Ⅱ・64 松ヶ岡文庫での安宅彌吉追悼式

一九四九年四月十六日
安宅は一九四三年に脳出血で入院して以来、リハビリに励んでいたが、一九四九年二月五日に逝去した。約一か月後に松ヶ岡文庫において追悼会が催され、多くの人が集い、その死を悼んだ。

(K)



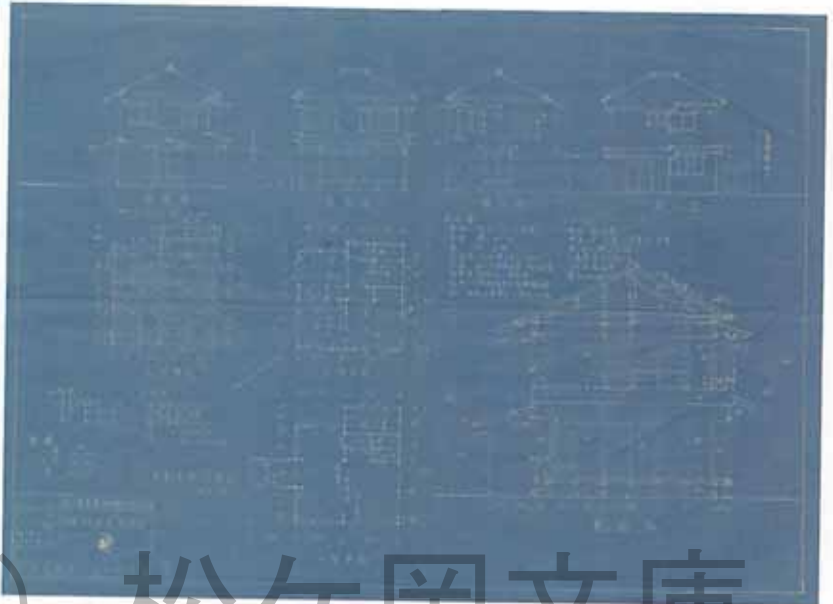
松ヶ岡文庫の建設と展開

Ⅱ・63 安宅彌吉 (一八七三・一九四九)

安宅は鈴木大拙と同じ金沢の出身で、大拙の後輩にあたる。当時有数の総合商社となる安宅産業の創始者。永く同郷の大拙を支援するパトロンの存在でもあったが、松ヶ岡文庫の創設にあたっては、最初の建築となる母屋(仏間・大広間・応接室、現書斎Ⅱ第一書庫)の建設費を主に引き受ける形で寄付をした。

(K)

多摩美術大学美術館



Ⅱ・65 松ヶ岡文庫母屋二階増改築工事竣工図

一九四四年三月に建設された文庫は、その後の蔵書の増加などから一九四九年から増改築が企画され、現在の応接室の二階増築と後に書斎となる第一書庫とを棟続きにする工事が行われた。この増改築工事には明石照男(松ヶ岡文庫理事にして、第一銀行頭取)の尽力によるところが大きい。

(K)



Ⅱ・67 松ヶ岡文庫、遠望

一九五一年頃
松ヶ岡文庫の東側より望む外観。当時のロケーションがよくわかる。手前から住宅棟(随庵)と閲覧室(自安堂)と二階建応接間(也風流庵)と第一書庫(青蓮文庫)とが連なっている。

(K)



Ⅱ・66 松ヶ岡文庫外観

一九五一年頃
中庭より見上げた外観で、第一次の増改築工事が終わり、右から仏間(自安堂)に続く二階建の応接間と別棟であった書庫(青蓮文庫)とが渡り廊下で棟続きになった様子がわかる。

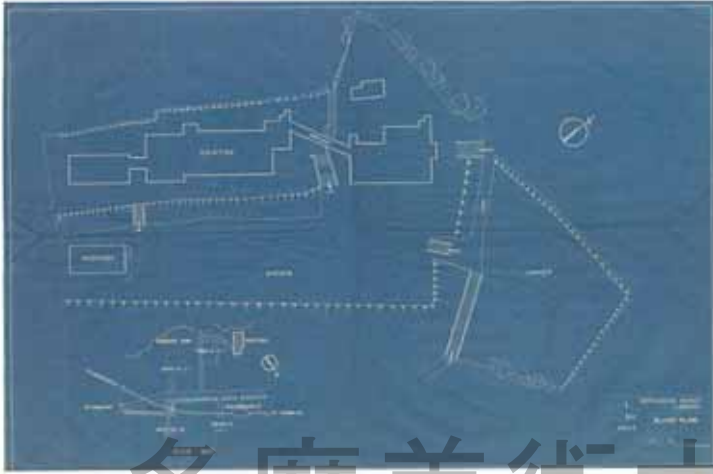
(K)

II・68 松ヶ岡文庫第一新書庫工事

建築配置図

一九五二年八月十日

最初の増改築が完了した年に、大拙は米国の資本家で親しくしていたコーネリアス・クレイン (Cornelius Crane, 一九〇五～一九六二) より寄付金が寄せられ、既存の文庫施設とは別棟の第一新書庫の建築が計画されることとなる。この配置図によると、既存の三棟の南側の法地下に建設予定されているが、現況よりも西にずれた位置であったことがわかる。

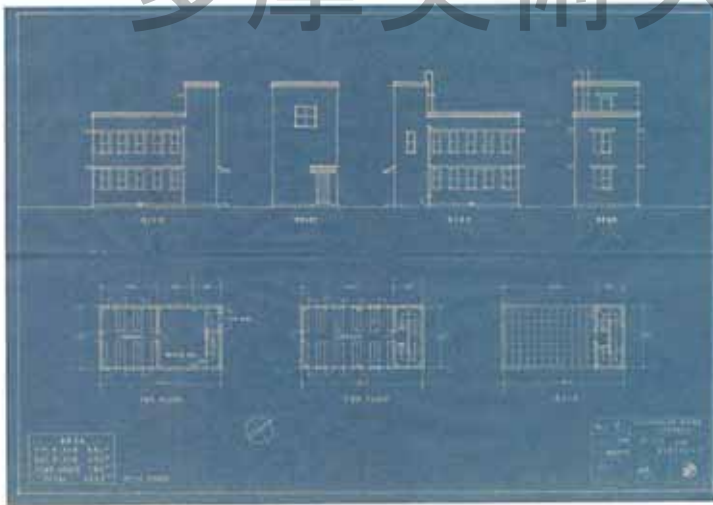


II・69 松ヶ岡文庫第一新書庫工事

平面図、立面図

一九五二年八月二十日

新書庫は鉄筋コンクリート造の二階建てで、クレインの寄付金を受けて、柳宗悦の主導のもと、清水建設が工事を担当した。当初計画では陸屋根だったが、現況は瓦葺合掌屋根となっている。



II・71

松ヶ岡文庫書庫外観

二〇一五年

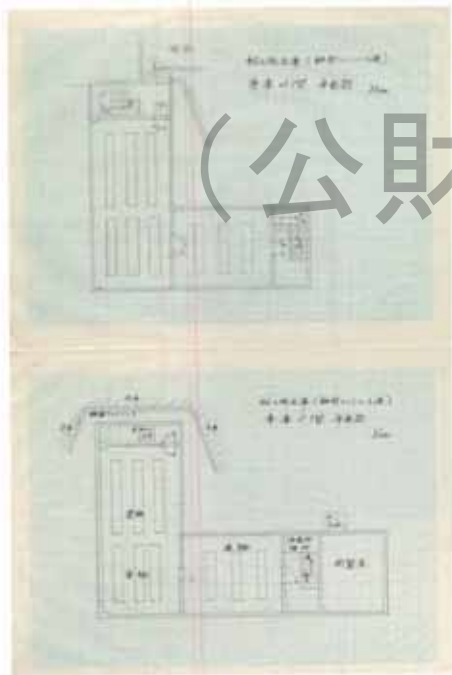
一九五二年建設の第一書庫とその奥の一九六〇年建設の第二書庫の完成により、現在のコの字型の建築レイアウトが形成された。



II・70 松ヶ岡文庫第二書庫平面図

一九六〇年頃

出光佐三の尽力により、第一書庫と青蓮文庫(書斎)をつなぐ鉄筋コンクリート造の二階建書庫が一九六〇年に完成する。出光佐三は最晩年の大拙の悲願に報いるため、松ヶ岡文庫の理事長を長年勤め、大拙亡き後も自ら出光興産に寄付を募り、文庫の運営に役立てて来た。



多摩美術大学美術館

多摩美術大学美術館



松ヶ岡文庫での大拙と猫
一九五九年十月

(公財) 松ヶ岡文庫

III 松ヶ岡文庫の文化財

多摩美術大学美術館

(公財)松ヶ岡文庫

松ヶ岡文庫には仏教学の研究に不可欠な経論や仏像など数々の文化財が収蔵されている。これら文化財は同文庫の心とも言える書庫に保管されている他、室内にさりげなく配置されつつ教学を研鑽する空間の雰囲気をつくりだす。本章では、この度の展覧会で出品する観音菩薩半跏坐像（鎌倉市指定文化財）、東大寺大仏蓮弁線刻図拓本や歴史的和書に加え、江戸から明治期と考えられる版木を掲載する。これら版木は近年の調査と本展に併せた版本の制作が行われたものとして特筆しておきたい。

また本章では展覧会出品作品の他、松ヶ岡文庫が誇る『新編仏法大明録』（重要文化財）、澤庵自筆の『臨濟録抄 五逆人間雷』（重要美術品）、庭に安置する石造三重塔や金銅観音菩薩像も所収した。

文化財の視点から松ヶ岡文庫が備える豊かな空間をお伝えしたい。



Ⅲ・1 観音菩薩半跏坐像

鎌倉時代末～南北朝時代（十四世紀前半）

左脚を踏み下げて坐し、左手は左膝に、右手は掌を下にして腰側部に置く。胸部から腹部にかけてはやや平板な印象を受けるが、背面には十分な肉付きがあり奥行きのある体躯を持つ。內衣・覆肩衣・衲衣・裳掛には流麗なドレープがあらわされる。頭部には高髻を結び、天冠台をつける。髪は毛彫りで鬢髪一束が耳を蔽る。正面前方の地髪部に円孔があり、もとは観音菩薩の標幟である化仏があつたものと思われる。引き締まった輪郭を持つ顔部には切れ上がる脛、固く結ばれた口元が刻まれ、理知的な表情をつくる。

本像に見る、脚を前し寛いだ姿勢を取る遊戯坐の観音菩薩像は鎌倉時代中期以降移入された禅宗文化の下、中国・宋や元の趣味を反映して生まれた。造像例は鎌倉地域が中心となることが特筆され、禅居院像・東慶寺水月観音・慶珊寺十一面観音半跏像（横浜）に類似する像容が看取される。これらの像と比し本像はやや量感が穏やかで謹直な姿となるが、顔部の表情や彫技の高い水準からさほど降らない時期の制作が考えられる。（鎌倉市指定文化財）

(F)







Ⅲ・2 東大寺大仏蓮弁線刻図拓本（掛軸）

（原作品）奈良時代（八世紀）

奈良時代、天平勝宝四年（七五二）に開眼供養を迎えた東大寺大仏には上下二段の蓮華坐があった。下段を石製、上段を仏身と同じくブロンズ製としていたが、治承四年（一一八〇）の平重衡による南都焼き討ちと永祿十年（一五六七）の松永久秀による兵火で仏身と共に多くの部分が失われた。江戸の再鑄を経て今日では、仏身背面側の上段蓮華坐請花に比較的良質な当初部を見ることができ、請花は大小二十八葉の蓮弁が交互に記されていた。

本作は上段ブロンズ製蓮華坐の請花蓮弁に描かれた線刻画の部分拓本であり、美しい鉄線

描と共に数少ない天平絵画の姿を知ることが出来る。各蓮弁には本尊たる盧舎那仏の世界観を示す図様、つまり盧舎那仏は千葉が一大蓮華台上に坐し、その千葉ひとつひとつを「世界」とした千の世界にまた各百億の国があり、全ての世界に釈迦があるという蓮華蔵世界が示された。画像中の如来は蓮華蔵世界が説く釈迦を表し、ここにひとつの世界があることを意味している。

（F）





Ⅲ・3 東大寺大仏蓮弁線刻図拓本（屏風）

（原作品）奈良時代（八世紀）

Ⅲ・2と同じく天平当初の東大寺大仏殿蓮弁線刻図の部分拓本。画面上段は釈迦の説法を聴聞する菩薩衆の他、化仏を乗せた雲が次々と湧く様があらわされている。特に菩薩像にみる鉄線描には如来像と同様、天平時代の熟達した工人達による鑿の冴えを見て取れよう。

下段には二十六本の界線が引かれ二十五段の带状区画（本作ではそのうち上方の十九区画）が設けられている。これは作品画面外の下方に描かれている須弥山の上にある天界「大三千世界」をあらわしている。「大三千世界」は大きく三つの世界から成っており、欲を断ち切れぬ「欲界」・形のある「色界」・精神のみで形のない「無色界」となる。本作の带状区画の上部三区画には何も描かれていない。ここが精神のみがある無色界とされ、それ以下が色界と考えられている。

ここで見る蓮弁線刻画の制作時期は、大仏開眼供養から四年が経った天平勝宝八年（七五六年）に蓮台の铸造がなされた。その翌年頃に鑿が入り、鍍金が施されたと考えられている。これは天平勝宝八年に崩御した聖武天皇の一周忌に向けた造営目標であった。

（F）

III・4 『碧巖集抄』

安土桃山時代 弘治年間～天正年間（十六世紀後半）

妙心寺系の『碧巖録』の抄物で、十巻十冊の写本である。大仙寺（岐阜県八百津町）旧蔵本であったが、柳宗悦により蒐集され松ヶ岡文庫に蓄積された。本書第十巻の巻頭に「講師吾道樹和尚也、天文癸卯歲之講、始仲冬廿一日、終于甲辰季夏、又復卯年講、始于卯月廿日忘終、弘治三年丁巳講、始卯月廿一日、終于八月八日」とあり、道樹寺（岐阜県美濃市）を開いた景聰興島（一五〇八～一五九二）が天文二二年（一五四三）～二四年（一五五五）・弘治三年（一五五七）の三回にわたり講じたものを景聰の弟子大圭紹琢（一五九二）が書き留めたものである。この景聰による抄は「臆断」といわれ、妙心寺系の抄物として最も権威ある抄であり、別に紹介した虎哉宗乙の抄もその影響を受けている。

(A)



III・5 『碧巖鈔』

安土桃山時代 天正二年（一五七四年）

伊達政宗の師として知られる虎哉宗乙（一五三〇～一六一二）の『碧巖録』講義によって成立した抄である。十巻五冊の写本で、第一冊・第二冊・第三冊の各尾に「維時天正二年（一五七四）甲戌孟冬吉、於臨照山下書了、宗允焼香九拜」と記され、第五冊目の尾に「虎哉師講本也」とある。これによるとこの虎哉抄は宗允なる僧が臨照山西岸寺（長野県上伊那郡飯島町）において書写した抄物である。この虎哉抄の内容を検討すると、妙心寺系の抄物の中で権威のあった景聰興島（一五六三）による『碧巖録』の抄、いわゆる「臆断抄」に基づいていることがわかる。なお虎哉は快川紹喜（甲斐恵林寺三世で武田信玄の参禅の師）をはじめ、当時の有力な禅匠に歴参した後、薩摩の伊達輝宗の帰依を受けて覺範寺開山に迎えられた。特に伊達正宗に多大な感化を与え、幼少時代の正宗（梵天丸）に中国の独眼竜李克用の行実を紹介して雙眼のコンプレックスを除くなどの逸話が知られている。

(A)



多摩美術大学美術館

(公財)松ヶ岡文庫

Ⅲ・6 『蒼龍窟備忘記』

明治時代中葉～末（十九世紀後半）

幕末・明治期の臨済宗において活躍した今北洪川（一八一六～一八九二）の備忘記。蒼龍窟は洪川の窟号である。洪川はもともと播磨の儒学者であったが禅に転じて相国寺大拙承演の下で出家し曹源寺儀山善來の印可を得た。後に円覚寺管長となり、山岡鉄舟等の居士が参じている。本書の内容は①『東洋絵画叢誌』からの抜書、②励精会設会旨趣、③正法ノ精氣ノ略説（明治一九年九月一七日於戸塚宝蔵院演説）からなる。③も励精会創会での演説の原稿である。励精会とは北条時敬（一八五九～一九二九、東北帝国大学総長・学習院長長・花田仲之助らが今北洪川を師家に迎えて設立された参禅会であり、平沼騏一郎・沢柳政太郎等、錚々たる面々が会友として参禅している。この北条の四高時代の教え子が鈴木大拙と西田幾太郎である。本書には、「勸善会」と記されていた箇所が引かれて「励精会」に改められている等、今北洪川自身が草稿に手を加えている跡が諸所に見られる。

(A)



Ⅲ・7 『絶海語録 蕉堅藁』

江戸時代 寛文十年（一六七〇年）

絶海中津（二三三四～一四〇五）の語録（絶海和尚語録）と詩文集（蕉堅藁）。いずれも寛文十年（一六七〇）の刊本である。絶海は義堂周信と並ぶ五山文学の双璧とされ、甲斐恵林寺・京都相国寺等に住している。二冊はいずれも円覚寺中興の祖、誠拙周樗（一七四五～一八二〇）の手次本である。『蕉堅藁』の尾に「此書釣長老謂歸源藏書因模糊佛日等六字誠拙誌」の識語がある。誠拙は伊予に生まれて出家し、武蔵国永田東輝庵（現宝林寺）の月船禅慧に参じて嗣法、その後円覚寺・相国寺の住持した。特に円覚寺住持の時には僧堂・山門等を復興させるとともに、多くの僧俗を接化した。大用国師と謚号され、円覚寺では平成三十一年に大用国師二百年大遠忌が行われる。

(A)



(公財) 松ヶ岡文庫

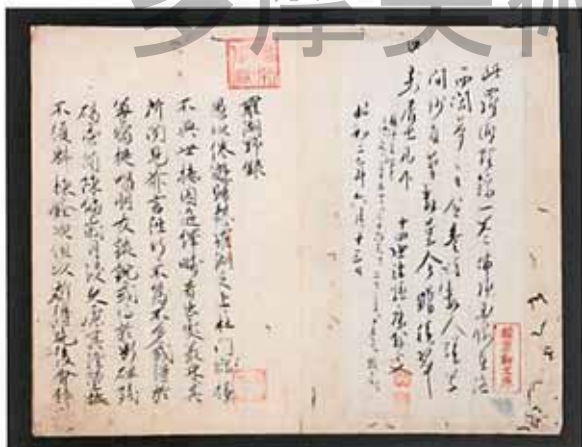
III・8 『羅湖野録』

江戸時代前期（十七世紀前半）



宋の晚叟仲温（一一一六〜？）の語録。晩叟は看話禪を大成した大慧宗杲の法嗣（弟子）であり、宋代の禪門逸話を集成した『雲臥紀談』を著している。本書は写本一冊本で仏頂国師として有名な一絲文守（一六〇八〜一六四六）の手沢本である。本書は巻首に「文守」「法常皇寺」の朱印が捺され、朱点・書込が見られる。松ヶ岡文庫はこの他にも『大慧普覚禪師宗門武庫』・『中峰広録』などの一絲の手沢本を所蔵している。

多摩美術大学美術館



(A)

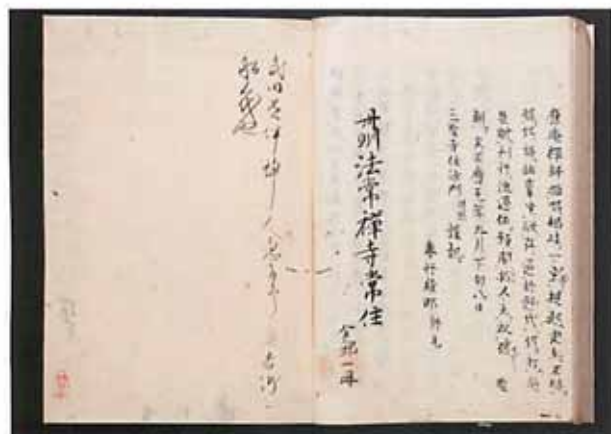
III・9 『応庵法語（仏頂国師手沢本）』

江戸時代 寛永年間中葉（一六三〇年頃）



宋の応庵曇華（一一〇三〜一一六三）の語録。応庵は中国臨済宗の虎丘派の代表的な禅僧である。本書は寛永中頃の写本で仏頂国師一絲文守の手沢本である。一絲文守は真言宗で出家した後、臨済宗に転じ、紫衣事件の際には沢庵宗彭と共に出羽に流されるが、後に後水尾天皇の帰依を受け、丹波法常寺の開山に迎えられた。また近江の永源寺に住して復興させている。本書は巻首に「一絲」の朱印が捺され、巻末に「武田道伴禅人應于予與淺々舟筏也」・「丹波法常禅寺常住 全部一冊」の墨書識語がある。

(A)



Ⅲ・10 『臨濟録古帆密参』

安土桃山時代末〜江戸時代初
 (十六世紀末〜十七世紀初)

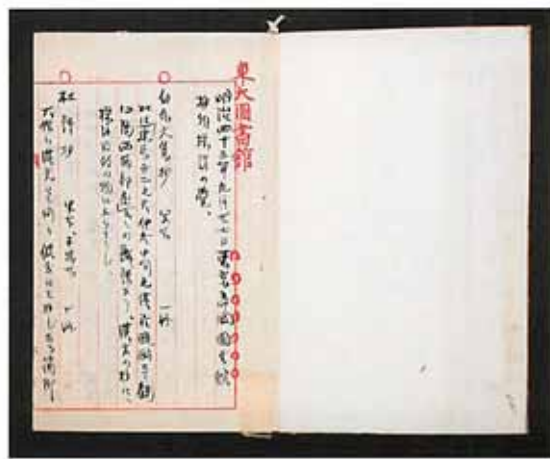
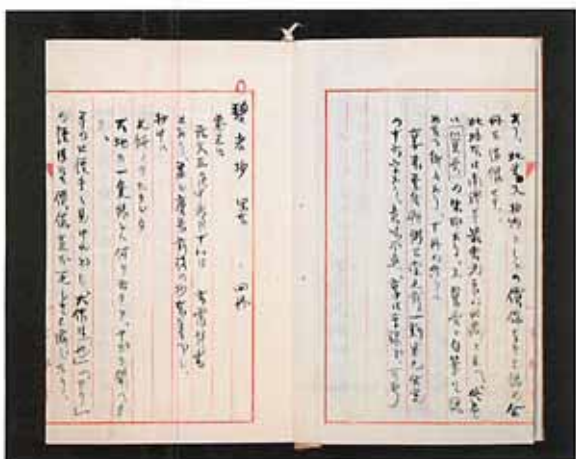
古帆周信(一五七〇〜一六四二)による『臨濟録』の密参録である。写本一冊で自筆の奥書に「維時寛永癸酉三月念五日 古帆叟周信誌之」とある。古帆は円覚寺黄梅院に住していた五山派僧であるが、幻住派という中世独特の臨濟禅も受け継いでおり、この密参録は幻住派の影響が色濃くに現れている。本書をはじめ、こうした中世独特の禅風を初めて世に紹介したのが鈴木大拙であり、大拙はこれを「菱態禅」と呼んでいる。この古帆に参じたのが東慶寺二十世の天秀秀泰尼(一六〇九〜一六四五)である。天秀尼は豊臣秀頼の息女であり、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した後、関東へ入り、東慶寺の住持として活躍しているが、その墓石に「黄梅古帆禅師に参禅して東慶寺を再興し」とあり、この幻住派の古帆の禅に参じていたことが知られる。



Ⅲ・11 『採訪録』

明治時代末
 明治四十三年頃(一九一〇年)

上村親光(かみむらかみこう、一八七三〜一九二六)が東京帝国大学・京都帝国大学・宮内庁図書寮(書陵部)・足利学校等を訪れ、五山文学や禅籍抄物について調査したノートで文部省用箋(一部、東京帝国大学用箋)を和綴にしたもの(東大図書館の調査の日付は明治四十三年九月二十七日・同二十九月)。臨濟宗大学(現・花園大学)教授であった上村は、五山文学研究の大家であり、『五山文学全集』全五巻、『禅林文芸史譚』等の優れた業績を残している。この『採訪録』の中、特に関東大震災で消失してしまった東大図書館蔵の禅籍抄物の書誌情報を書きとどめられており、たとえば東大に唯一現存していた権庭海寿の『碧巖録抄』に関する重要な書誌情報を知ることができる。

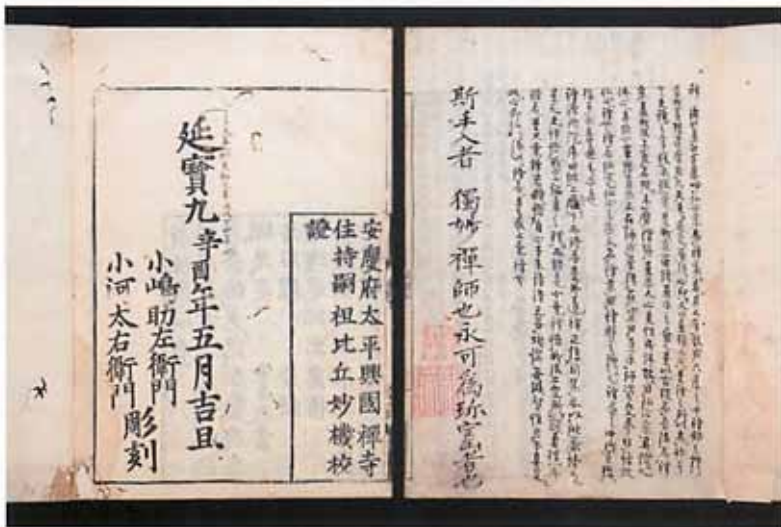


Ⅲ・12 『禪門宝訓（白隠書入本）』

江戸時代 延宝九年（一六八一年）

南宋の大慧宗杲と竹庵士珪によって編集されたものを東呉の淳熙年間（一一七四―一一八九）に浄善が增補再編した書。禅門の語録から修行者の指針となる言句、機縁等三百余を集成したものであり、それぞれ出典が明示されている。現存する版本だけでも十七種を数え、中国・朝鮮・日本の各禅林の修行者に流布した書である。このうち本書は延宝九年の二巻四冊本であり、第一冊巻首に「斯手入者独妙禅師也。永可為珍宝者也」の識語がある。このうち禅師とは白隠慧鶴のことであり、全巻にわたり、白隠の自筆書入がみられる。積翠軒文庫旧蔵。

(A)





(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・13 清涼寺式釈迦如来図

(版本) 江戸時代初期(十七世紀頃)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

本作品は京都嵯峨清涼寺の釈迦像を模した絵を粉本とし刻まれた版画であり、二重の請花の内側に蓮肉部を持つ蓮台上に立つ釈迦如来像。衲衣を通肩に纏い右手は施無畏、左手は与願印をとる。清涼寺式釈迦如来とは、清涼寺に安置される釈迦如来像およびその模刻・模写像のこと。平安時代、入宋した東大寺の僧裔然(九三八〜一〇一六)が北宋の首都であった開封にて釈迦の真影とされた「梅檀瑞像」を拝し、それを北宋・雍熙二年(九八五)、工人に模刻させ將來したもの。「梅檀瑞像」という呼称は梅檀を材料としたこと、そして古代インド・カウシャーンビー国の優填王が、釈迦の在世中に釈迦を思慕するあまりその形象を刻んだ姿を伝えていることに由来した尊称である。故に「優填王思慕像」(優填王像)とも言われる。他「三國伝来の釈迦」との呼称を持つが、これはインド・中国・日本と三つの国を渡って伝来する釈迦像の意。

本作には、清涼寺式釈迦如来の特徴となる同心円を描くかのような衣文や頭もとまでを覆い折り返しを見せる襟の表現が継承されている。相違としては、矢羽型を縦に並べ渦巻き状をつくる地髪・肉髻表現が鬚状へ変更されていること、頭光部文様の簡略、また蓮台蓮弁が上下に重なる数の省略などが挙げられるが、彫刻である像を絵画化する際の条件や、版画として仕上げる際の制約なども加味する必要がある。一方で豪華な唐草で埋め尽くされた光背周縁部やそこにあらわされた化仏、稜線が連なる身光部の他、小ぶりながらも白毫や肉髻珠とやや概念化されたつも鬚の描写まで、気配りが届いた表現も多く、全体として装飾性を伴った壮麗な画面を構成することに意が注がれた造形と推察される。

版木裏面の墨書に、版木制作にあたっては妙祐山宗林寺日賢を願主として江戸日本橋や神田の衆が施主となったことを記す。

(F)



III・14 釈迦涅槃図

(版本) 江戸時代(十七~十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

横長の版材を、長辺を合わせて六枚重ね、画面一杯に入滅する釈迦と諸衆をあらわす。(版本) 画面中央の釈迦は右脇を下に横臥し手枕の姿勢をとる。寝台は向かって左側を見せて斜めに描き、四双の沙羅双樹が画面手前を開いて寝台を囲む。向かって左から二本目の樹には釈迦の錫杖と錦袋が架かる。寝台を囲み、菩薩や比丘衆の他、両手に日月を捧げ持つ阿修羅や鳥の冠をつける迦楼羅など八部衆が描かれる。また、釈迦の足元には、手を差しのべ釈迦の足に触れる人物が描かれているが、室町時代に描かれた興聖寺本の題簽には「毘舍離城老女」とある。毘舍離とは釈迦が四十五年に及ぶ旅で立ち寄ったヴァイシャリーの事。ここでひとりの遊女、アンバリーが仏陀に帰依した。ここに指す人物はこのアンバリーとする説がある。仏陀の寝台手前には立て膝に肘を突く迦葉童子、その下に伏臥する比丘は阿難が描かれる。阿難は二〇年の間、釈迦に付き従い信頼が篤かったが、釈迦入滅の時は不在であり、その報に接し急遽駆けつけて昏倒したと伝わる。

画面右上方には釈迦の生誕後七日で没し、切利天に転生していたという母の摩耶夫人を描く。我が子の死に接し、悲しみに暮れて勝音天と共に降下する。摩耶らを先導するのは釈迦十大弟子のひとり阿那律。画面下方には迦陵頻伽や獅子の他、牛・馬・孔雀・蛙・蜻蛉・蟹など四十を越す動物や昆虫が描かれる。

本作は大拙の生前に彩色を施した版本があった。大拙の葬儀にその作品が懸けられている。

(F)

大蔵公財



Ⅲ・15 釈迦涅槃図

(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

松ヶ岡文庫には二冊の涅槃図が伝わっている。五十二面以上を数える版本の中、これら涅槃図は抜きんでて大画面となり、前頁の作品(Ⅲ・14)が最大で本作がそれに次ぐ。横長の版材三枚を、長辺を向かい合わせて並べ画像が刻まれている。上方右の摩耶夫人あたりには別材が嵌め込まれているが、裏面までは貫通していない。

モチーフの構成は諸衆、動物の配置や数などの異動があるものの、前頁の涅槃図と大要を同じくしている。その一方で、線描がやや太い他、特に沙羅双樹をあらわす線に抑揚が顕著であること、寝台上面の文様や諸衆が着す衣の柄に墨色を付けるなど作風の違いが認められる。また前頁の涅槃図同様、釈迦の入滅が拘尸那竭羅(クシヤナガラ)の跋提河(ばつだいが)ほとりであったことを示す河が描かれているが、前頁作が豊重する三角形と僅かな波の表現で留まるのに対し、本作では波先を渦にしたうねるような表現となる。あくまで彩色を施さない白黒の画面を条件としてだが、両涅槃図を比較すると絵画として狙うところが異なっていることが比較でき、興味深い。

本涅槃図版本は、大拙の没した年に発行された『THE EASTERN BUDDHIST』(Ⅲ・16)に掲載されている。

(F)

(公財) 松ヶ岡文庫



Ⅲ-16 『THE EASTERN BUDDHIST』

NEW SERIES Vol.1 No.2

昭和時代 昭和41年(1966年)



多摩美術大学美術館

(公財)

松ヶ岡文庫

Ⅲ・17 阿弥陀三尊来迎図

(版本) 江戸時代(十七、十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

(版本) 画面中心に阿弥陀如来、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩を斜めに向きにあらわす。三尊共に来迎雲及び踏割の蓮華に乗る。阿弥陀は上半身を僅かに後ろに引きやや首をかしげ直立し、観音は跪くような姿勢をとり、両手で蓮台を差し出す様に捧げ持つ。勢至は軽く膝を曲げ胸前で両手を合わせる。両菩薩に頭光が刻まれる一方で主尊たる阿弥陀には頭光や白毫から発する光明の表現が無いことが通例と異なるが、これは版本制作の後に彩色を加えることを踏まえたものだろうか。各尊の衣文や蓮台、菩薩の宝冠や標幟や胸飾などの装飾まで細やかに表されていることを踏まえると何某かの意図があったと考えられる。彩色や金にて意匠を加える意図があったのかもしれない。

本作のような来迎図は、阿弥陀信仰を持つ者がまさに臨終する際、西方浄土から両菩薩を従えた阿弥陀如来が、まさに「迎え来る」場面をあらわしている。三尊の乗る雲がたなびく様子は浄土からの移動を示し、斜めからの描写が臨場感を効果的にあらわしている。観音が持つ蓮台は往生する者がここに坐すためのものであり、ここに往生者を迎えた後に浄土へ帰還するのである。

(F)

多摩美術大学美術館



III・18 III・19
文殊菩薩図・普賢菩薩図

(版本・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)
獅子に遊戯坐で坐す文殊菩薩象(III・18・頁右)、同じく象に坐す普賢菩薩像(III・19・頁左)。文殊は如意を持物とする。左腕を屈臂し如意の柄の中程をつまみ、右腕はやや臂を上げゆるやかに腹前まで垂下し掌を上にして如意の柄頭を受ける。普賢は両腕を屈臂し胸前で経巻をひろげる。両像は、頭光が同寸であることを始め、宝冠や髻、垂髪や翻る天衣、脚部や裙の形に鏡写しのような対称性がある。また獅子と象のシルエットにも強い対称性があり、これら二つの像が一具であったことに疑いはあるまい。文殊を左脇侍として普賢を右脇侍とする釈迦如来三尊像形式として刻まれたものであろう。

(F)

III・20 西国三十三番札所観音図

(版本・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)
近畿地方から岐阜県にかけて散在する観音信仰霊場を、札所の番号順に上下七段に描いたもの。格段に五つの図像を配し最上段目の両端には円相中に梵字(キリク)を描く。像の左脇には「きい」「やまと」などの地名に続き、霊場名を記す。ひらがなの記載が多いが、「寺」は共通して漢字とする他、字形が簡明である場合または字数が収まらないような場合は漢字としたようである。画面最上部には天蓋を懸ける。

(F)





多摩美術大学 松ヶ岡文庫

Ⅲ・21 聖徳太子孝養像

(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

(版本) 敷具の上に右向きで立ち、両手で柄香炉を捧げ持つ聖徳太子の像。髪を美豆良に結い上頸法衣の上から袈裟を着し、脊を覆く。本作の図様は、十六歳の聖徳太子が、用明二年(五八七)に父である用明天皇の罹病にあたり昼夜離れずして看病を続けたという故事に由来する。太子は金の柄香炉を捧げ病氣平癒を祈ったという。

作風を見ると、顔や手の肉身はやや細い線とする一方、着衣は抑揚のある線であらわされ重みのある画面をつくっている。版本上、図像の多くの面積を占める着衣や座具はほぼ素文であるが、柄香炉をみると火炉に描かれた筋の入った網代組、蓋には火炎宝珠と宝珠など細やかな文様が刻まれている。

(F)

Ⅲ・22 釈迦・達磨・道元図

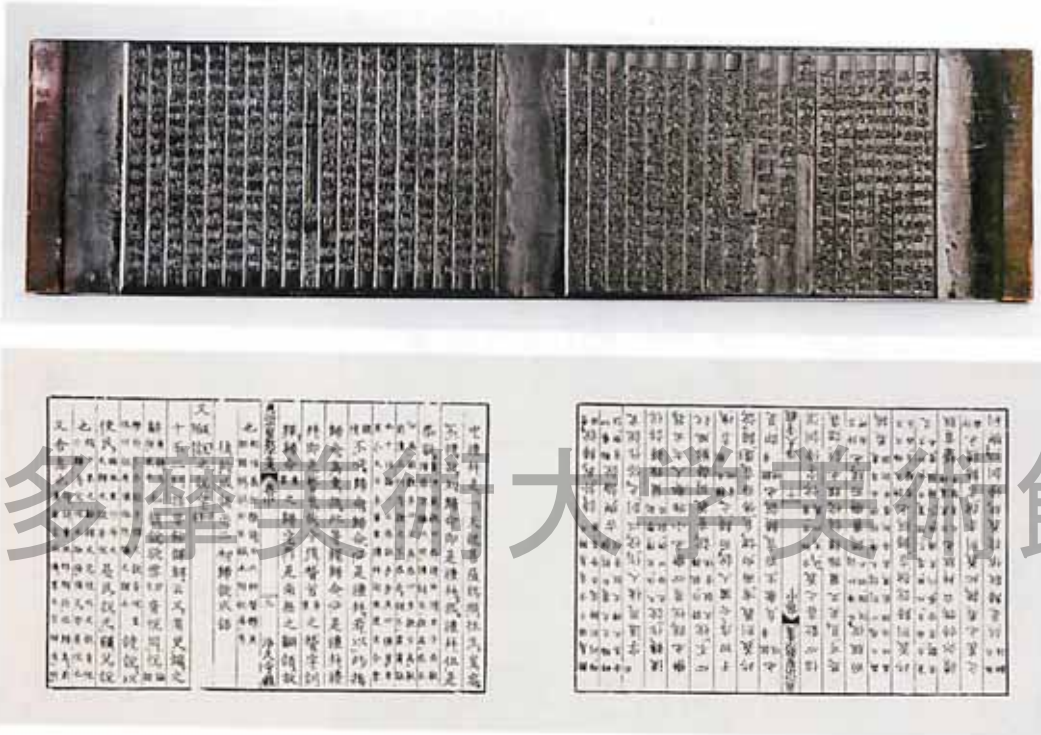
(版本参考) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

釈迦はインドで仏教を開き、達磨は中国禅宗の祖師、道元は曹洞宗の開祖である。岩坐に重なつた蓮華坐上の釈迦如来を頂点とし、髭をたくわえた達磨を画面右下に、道元を左下に配置する。達磨と道元はやや内側を正面とする。釈迦は半跏趺坐で二重光背を負い、達磨は高い背もたれが付く方坐に坐し、法衣で手を覆う。衣を掛けた曲録に座り右手に拈子を持つ道元の姿は、禅僧を描く頂相の形式となる。達磨、道元共に足元の沓床に沓を置く。

(F)



Ⅲ・25 『真宗聖経字箋』 卷中(九・十)



(版木) 江戸時代 天明二年(一七八二年)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

『真宗聖経字箋』とは浄土真宗を修するために必要な字義を説いた仏籍。全三巻からなり、釈惠忍によって編まれた。松ヶ岡文庫には『真宗聖経字箋』の巻中と巻下の版木が各一枚蔵されている。各版木は両面に文字を刻む。また各面の左右には頁が上下反転されて刻まれている。本書に掲載する版面は巻中の九・十であり、その裏には十一・十二が刻まれている。巻下は三十三・三十六をひとつの面に、その裏が三十四・三十五となる。

編者の釈惠忍(一六九三〜一七八三)は山形長命寺の十代、淨祐であり、六十歳で隱居し皆樂院惠忍と称した。和歌にすぐれ国学にも精通していた高僧だったという。

本書には江戸 天明二年(一七八二)版(Ⅲ・26)と、同じく江戸の寛政九年(一七九七)版(Ⅲ・27)があることが知られている。

(F)

Ⅲ・26

『真宗聖経字箋』

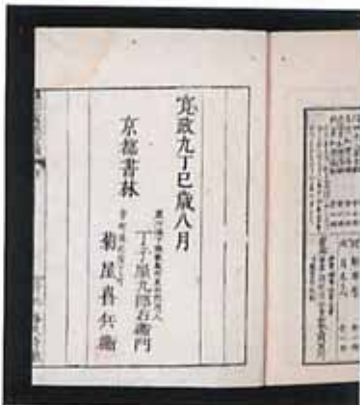
江戸時代 天明二年(一七八二年)

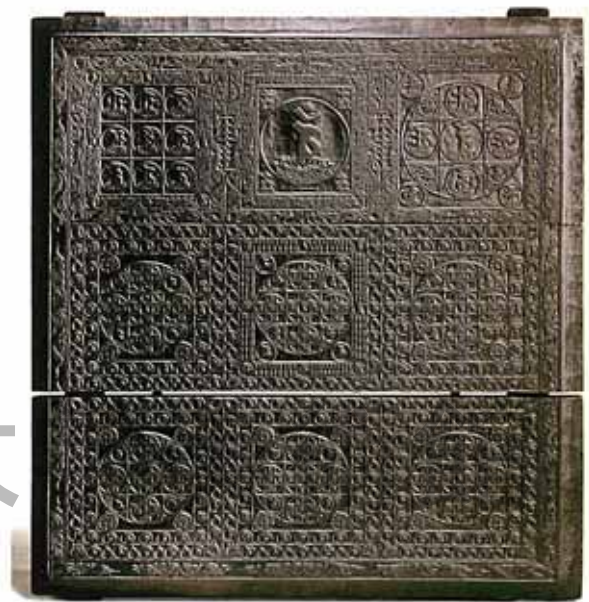


Ⅲ・27

『真宗聖経字箋』

江戸時代 寛政九年(一七九七年)





大

松

Ⅲ・28 金剛界種子曼荼羅

(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

種子曼荼羅とは尊像に代えて各像をあらわす一字の梵字(種子)で描いた曼荼羅のこと。金剛界と胎藏界の両曼荼羅を合わせて両界曼荼羅・両部曼荼羅という。金剛界とは『金剛頂経』に説かれ、天然石で最も硬いダイヤモンドを金剛石と呼ぶ如く、大日如来の絶対堅固な智慧と煩惱を能く砕く威力を示す。

図像は整然と並ぶ縦横三つの「九会」から成っており、その最上段中央に位置する「一印会」の本尊大日如来はひときわ大きな種子「𑖀」(パン)によりあらわされている。

(F)

Ⅲ・29 胎藏界種子曼荼羅

(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

Ⅲ・28と対になる胎藏界の種子曼荼羅。胎藏界は『大日教』を本拠とし、大日如来が備える理性を、男女いずれもの胎児を隔てなく生育する母胎の如くに我々が持ち、また胎児が育つように我々の心が成長することを示す。

胎藏界曼荼羅は外縁部の外金剛部院を併せた「十二院」で構成され、そのうち、本尊大日如来は中心の「中台八葉院」にある八葉蓮華の中央に鎮座。種子曼荼羅では「𑖀」(アーンク)が書かれる。

版本(Ⅲ・28・29)は横長材三枚の長辺を合わせ繋ぐ。

(E)



(公財) 松ヶ岡文庫

III・30 光明真言曼荼羅

(版本) 江戸時代(十七、十九世紀)
 (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

光明真言とは、正式に大灌頂光真言または不空灌頂光真言との名称を持つ、密教真言(マントラ)のこと。『不空羂索毘盧遮那仏大灌頂光真言』に説く真言「唵阿謨伽尾盧左曩摩訶母捺囉麼拏鉢納麼入嚩囉鉢囉囉哆野吽」(om amogha vairocana mahamudra mani Padma juala pravartaya hum) を称するものである。「ここに挙がるのは金剛界の五智如来のことであり「不空成就如来(amogha)」、大日如来(vairocana)」、阿闍如来(maha-mudra)」、宝生如来(mani)、阿彌陀如来(Padma)よ、光明を放たれんことを」と祈願する内容であり、受持する者は生死を流転する重罪を滅し、悪しき業や病などの障りを退け、英智や才能、幸福、長寿を得る。また誦して土砂を加持し、これを亡骸に散ずれば、諸々の罪が除かれて西方浄土に往生することが出来るという。

真言のまま誦することで神秘性が保たれるため、図像化する際にもこれら真言をあらわす梵字が用いられた。

本図像では上下に結跏趺坐する二軀の大日如来を描く。上が智拳印を結ぶ金剛界大日如来、下が法界定印の胎藏界大日如来であり、金剛界大日如来の周囲には円形で囲まれた二十三の梵字が右記の真言をあらわす二十三文字刻まれている。

この版本は度重なる刷りによって刻線のエッジが摩耗し始めているが、今回制作した版本においても依然として繊細な線を描き、体軀の充実感、装飾具の壮麗さ、背景を透かしみせるような頭光など図像の妙味があらわされている。

(F)

多摩美術大学 美術館



(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・31 五大明王像

(版本) 江戸時代(十七~十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

画面中央に不動明王を大きく描き、周囲には(版本)右下から時計回りに降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・金剛夜叉明王を配する。下方の降三世明王・軍荼利明王は画面外側を、上方の軍荼利明王・大威徳明王は内側を正面とする。

五大明王とは密教における五つの智(真理)をあらわす五智如来(大日如来・阿閼如来・宝生如来・不空成就如来・阿弥)の応身であり、慈悲により菩薩の姿で救済にあたるも頑固剛健なる者には教令転身、すなわち忿怒の姿にて強制的に正しい道へ導くのである。

この中最も知られているが不動明王であろう。ここでは角材を井桁状に組み合わせた瑟瑟坐に坐し、右手に三鈷剣を左手に羂索を持つ。渦巻く弁髪は左にまとめられ、頭頂に頂蓮を戴く。光背は右側には鳥の顔があらわされた迦楼羅炎となる。降三世明王は三面三目八臂で右脚を上げその下にシヴァ神と妃のウマを踏む。軍荼利明王は一面三目八であり、腹前から絡まる蛇は罪悪をあらわす蛇を調伏することを象徴している。大威徳明王は伏せた牛の上に三面三目六臂、六足で描かれる。牛は田んぼの泥沼でも力強く進む力を示し、娑婆世界でのいかなる障害を越えていくことを象徴する。金剛夜叉は三面で左右を三目に、正面を五目とする。左脚を上げた六臂の姿であらわす。また五大明王で金剛夜叉が配されるのは真言宗に伝わる密教(東密)においてであり、天台宗(台密)では烏枢沙摩明王(右脚を上げることが多い)が描かれる。

五大明王はもともと宮中の後七日御修法など国家鎮護の法要にて祀られ、後に個人の信仰となった。一幅に五大明王を描くものとして奈良国立博物館本(鎌倉時代)、各尊をそれぞれ一幅に描いた醍醐寺本(室町時代)、彫刻として東寺講堂の立体曼荼羅(平安時代)などがつとに知られている。

(F)



(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・32 不動明王二童子図

(版木) 江戸時代(十七、十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

波濤が打ち寄せる岩座の上に不動明王が立ち、(版本) 向かって右に蓮華を持つ矜羯羅童子、左に金剛棒を垂直に突く制多迦童子を描く。

火炎光背を負う不動明王は渦を巻いた弁髪を左にまとめ、頂蓮を戴く。右手に三鈷剣を、左手に鬚索を持つ。眼球を大きく描き眉を吊り上げて描くことで強い睨みが効いた表情をつくる。口は下牙齒で上唇を噛む。左牙齒の内郭が墨でつぶれ気味となっているが、版木を徴するに牙齒輪郭周辺の摩耗が進んでいることによる。

矜羯羅童子は恭順なことをあらわす無垢な童子として描かれ、制多迦童子は性悪なることを示すために粗放な様子である。共に不動明王の眷属として、本作のような三尊形式で頻繁にあらわされる。

不動明王は密教が全国に伝わる中で大日如来の教令転身として、広く流布した。多く庶民も信仰した証左として素材ながらも温かみがある作例が広い地域に伝わっている。

(F)

Ⅲ・33 浪切不動明王図

(版本・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

上半身を僅かに屈め、右脚を波濤に踏み込む不動明王。右肩の前に突き出し、腹前には手には斜めに三鈷剣を執る。左腕は後方に引き手には絹索を握む。浪切不動明王とは、弘法大師空海が留学先の唐から帰朝する時に、航海の安全を祈願して自ら刻んだと言われている図像。師の恵果によって開眼されたと伝わる。海原を越え無事に帰朝した空海にあやかり、船路へ出る者の守護に効験あらたかな像として信仰を集めている。高野山南院に祀られる同像を根本として浪切不動明王図は全国へ広まった。



(F)

Ⅲ・34 十三仏図

(版本・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

十三仏とは、中陰(四十九日)や周忌の法要など故人を追善回向する忌日に配当する仏菩薩明王のこと。地獄で衆生の裁く十王信仰と深く関連している。この信仰は平安時代末から鎌倉時代以降に普及し、版画では室町時代以降の作品が伝わっている。図像は立像形式と坐像形式に大別され、本作は諸仏が来迎する様を描いた立像形式となる。

便宜的に諸仏を上から五段に区切ると
一段目 虚空藏菩薩(向かって右から。全段同。)
二段目 大日如来・阿闍如来・阿弥陀如来
三段目 弥勒菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩
四段目 地藏菩薩・普賢菩薩
五段目 不動明王・釈迦如来・文殊菩薩
の各尊を描く。



(F)

(版本・参考) 江戸時代(十七、十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)



(公財)松ヶ岡文庫 院門普寺谷長山豊

奈良、長谷寺の十一面観音菩薩立像と脇侍像を描く。頭頂仏を十一面として、頭部正面の化仏は阿弥陀如来、左手に花瓶を右手に錫杖を持つ。錫杖を持つ十一面観音菩薩像は經典には説かれず、右手には数珠を持つのが通例である。錫杖は長谷寺の本尊たる十一面観音菩薩立像をしめす特有の表現であり、この形式を持つ像を「長谷寺式十一面観音像」と称する。举身光とその周縁部に十一面観音の梵字「キヤ」を十一字配すること、やはり長谷寺本尊に倣う。台座は通常の蓮華座ではなく方形であるが、これも長谷寺像に固有のもの。『今昔物語』によれば、長谷寺十一面観音が奈良時代に造像された時、開祖の徳道に夢告があり金剛宝盤石が出現したという。現在は、大盤石は木製の宝座蓋で覆われている。左脇侍に侍難陀竜王像を、右脇侍に兩宝童子を配することも長谷寺本尊と同じ表現である。

三像の下には題簽で「豊山長谷寺普門院」と書く。「豊山」とは真言宗豊山派のこと。長谷寺は同派の大本山である。「普門院」は長谷寺の塔頭で、仁王門の手前東側に位置している。

(E)

Ⅲ・36 千手観音像

(版本・参考) 江戸時代(十七~十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)



(公財)松ヶ岡文庫

蓮華坐上に立ち拳身光を負う千手観音像を正面に描く。蓮華坐は返花の上に請花を重ね、蓮肉に種子を描く。十一面の頭頂仏を付け、頭部正面には化仏の阿弥陀如来を刻む。真手・脇手は左右で各十五臂を描く。四十二臂とする千手菩薩像が通例の中、本作は三十臂の姿となる。合掌手の他に蓮華・宝鉢・錫杖・三叉戟・宝珠・楼閣・三鈷劍・数珠を持つ。

天衣の両端が蓮華を執る真手からゆるやかに垂下し、蓮華座請花あたりで外側に反り翻る。

(E)

Ⅲ・37 弘法大師像

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

上方に光明真言曼荼羅を描く弘法大師像。内相には胎藏界の大日如来を中心とする五智如来の各梵字、外周に光明真言を書く。
椅子式の牀坐に坐す弘法大師は右手に五鈷杵、左手に数珠を執り、沓と水瓶が牀座下に置かれる。弘法大師を描く際に典型となる真如親王様。

(F)



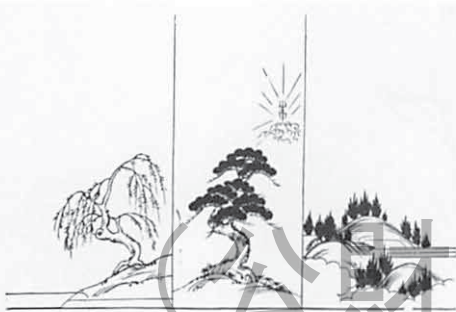
Ⅲ・38 弘法大師像

(版木・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

真如親王様の弘法大師御影。「真如親王様」とは、入定を間近にした弘法大師空海が弟子の実恵に求められ示した像を、真如親王(高岳親王)が写したことに由来する。
画面上方には高野山と弘法大師の故事に因んだ景色が描かれる。各図について以下に記す。
右：高野山の遠望
中：三鈷の松 高野山伽藍の御影堂前に立つ松のこと。唐で真言密教を修した弘法大師が帰朝する際、密教の教えを広めるに相応しい場所へ向かうようにと、師の恵果から授かった三鈷杵を投げた。
帰朝した空海が三鈷杵を探していると、高野山の松に掛かっていたという。本作には松に向かって飛行する三鈷杵が描かれている。

左：蛇柳 高野山奥の院付近に生えている柳のこと。往時、大蛇が人々に害悪を為しており、弘法大師が法力によって柳と変えたと伝わる。また弘法の法力によって蛇が他所へ移ると其跡に件の蛇柳が生じたともいふ。

(F)





III・41 III・42
真言八祖像

(版木・参考) 江戸時代(十七、十九世紀)
(版本 平成時代 平成二十八年(二〇一六年))
真言宗はインドで大日如来が金剛薩埵に伝法灌頂を授け、さらに龍猛・龍智・金剛智に伝えられた後に、中国へ渡り不空が大成する。不空の高弟であった惠果へ真義が受け、その極意を長安の青竜寺で空海が修し高野山が開かれた。真言宗を伝えた龍猛から空海の六祖師に加え、中国へ「大日経」と伝えた善無畏と「大日経疏」を訳経した一行の二祖師を描いたものが真言八祖像である。
松ヶ岡文庫には一具の真言八祖像となる版本が伝わる、その版本 III・41(右)の上段右に龍猛・左に龍智、下段右に不空・左に金剛智を、III・42(左)の上段右に善無畏・左に一行、下段右に空海・左に惠果を描く。

III・43
天台・伝教兩大師像

(版木) 江戸時代(十七、十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)
背もたれを付ける牀坐に坐す二僧を正面に描く。両像とも頭巾を被り禪定を結んで瞑想する。各像の上部には人物の名が刻まれ、(版本) 向かって右に「天台智者大師」、左に「根本傳教大師」と書く。「天台智者大師」とは天台宗の実質的開祖である智顛であり、「根本傳教大師」は比叡山延暦寺を創建し日本で天台宗の根本となった最澄のこと。名の脇にある月日は、各大師の忌日である(智顛十一月二十四日、最澄六月四日)。天台智者大師像の頭頂には禪鎖を載せる。
版木は面積の大きい板材に、兩大師像を刻んだ矩形の版材を貼り、その上方に尊名を刻む「コ」字型の材を付ける。



Ⅲ・44 千支八尊像

(版本) 画面上方に日月をあらわし、その下に十二支の各歳の守護となる神仏八尊を刻む。右列は一尊を単年で、左列は一尊で二年分を司る。格段の尊名は上段(以下全段右から)を觀世音菩薩(子)・虚空藏菩薩(丑寅)、二段目を文殊菩薩(卯)・普賢菩薩(辰巳)、三段目を勢至菩薩(午)・大日如来(未申)、最下段四段目を不動明王(酉)・八幡太神(戌亥)と刻む。

(版本) 江戸時代 文久二年(一八六二年)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)



(F)

Ⅲ・45 牛頭天王

牛頭天王は神仏習合の神で薬師如来を本地とする。古代インドのシュラーヴァステイー(舎衛城)にあり釈迦の説法地として知られる祇園精舎の守護神とされ、日本では京都祇園の八坂神社の祭神として祀られた。暴虐なる性質を持つ一方で強い霊力があると考えられ、その強い力から信仰を集めた。疫病を調伏する行疫神としても信仰される。

『祇園牛頭天王縁起』にまれば、牛頭天王の本地である東方薬師如来が須弥山にある豊饒國に垂迹し、国王の王子として顕現した。七歳で身長七尺五寸(約二一四cm)で頭頂に三尺の牛頭を付ける。やがて王位を継ぎ牛頭天王を名乗ったが、恐ろしい形相から女人が近づかない。後、山鳩の告げにより、沙羯羅龍王の三女、婆利采女を妃とし八王子を生む。

本作では、岩坐上に左脚を踏み下げて坐す怒髪怒形形の牛頭天王を描く。右手に斧を左手に綱索を執る。牛頭天王の足下には、妻である婆利采女とそこに相対する八王子を描く。婆利采女は方位神として歳徳神と同一視される。本図録P107に歳徳神(Ⅲ・63)を掲載する。

(F)

(版本・参考) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)





(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・46 役行者図

(版木) 江戸時代(十七、十九世紀)

(版木) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

岩座に腰掛ける役行者と前鬼・後鬼を三尊形式で描く。役行者は髭をたくわえ長い眉の相貌で、腰を出した左脚を踏み下げた遊戯坐で坐す。両腕を屈臂し右手には錫杖、左手に経巻を持つ。袈裟と褌をまとい、長頭巾を被る。前鬼は斧を肩に掛け、後鬼は水紙を持つ。

役行者、つまり役小角は修験道の始祖として知られる。大和国葛城に舒明天皇六年(六三四)に生まれ、幼少から優れて学問に通じていたという(没年不詳)。常に仏法を護持し生駒山から熊野での苦行を重ねた後、三十二歳で葛城山へ登る。その岩窟中で孔雀明王像を祀り三十年に及ぶ修行の末、神通力を体得し鬼神を駆使や奇瑞をあらわす力を得たという。葛城山が最古修験道場と言われる由縁である。さらに、大峯山(金峯山)で金剛藏王大権現(藏王権現)を感得したと伝わる。

役行者は飛鳥から奈良時代に生き、その実在が信じられているが、確証となるものが少ない伝説的人物である。役小角の伝説は『今昔物語集』『三宝絵詞』『本朝神仙伝』などに記されている。鎌倉時代末に成立した『金峯山創草記』によれば、康和五年(一一三〇)の吉野藏王堂における曼荼羅供で役行者御影供えが修せられたとある他、現存最古の作例として富士山麓の行者堂に安置されていた三尊彫刻が伝わる。鎌倉時代以降、山岳信仰と修験道の高まりと共に多くの彫刻や絵画が作られ、特に江戸時代には多くの版画が開版された。

(F)



(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・47 蔵王権現曼荼羅

(版木) 江戸時代 (十七、十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年 (二〇一六年)

大峯山 (金峯山) にて千日に渡る修練苦行を修めた役行者が、ついに示現・感得した蔵王権現を中心とした山中の群像を、蔵王権現曼荼羅または金峯山曼荼羅という。画面中央に描く蔵王権現は三目の忿怒形・怒髪で、三結をつけ火炎を持つ頭光を負う。四肢は激しい躍動感をあらわし、左脚で地面を踏み、右脚を振り上げる。振りかざした右手には三結杵を持ち、左手は拳印を組み腰にあてる。腹前に舌状の虎皮を描く。向かって右下には役行者が蔵王権現を見上げ、前後鬼を従える。左下には綱索・剣を執る不動明王が立ち、山中には八大童子を配する。

画面上方には向かって右に弁財天、左に地藏菩薩を描くが、これは蔵王権現の感得に至るまでに役行者の前に現れたという二尊である。

これら蔵王権現以前に現れた二尊には異説もあり、釈迦として次に弥勒が現じたがともにこれら二尊の形相では諸衆を迷いの彼岸から導くことは出来ないと言われた。次に蔵王権現が見れると、甚だ怖る可き相貌だったという。

(F)

Ⅲ・48 朝熊岳曼荼羅

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

「伊勢朝熊岳」と題を付ける。朝熊岳(山)に境内を構え、伊勢神宮の奥の院としてまた鬼門の守護として信仰を集めてきた金剛証寺。その本尊、虚空蔵菩薩を頂点に描き、(版本)右回りに荼枳尼天・寿老人・大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天を描く。「伊勢朝熊岳」の題は別材を釘で留めて取り付けられている。

(F)



伊勢朝熊岳

Ⅲ・49 朝熊岳曼荼羅

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

Ⅲ・48と同じく伊勢朝熊岳の信仰に関わる図像。頂点に虚空蔵菩薩を描き、下方には天照神、豊受神をあらわす。画面中央には天孫大神宮と題が付く、四臂で如来形頭部を持つ神像が龍に乗る。

(F)



虚空蔵菩薩

天孫大神宮

天照大神宮

豊受大神宮

Ⅲ・50 愛宕山曼荼羅

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)
 京都の北西(天門)に位置する愛宕山は北東(鬼門)の比叡山と並び京都の鎮護として信仰を集め修験道場ともなった。(版本) 本作は山頂にある現愛宕神社之祭神、伊邪那美の本地仏将軍地藏を中心に、右上から烏天狗・不動明王・役行者と前後鬼・獅子・毘沙門天・地藏菩薩を配する。上方には雲・山岳・烏天狗八駆を、下方には狛犬を描く。

(F)



Ⅲ・51 雨宝童子図

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀) (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)
 雨宝童子とは真言宗と習合した両部神道の神。求福・除災の神として信仰される。正式名を金剛赤精善神雨宝童子と言い、天照が日向に降りた時の姿とされる。女童の姿で描き頭頂に五輪塔を戴く。頭光を負う。左手に宝珠を捧持し、右手は直立する宝棒を持つ。二侍神は(版本) 向かって右が八幡神、左は春日神である。朝熊岳には平安時代に遡る彫刻があり、信仰の古きを感じさせる。

(F)





(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・52 天孫降臨萬祖神影図

(版本) 明治時代(十九〜二十世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

天孫降臨神話に基づく図像。オホクニヌシによる国譲り、つまり高天原の天神による葦原中国(日本の国土)の統治が成立した後、アマテラスは、子のアメノウシオミミに誕生したホノニギに天下りを命じる。拜命したホノニギは五伴緒(アメノコヤネ・アメノウズメ・フトダマ・イシコリドメ・タモノヤ)を従え、八尺の勾玉・八咫鏡・草薙剣の三種の神器を賜る。また、オモヒカネ・タチカラヲ・アメノイハトハケを副えて降臨の準備を進めた。アマテラスはホノニギに「鏡を私の魂として祀れ」と言い、オモヒカネには「祀りを司れ」と命ずる。

本作では、最上部に「天孫降臨萬祖神影」の題を書きアメノウシオミミと無数の随神を群像で描く。画中に傘が差し掛けられた輿があり、そこにホノニギが載るのである。また上部の円光にはアマテラスが日向に下りた時の姿とされる両童子を描き、その両脇には八咫鏡・草薙剣を携える二神、直下には飛雲に乗り八尺の勾玉を捧げ持つ神をあらわす。

画面下部には猿田彦神とアメノウズメが対する。猿田彦の姿は鼻の長さ七咫(約二二六cm)、背丈七尺(約二一〇cm)また口の脇が明るく輝き、眼は八咫鏡の如くでほおずきのように照り輝いていたという。アメノウズメは伝説のように上半身を露わに描く。山峯は、アメノウシオミミが降臨した日向国の高千穂峰としてよいだろう。

素朴な表現ではあるが、無数の随神が群集し降臨してくる様は、天孫降臨という神話へ込める圧倒的かつ凝縮した力に溢れている。

(F)

III・53

金刀比羅宮祭神図（大物主尊像）

（版本・参考）明治時代（十九～二十世紀）

（版本）平成時代 平成二十八年（二〇一六年）

「こんびらさん」としても親しまれる金比羅宮。香川県、琴平山（象頭山）に鎮坐する。往古は琴平神社と呼ばれた。大物主を祭神としている。中世以降、明治の神仏分離令以前迄は、象頭山松尾寺金光院であり、本地垂迹説によって金毘羅大権現の信仰があった。（本地仏：不動明王）

本作は題字「金比羅宮祭神図 大物主尊御繪像」を大きく描き、左腰に帯刀する大物主が雲に乗る。

金刀比羅宮祭神
大物主尊御繪像



伊那那美
熊野天須美大拙
奉解と男神

多摩美術大学美術館

III・54 稲荷大明神・弁才天・大黒天像

（版本・参考）幕末～明治時代（十九世紀）

（版本）平成時代 平成二十八年（二〇一六年）

岩坐上に立つ稲荷神とその右下に弁財天、左に大黒天を描く。三神の下に鍵と珠を啜える一対の狐を描く。稲荷神は両端に稲穂を挿した竿を担ぎ左に鎌を持つ。弁財天は八臂の坐像で描かれ真手に宝珠と宝剣を、脇手に弓・長鉾・弓・宝輪を持つ。大黒天は俵上に立ち木槌と七宝が入るとされる袋を担ぐ通例の像容である。三神が司る豊穰をあらわす図像である。



(F)

(公財) 松ヶ岡文庫

III・55

熊野三神像

（版本・参考）幕末～明治時代（十九世紀）

（版本）平成時代 平成二十八年（二〇一六年）

熊野三山のうち、那智大社に祀られる三尊形式で描く。三神ともに雲に乗り主神たる熊野夫須美大神は拱手する正面の姿でひときわ大きくあらわされる。向かって右下の女神は伊那那美は女性像、左下の事解之男神は帯刀し袖で覆った拱手の姿で描かれる。

(F)



Ⅲ・56 馬鳴大菩薩像

(版本・参考) 明治時代 明治二十三年(一八九〇年)
 (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

養蚕の神として信仰された馬鳴大菩薩を描く。尊名の題字左右には「養蚕信盛」「家運永昌」の文字が刻まれる。(版本) 騎馬の馬鳴大菩薩は右手に桑葉を持ち、左手に蚕を持つ。図像下方には「上野国吾妻郡矢倉鎮座」とあるが、現在の群馬県に地名が伝わる。教学院は未詳。版本裏面の墨書銘から明治二十三年(一八九〇年)の開版と分かる。

(F)



養蚕信盛
 馬鳴大菩薩
 家運永昌



行澤山教学院謹言

座鎮倉矢郡妻吾國野上

Ⅲ・57 茶枳尼天

(版本・参考) 江戸時代 弘化四年(一八四八年)
 (版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

もともとはインドの夜叉神(ヤクシニー)で、自在の通力があり六月前に人の死を知りその心臓を食すという。また真言宗では胎藏界曼荼羅の外金剛部院(南方)に配される。近世の日本では、茶枳尼天が乗る霊狐を稲荷神の狐と結びつけ同一視されるようになり、五穀豊穡・開運・繁盛、福財の神として信仰が流布した。本作は岩坐上に宝剣と宝珠を持つ白狐に乗った女神像で日本発展型の茶枳尼天像を描く。

(F)



Ⅲ・58 多賀大社神

滋賀県に鎮坐する多賀大社神を描く。岩坐上に騎馬する神像を菩薩形であらわす神仏習合の図像。(版本) 左手に梵篋を、右手に金剛杵を持つ。

(版本) 大正時代(二十世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

(F)

多賀
大社



Ⅲ・59 秋葉権現

静岡県秋葉山を神体とする山岳信仰と中世以降の修験霊場信仰が習合した神。狐に乗った鳥天狗の姿であらわし、山伏が信仰した不動明王の尊容イメージを重ねたと考えられる特徴、すなわち右手に剣を左に鬚索を持ち、渦を巻く弁髪を左にまとめ、火炎光背を負う。

(版本) 江戸時代(十七、十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

(F)





(公財) 松ヶ岡文庫



III・60 青面金剛図

(版木) 江戸時代(十七〜十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

本作は青面金剛及び眷属などを描く図像で、庚申講の本尊として祀られたものである。画面中心には、岩坐上で邪鬼を踏む青面金剛は三目六臂で怒髪、頭光を負い周囲に火炎をあらわす。髪際近くには正面に髑髏を付ける宝冠を描く。腕剣を付け、手には正面に宝剣・ショケラの髪を吊り下げ持ち、その他に三叉戟・宝輪・弓・矢を持つ。頭には一匹の蛇を絡め、腰からは互いに身を絡めた二匹の蛇が左右対称に下がる。青面金剛の両脇には、向かって左に柄香炉を持つ童子、右には笏を持つ童子が侍り、下方には戟や剣を持つ四夜叉を配する。画面最下方の中心には二羽の鶏、左右には二匹の猿を描く。

庚申講とは江戸時代に盛んになった民俗行事である。もともとは道教の教えに基づくもので仏教・神道が混濁した習俗となった。その教えは、人間の体に棲み人の短命を願うという三戸の虫が常に体内からその人を監視しているというもので、干支の巡りでやってくる庚申の日の夜に、三戸の虫が人の体を抜け出して天に昇り、天帝にその人の悪事を報告する。天帝は罪過に応じ三日から三百日の寿命を縮めるという。その災いを避けるため人々は寝ずに潔斎し、経を唱え過ごし、朝を待った。

青面金剛は青色大金剛夜叉・伝屍病鬼とも言い、本来は鬼病を流行らせる鬼神であり、その災いを避けるために祀られた。鬼病とは伝尸病(一説に肺結核)といい、伝尸虫というものを媒介とし伝染したという。夜叉とされることから、金剛夜叉のような明王の姿が転用された。

猿は道教・仏教にも説くものでないが庚申の「申」と「猿」を付会したもの、鶏は徹夜の講が朝に解散となる象徴として登場するようになったと考えられている。ショケラは半裸女性像が一般的だが、本作では髪をたくわえた男性である。

(F)



(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・61 荒神図

(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀)

(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

荒神は三宝荒神・三方荒神とも書く。日本古代からの「荒ぶる神」への信仰や大日経疏が説く剣婆が習合したとも、役行者が感得した神として修験が創成したとも考えられているが、出自は定かでない。また不浄を嫌うため、民間では家の中で最浄処である竈に居るとされている。形姿も多種あるが、大きく如来荒神(金剛薩埵の姿)と忿怒荒神(忿怒形・多面多臂)の二種が知られている。

本像は三面三目八臂で怒髪・忿怒の形相を備える忿怒荒神形である。岩坐上に立ち、手には鐙を付けた刀や弓・箭を持つ。両脇侍は装束形の神を描き、その下には半裸形の人物が、刀を振りかざす夜叉と弓を射る夜叉から逃げ惑う姿をあらわす。この人物は、上半身を露わとしていること、髪の長い女人像で描かれることを併せると青面金剛がしばしば吊り下げるいわゆるシヨケラに相当するものであろう。また、二本の竹の間には切り紙をつけた紐が張られ、その下にある竈が神聖であることを示している。竈にはふいごが付き、前面には炭をあらわすような黒片が見える。竈上には火炎光を備えた三宝珠と、その両脇に高坏形の器が見えるが神酒壺であろうか。

画面最下部には夜叉と装束を着す人物が鋏を叩く鍛冶の様子、女房装束を着す女性像が描かれる。三宝荒神は竈神ともなり民家で祀られる他に、金屋子神のように鍛冶屋からも信仰された。

(F)



(公財) 松ヶ岡文庫

Ⅲ・62 弁財天十五童子像

(版本) 江戸時代(十七、十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

弁財天はインドの神で梵語の薩羅薩伐底(Sarasvatī)を訳した名称であり、もと「弁才天」と書いた。豊穡と技芸を司り、妙音天・妙音楽天とも訳される。薩羅薩伐底とはインダス河の支流と考えられる伝説の河であり、その化身であった。鎌倉時代以降、「弁材天」は「弁財天」と書かれることが一般化し、財宝・智慧・言語・音楽・延寿の福德神として十五童子を伴い描かれるようになった。加え、同じく福德円満を司る吉祥天とも習合するようになる。

本図は、画面上方に日月を描く。主尊弁財天は岩坐上に半跏趺坐で坐す八臂の姿で、火炎を付けた頭光を負う。頭頂にはふたつの八輻輪飾り・蟠踞する人面蛇・鳥居をつける。八臂の弁財天は『金光明最勝王経』に説かれ、弓・箭・鞘・矛・斧・杵・鉄輪・扇索を持つとされるが、本図では斧・扇索の代わりとして(宝蔵の)鍵・宝珠が描かれる。宝珠は吉祥天の持物であり、習合の姿をあらわしている。

画面下方には、十五童子の群像が描かれる。多くは豊穡と財をあらわす稲穂・飯・宝珠・天秤などを持つが、群像中向かって左上方には楕円形の袋を斜め持つ童子がある。上部が膨らんだ形状と弁財天が持つ技芸の側面を踏まえると、琴が収められていると考えられようか。また牛馬は農耕にとって不可欠な財産として配されているのだろう。米俵を積んだ船は、豊穡のシンボルであり、またもと河の神であった弁財天の付帯アイテムである水辺をしめしている。

弁財天の下方、左右に描かれる大黒天・毘沙門天は共に豊穡や財宝富貴を司る。本作の作柄を拝するに、威儀を整えた絵画粉本を持つと思われる弁財天に対し、闊達な素朴さを備える眷属の姿に表現の対比が見受けられよう。

(F)

III・63 歳徳神



(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

椅坐の歳徳神と八眷属を描く。眷属は牛頭天王の子である。歳徳神とは、その年の吉方位にいとされ、年の福徳を司る。この神がいる方が恵方である。毎正月には恵方に向けて棚を作りここに歳徳神を家に招き入れる。依代となる鏡餅・門松、そしてこの神が居る場所に不浄が入る事を防ぐ注連飾りが描かれる。

(F)

III・64 西王母・侍女・寿老人図



(版本) 江戸時代(十七〜十九世紀)
(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)

玄鹿を伴う寿老人、盆に載る桃の実を捧げ持つ西王母、さらに画面右下に西王母の侍女を配する。また松・竹・二羽の鶴、二匹の亀を描く。齒をみせて笑う寿老人や笑みを浮かべる侍女、また寿老人が鶴と戯れるような様子は、吉祥モチーフに一層和やかな雰囲気添えている。長寿、福・財をあらわす寿老人は、江戸時代の庶民に歓迎されたモチーフで多くの版が刻まれた。

(F)



III・65 『新編仏法大明録』

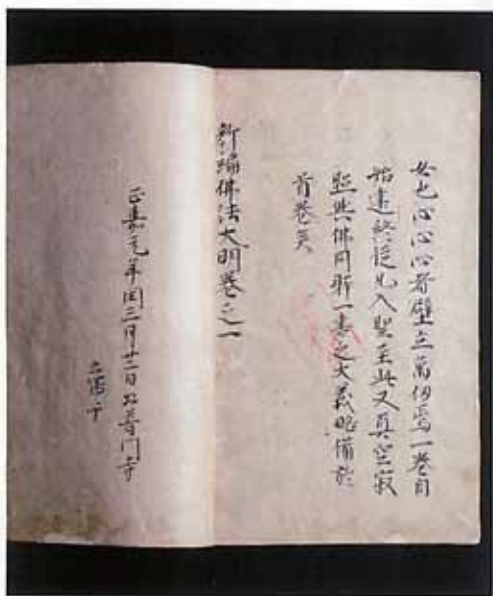
南宋の圭堂居士によって編纂され、禅宗の立場より儒仏道の三教一致の思想を体系化した書である。本書は八巻八冊の写本であるが、第一巻の尾に「正嘉元年閏三月廿二日於普門寺書写畢」とあり、正嘉元年（一二五七）に東福寺普門院で書写された鎌倉期の古写本である。この正嘉元年には聖一國師が鎌倉にて北条時頼にこの『大明録』を講じていることから（『聖一國師年譜』）本書が聖一國師手沢本もしくは座右の書とされている。なお東福寺には聖一國師将来の宋版『仏法大明録』（重要文化財）も伝えられており、鎌倉期の臨濟禅、特に東福寺の禅風を知る上で、この『仏法大明録』は重要な意義をもっている。本書は昭和十四年に重要文化財に指定され、日本勧業銀行総裁であった石井積翠軒居士（光雄一八八一～一九六六）の旧蔵本である。（重要文化財）

鎌倉時代 正嘉元年（一二五七年）



(A)

(公財) 松ヶ岡文庫





多摩美術大学美術館

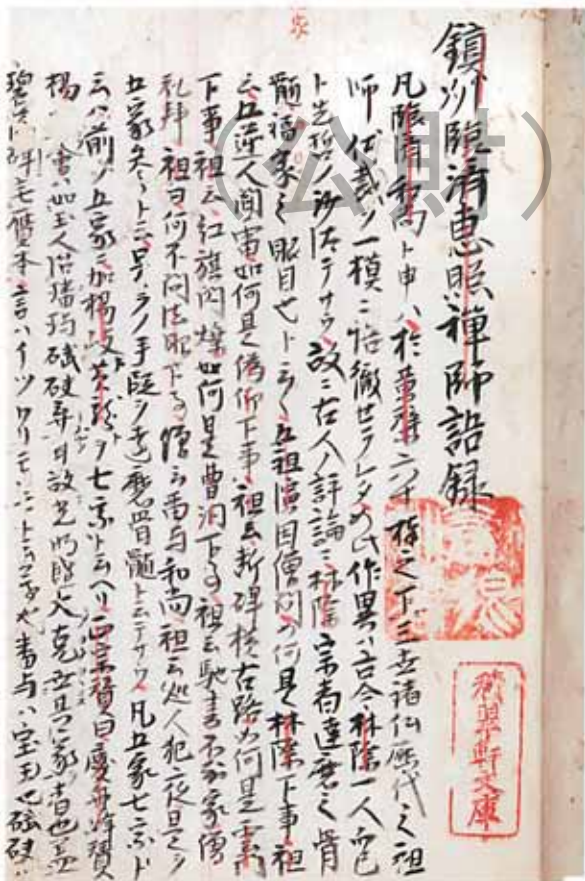
III・66 『臨濟録抄 五逆人聞雷』

江戸時代 正保二年（一六四五年）

四巻四冊の写本で、『臨濟録』（臨濟義玄（？）八六七年）の語録を注解した鈔。各巻表紙に「五逆人聞雷」と墨書された題箋が貼られ、頓・漸・秘・密の巻名が記される。本書は沢庵宗彭自筆本であり、各題箋と表紙を割って「宗彭」の朱印が捺され、全巻に沢庵の朱註・朱点・朱引が見られる。頓巻の馬防序の註釈に沢庵が「即今茲寛永四年丁卯也」と朱筆で追記しており、沢庵五五歳の頃、本抄の執筆が手がけられたことがわかる。沢庵宗彭は紫衣事件で出羽に流された後、將軍家光の帰依を受けて品川に東海寺を開き、柳生宗矩に『不動智神妙録』を示すなど、大徳寺派の名僧として多くの著述や事績を残している。昭和一三年に沢庵自筆本として重要美術品とされている。積翠軒文庫旧蔵本。（重要美術品）

(A)

松ヶ岡文庫





III・68
石造三重塔

鎌倉時代

前頁(III・67)観音菩薩坐像の向かって左に安置される石造三重塔。素文の基壇上に複弁の請花・返花からなる基壇を置き、そこに塔身を建てる。屋根の広さは五重塔の二・四段目を省いた比率となり、棟の傾斜は上段に向かうほど勾配が上がる。軒は緩やかに弓反り、棟近くで反りが強くなる。また瓦当部は素文で上層部に向うに従い、やや厚みを増す。塔身の初段四面の中央に龕を穿ち、そこに如来形坐像を刻む。格段の塔身と屋根の間には、斗拱を意匠化した階段状の造形があり、初段・二段目が「三段」、三段目には「二段」であらわす。相輪部は露盤の上に二重相輪をつけ、その上の尖頭形は相輪をあらわしているようか。わびた風情とともに松ヶ岡文庫への来客を迎える瀟洒な塔である。

(F)

各論・資料

多摩美術大学美術館

出品目録

鈴木大拙略年譜及び主要著作一覽

来たるべき「東方哲学」―鈴木大拙の可能性

安藤礼二

D・T・スズキとヒート世代

重松宗育

(公財) 松ヶ岡文庫

D・T・スズキとビート世代

重松宗育

ゼン（禅）という言葉も、今では世界中で多くの人々の知るところだが、その禅を西欧世界に紹介した最大の功労者と言ったら、誰しも「D・T・スズキ」（鈴木大拙）の名前を挙げるだろう。

私の場合、大拙の功績という点、決まって無学祖元禅師の偈頌（漢詩）の一節に思いが至る。

後代は知らず前代の力、却つて言う、南麓なんろく自ずから肥饒ひにようなりと。（『仏光録』）
なぜか分らないが北側の敵よりこの南側のほうが野菜の生育がいい、などと、先人の努力に思いの至らぬ者はさもなく言う。事実は、先人がその土を丹念に耕し、肥沃にしておいてくれたからで、いい野菜が採れるのは先人の献身的努力のお陰なのだ。こんな意味の詩である。

ずいぶん前の話だが、かつて私は、アメリカで『禅林句集』の英訳『Zen Forest (1981)』を出版したときに「しみじみ」とこの言葉を反芻したことを思い出す。禅紹介の第一歩は、禅に関わる様々な基本用語の英訳から始まる。この厄介な仕事になされない限り、禅の紹介は無理である。この難しい仕事を克服し、禅の伝統や思想を紹介した大拙のような人がいたからこそ、拙著も読んでもらえるだけのお膳立てができていたのである。今や世界に広まった禅が存在するのは、間違いなく鈴木大拙のお陰と言ってよい。道を切り開いておいてくれた先人の功績、「前代の力」は尊い。

欧米に初めて禅が紹介されたのは、一八九三年（明治二六）のこと、アメリカ・シカゴで聞かれた万国宗教会議でのことである。この会議に日本から参加した仏教者六名の中に、臨済宗円覚寺派管長の釈宗演がいた。このとき釈宗演の語ったテーマは、「仏教の要旨並びに因果法」だから、禅そのものではなかったが、ともかくも、これが日本の禅僧が欧米の人々の前に姿を見せた最初であり、ちなみにこの会議に随行したのが若き日の鈴木大拙であった。

文庫

釈宗演は、帰国後、一八九七年に、弟子の大拙をシカゴ郊外に住むポール・ケラス（一八五二—一九一九）のもとに送った。そして二六歳の青年大拙は、一九〇八年の帰国までの十二年間にわたり、オープンコート出版社にあって助手として、月刊誌『ザ・オープン・コート』や季刊誌『ザ・モニスト』の編集に携わった。この間、カルチャーショックに耐え、経済的な問題や異国での孤独に耐えながら、後のD・T・スズキを育む数々の体験をしたに違いない。ラサール滞を終えて、大拙はニューヨークからイギリスを回って、翌年に帰国する。そして、この貴重な経験をふまえ、「D・T・スズキ」として、英文の著書を数多く出版し、また何回かの海外講演旅行を通して、禅の紹介に尽力するのである。

特に、一九二七年から三四年にかけて出版された『エッセイズ・イン・ゼン・ブディズム』三巻と、『禅と日本文化』（一九三六）は多くの人々に読まれた。しかしながら多くの読者は、不立文字を標榜する禅を、書物を通して学ぶだけでは満足できなかったに違いない。そしてそうした読者にとって、ついに待ち構えていた千載一遇の機会がやってくるのである。

一九四九年六月、大拙は羽田空港からハワイへ向けて出発した。

* 余談になるが、その直前、朝比奈宗源老師と師父重松輝宗和尚は、送別の挨拶に円覚寺・正伝庵の大拙を訪ね、その折りに大拙から贈られた「平常心是道」一幅の書が私の手元にある。師父の添え書きに「居士のコロンビア大学客員教授として赴任の際の記念として残されたもの。別峰老漢「朝比奈老師」と共にいたたく」とある。



ハワイでは東西哲学者大会へ出席し、翌五十年本土に渡ってカリフォルニアで活動した。そして、九月にニューヨークへ移り居を構えたときには、すでに八十歳を超えていたが、禅仏教を欧米社会に紹介しようという情熱はいささかも衰えていなかった。五二年二月以降、コロンビア大学の招聘教授として禅仏教の講義を担当したのである。

*（五二年から翌年にかけての貴重な英文講義録が残っていて、筆者が常盤義伸氏のご協力を得て編集、日本語訳したものが、今年の三月、松ヶ岡文庫叢書第五として出版された。

鈴木大拙
コロンビア大学セミナー講義
COLUMBIA UNIVERSITY SEMINAR LECTURES



高橋静雄氏撮影・河内文庫

さて、再び大拙が海外に腰をすえ活動した一九五〇年代（日本では昭和二五年から三五年）のアメリカ社会は、どのような状況にあっただろうか。

一九四五年に第二次世界大戦の戦勝国となったアメリカは、戦後の好景気に酔いしれていた。近代西欧合理主義のもたらした物質文明の恩恵に浴し、経済的繁栄を背景に人々は、競って郊外に一戸建ての家をもち、大型冷蔵庫や高級車などを手に入れ、まるで「アメリカン・ドリーム」が実現したかのような時代である。

しかしながら、たとえ物質的欲望が満たされても、精神的充足感が得られないかぎり、人は自分が幸福だとは感じないだろう。物欲は一時的に満たされてもさらに次の物欲を刺激して、終わりなき悪循環をもたらすのが常である。好景気に埋没する多くの「サイレント・マジョリテイ」の中にも、この普遍的事実が気がつき、精神的満足や心の支えを求めた人々もいたことだろう。しかし、行動によってそれを表現したのは、時代に反抗する若者たちだった。彼らは、

社会への反抗から、のちのカウンターカルチャー運動を支える存在に育ってゆくのである。

まるでこうした精神的状況に呼応するかのように、八十歳を超えたD・T・スズキがコロンビア大学にあって、聴衆の面前で活きた禅を「見せ」、機械文明、物質文明とは異なる、人間のもう一つの生き方を説いていたのである。これは、まさに歴史上の偶然でもあり、また必然というほかはない。D・T・スズキの講演は、異質な精神的原理を求めていた人々にとって、きわめて刺激的な示唆に満ちており、このコロンビア大学講義は、禅が西欧世界へ浸透してゆく最大の契機となったのは間違いない。それが二十世紀後半の人類社会に与えた影響を思うと、その意義は計り知れないものがある。

さらにまた、この時期にJ・D・サリンジャー（一九一九—）という作家が登場したのも、偶然かつ必然だったと言えよう。彼は早くから禅に深い関心を抱いていた。メアリー・ファーカーカスによると、ある雪の降る日のこと、ニューヨーク第一禅堂の玄関に一人の背の高い青年が現れ、サリンジャーと名のつたという。そのときの印象が非常に強かったため、メアリーはよく覚えていた。

このサリンジャーは、五一年に代表作の『ザ・キャッチャー・イン・ザ・ライ』（ライ麦畑の捕手）を出版した。この作品は現在に至るまで超ベストセラーとして、世界の若者を中心に読まれてきた。それに続く『九つの物語』では、白隠の「隻手の音声」の公案を取り上げており、「one-hand clapping」や「koan」といった言葉が英語としてよく知られることになった。

こうして二十世紀後半へと突入する五十年代の冒頭、大拙とサリンジャーがその活動を開始（それに後述のスナイダーが大拙作品に出会った）したこと、私は何か象徴的な意味を感じる。大雑把な言い方をすれば、二十世紀前半の、人間がまっしぐらに欲望の実現に疾走した時代から、その結果生じた様々な難題を抱えて生き方を模索する二十世紀後半への出発点だからである。

『ザ・キャッチャー・イン・ザ・ライ』の主人公は、高校を中退になった十六歳の少年ホールデンで、大人たちを「フォーニー」（俗物、偽物）と呼んで反抗した。それが多くの若者たちの共感を得たが、どこか少年の青臭さや甘えが感じさせる。それは、過去の大不況時代を知らず、物質的反映を当たり

まえのこととして、社会批判を繰り返すためだろう。

こうした反抗する若者たちは映像化され、ジェームズ・ディーンが映画「エデンの東」や「理由なき反抗」で演じてみせた。共に五五年の作品で、物質的に満たされても心の中に空虚なものを感じ、「理由なき」反抗に訴えるしか方法を知らなかった若者たちの姿が描かれている。

しかし五十年代後半には、同じく反抗の態度をとりながら、さらに挑戦的に社会に反逆する若者たちが現われた。ビート世代（ビート・ジェネレーション）の若者たちである。五五年秋、アレン・ギンズバーク（一九二六―一九七）、ゲリー・スナイダー（一九三〇―）、フィリップ・ウェーレン（一九二二―二〇〇二）、ジャック・ケルアック（一九二一―一九六九）など、若き詩人たちがサンフランシスコに集まり、詩の朗読会を開いて、はなばなしく世に登場する。

彼らもまた、西欧の物質文明に背を向け、東洋の精神性に心を向けた。時代は、近代西欧合理主義を超える別の原理を必要としており、アメリカ社会は、この五十年代の、大拙とビート世代からの影響と共に、激動の六十年代へと新たな展開を見せることになる。

このビート世代の中でも、ゲリー・スナイダーとフィリップ・ウェーレンは、とくに禅仏教への真摯な態度において別格の存在と言ってよい。すぐれた詩人であるウェーレンは、禅僧となつて、サンフランシスコ・ゼン・センターを中心に活動していた期間が長いので、やや地味な存在ではあるが、ケルアック、ギンズバーク、スナイダーたちとの深い交流においては大いに存在感があり、死後に伝記や作品集の出版が続いている。

スナイダーは、ビートと呼ばれるのを好まないが、いわばその世代の精神的支柱と目されていた存在である。ケルアックの作品、『ダルマ・バムズ』（一九五八）では、主人公のモデルとして描かれている。

小論の後半では、スナイダーが『大拙追悼文集』（A Zen Life: D. T. Suzuki Remembered, 1986）に寄せた一文を紹介したい。ビート世代の中で大拙の位置が分かり、スナイダー自身の大拙への思いがよく伝わるからである。

スナイダーは回想する。

初めてD・T・スズキの本を読んだときのことを、はっきり私は覚えて
いる。あれは、一九五一年のことで、私はヒッチハイクするために、ネヴァ
ダ州東部の広大な砂漠を通る旧四十号線の道端に立っていた。その数日前
には、サンフランシスコの「哲学書」を扱う書店でスズキの本を見つけて
購入していた。そのときの私は、インディアナの大学院に入学するためそ
こへ向かう途中であった。そしてその高速道路わきで、次に乗せてもら
う車を通るまでの長い時間をつあいだ、私は買ったばかりの本を開いて
いたのである。そこがちょうどいい広さであり、通る車が少ないこともあって、
スズキの『エッセイズ第一集』を読むのに十分な時間を与えてくれた。こ
の本は、私の心をさらに広大な空間へと投げ入れてくれた。当時はよく分
らなかつたが、そのとき私は人類学者のキャリアに終わりを告げていたの
だ。インディアナでは一学期をかけて後片付けをした。春になって西海岸
に戻ると、アラン・ワッツを含めてD・T・スズキの本に感激した何人か
に出会い、さらにはほかの仲間たちと新世界の発見を共有することになった。

ここには、スナイダーがインディアナ大学大学院を一学期だけでやめた理由が
書かれている。スナイダーは「心をさらに広大な空間へと投げ入れてくれた」魅
力的な世界に出会ってしまったのだ。そして、インディアナへ向かうヒッチハイ
クの途中で読んだD・T・スズキの『エッセイズ第一集』が、その後のスナイダー
の生き方を大きく決定づけたのである。

『エッセイズ第一集』からさらにD・T・スズキの本を読み進めた結果、私は
極東の言語を学ぶため大学院に再入学し、中国語と日本語のコースで学び、そ
してさらに、日本へ渡り、伝統的な坐禅の修行に取り組むことになったのである。

スナイダーは、五六年に「アメリカ第一禅協会」から奨学金を受けて来日し、
六八年に帰国するまでの大半は日本にいて、相国寺と大徳寺の専門道場で雲水
とともに本格的に禅の修行に専念した。

臨済禅の僧堂で現実に日々を送ることは、少なからず衝撃的だったが、どうかやってみることができ、自分の師匠のもとで修行を続ける道を開くことができた。戯れに思うことがある。どうして鈴木博士が私をこの道に連れてきたのか、と。しかし後悔はまったくくない。

こうした専門道場での生活ぶりは、最初のエッセイ集、『地球の家を保つには』（二九六九）の「相国寺の春の接心」に描かれている。スナイダーは日本滞在の期間も、アメリカ本土の友人たちとの交友は続けていたが、それでは、彼らは大拙をどのようにみていただろうか。それについて、スナイダーは言う。

誰もが鈴木博士に親近感をもっていたが、そのころはまだ、どれほどユニークな人物であるかは理解していなかった。博士が、英語を完璧にこなす日本人であり、完全なコスモポリタンの立場にあつて西欧の知的伝統をふんだんに駆使した本を書き、何に向かうのか分らない仏教の一宗派を、創造的な説得力ある表現により説明できる人物であることを・・・

一九五〇年代の爆発的なエネルギーの中にあつては、初期仏教も、老子も、ガンジーも、ソローも、クロフトキンも、そしてまた禅も、すべてが一つの教えであつた。みんなが与していたものは、本来の人間性と自発的な創造的精神であつた。鈴木博士の禅の示し方は、「本来の生命力」、「生命の衝動」、「ブツダの活力」といった、個人的直接体験への強調は、結局、同一方向へとつながるように見えた・・・

鈴木博士による禅の解説から、宗教に対する考え方や、自然の全体的把握という見方を学べたことが、すでに科学的「エコロジー」として影響を受け始めていた仲間たちのものの見方を、さらに深化させてくれたのだ。

ビート世代にわたるD・T・スズキの位置は、この文章で分かる。ビート世代が求めたものは、「本来の人間性と自発的な創造的精神」であつた。だから、「完全なコスモポリタンの立場」から禅を説く大拙の、「個人的直接体験への強調」に共鳴したのである。また、大拙の説く「自然の全体的把握」ということ

は、きわめて重要な点である。なぜなら、すでにビート世代が関心をいだいていた「科学的『エコロジー』」として影響を受け始めていたものの「見方」を、大拙の説く禅の自然観がさらに「深化」させてくれたからだ。そしてこれは、のちの「ディーブ・エコロジー」に進化また深化して、アメリカの六十年代以降の自然環境保護運動に大きな影響を与えることになる。

しかし、このD・T・スズキの「コスモポリタンの立場」は、日本の伝統禅を担う人々には大いに違和感をもたれたに違いない。禅を西欧の伝統や思想の中に置いて再認識するという前代未聞の画期的な視点だからである。

鈴木博士は、禅の紹介をするときに、多くの点で、禅を中世的体質に導いた精神構造から飛躍して、ことさらに断ることなく、創造的に禅を新たな自由な方向へと指し示す独自の方法をもっていた。D・T・スズキは、私の人生に推進力を与えてくれた。そのことに私はいくら感謝しても足りない。いま私は再びアメリカに戻ってきているが、鈴木博士の絶大かつ絶妙な影響の証拠は、いま禅の修行に励むアメリカ人たちはもちろんのこと、多くの芸術や様々な分野において見ることがができる。

大拙の説く禅と日本人の理解する禅との乖離は、来日して知ったことで、スナイダーは驚き、率直に嘆いている。

いちばん心が痛んだのは、同じ世代の日本詩人と話を通じなかったことで、二三時間、詩の話を楽しんだ後、禅のテーマの話に移ると、そこですべてが終わってしまうのだ。それによって、多くの日本人が、禅と権威主義、封建主義、軍国主義と同一視していることを知った。

スナイダーの追悼文は、ビート世代の本質を簡潔に表現した貴重な資料でもある。また、スナイダーの真情が吐露された次の一節からは、スナイダーの心に占める大拙の大きさが汲み取れる。

最後お会いしたのは、一九六一年のことであった。大徳寺山内の小堀老師の龍光院でささやかな晩餐会があり、私は、佐々木ルース夫人の研究員の一人として出席した。パーソン・ワトソン、フィリップ・ヤンボルスキー、柳田聖山、そして入谷義孝といった第一線の禅学者たちがそこにいた。岡村美穂子さんも随伴していた。D・T・スズキは小柄で物静かであり、各自の紹介に礼儀正しく応答したあと、小堀和尚との会話に戻った。みんなそろって、茶室の畳に坐り、この上なく優雅な伝統的精進料理を食べた。私は鈴木博士に別れの挨拶として、口ごもりながら二言、三言、口にしたが、私はほとんど泣き出しかけていた。そのあと、私が早々に退席せざるを得なかったのは、夜明け前には日本海に向かって歩き始める予定をしていたからだ。私は、旅の終わりまでずっと、あの力強い顔（それにあの眉毛！）を道連れに旅をしたのである。

一九九八年、スナイダーは、欧米へ禅を紹介した長年にわたる功績が認められ、日本で仏教伝道文化賞を受賞した。その文学作品やライフスタイルを通してアメリカの「ゼン」へ大きな影響力をもち、特にカリフォルニアのゼンのグループには、何らかの形でスナイダーの影響がみられる。

かつて日本では、「ビート・ジェネレーション」は、ビート族と呼ばれ、「とんでもない連中」で…髯をのびし、酒を飲み、奇妙なことをわめき、気品ある人なら絶対にやらないようなことをやらかす連中」にすぎず、「自分の行動を基礎づけるために禅を持ち出す」だけの連中という受け取り方（中村元『世界に呼びかける東洋』講談社現代新書）が一般的だった。それは、彼らが、大拙の紹介した中国の臨済や黄檗、また寒山、拾得の風狂を表面的に真似し、奇をてらったからであろう。彼らにとっては、それが硬直化したアメリカ社会への反抗の証であった。そして、「アメリカ文明の、ひいては西洋文明の、転換を迫られている爛熟期に現われた一つの付随的現象である」（同書）という結論は、数多く現れた「風俗ビート」の若者たちについては妥当だと思ふ。

しかし大拙は、ケルアックやギンズバークの訪問を受けたことがあり、風俗ビートについて批判的だが、「ビート・ゼネレーションその他のこと」という

座談中で、こうも言っている。

「こんなものは何にもならんといつて、うっちゃっておかないで、指導したら、そこから本当に坐禅をやるという者が出てきて、またおもしろい者が出てくるかもしれないだね」（『鈴木大拙座談集』第5巻、読売新聞社、昭和47年、63頁）と。

大拙の言葉通り、六十年代以降、ビート世代は、ベトナム反戦運動とともに生まれたヒッピーに合流し、スナイダーを代表とする良質な人々は、カウンターカルチャー運動を担い、多くが自然環境保護運動家となって成長してゆく。こうして五十年代、D・T・スズキのまいた禅の種は、二十世紀後半の欧米に、「ゼン」としての確実な歩みを進めてゆくのである。

（しげまつ そうい く／静岡大学・関西医科大学元教授）

（公財）松ヶ岡文庫

来たるべき「東方哲学」―鈴木大拙の可能性

安藤礼二

二〇一六年、鈴木大拙は没後五十年を迎える。日本の著作権法では、没後五十年を経て、さらに読み継がれていくような表現者の著作は、「人類の共有財産」(パブリック・ドメイン)と位置づけられる。つまり、固有の著作権は消滅する。大拙の残した膨大な著作は、これまでも多くの著名な人々に読まれ、また、これからも多くの未知なる人々に読み継がれていくだろう。

しかし、私たちは、大拙のことを本当に理解していると言えるのであろうか。そこには、いまだに汲み尽くされていない無尽蔵の可能性が秘められているのではないだろうか。そもそも、私たちは大拙について一体どれほどのことを知っているのだろうか。まずは「大拙」という印象的な名前そのものが一つの象徴的な意味をもっている。鈴木大拙の本名は「貞太郎」であり、「大拙」というのは居士号なのだ。そして居士とは、出家した僧侶ではなく、在家でありながらも優れた仏教修行者であることを意味している。つまり大拙は、特定の寺院、特定の宗派に所属することなく、仏教のもつ可能性を思想的かつ実践的に究めていった、文字通り、インデペンデントの思想家だったのだ。

それだけではない。大拙は寺院という制度の外側に立ち、寺院という制度から独立していたのと同様に、大学という制度の外側に立ち、大学という制度からも独立した思索者であり表現者であった。明治三年(一八七〇)に生まれた大拙は、近代日本が被らざるを得なかった困難とその可能性の双方をともに生き抜かなければならなかった。大拙は、いまだには誰もその存在を疑うことさえもできないヨーロッパ的な教育のシステム(大学を頂点とした「学校」のシステム)を、はじめて学ぶ側として体験しなければならなかった者たちの一人であった。大拙は、そのきわめて人工的で、同時にきわめて未熟な権威のシステムに耐えられなかった。だから、大拙はせっかく入学した金沢の第四高等学校を途中で退学してしまう。大拙が本格的かつ個人的に禅に取り組みはじめるのは、高等学校中退の直後からであった。大拙にとって学問的な探究と宗教的な探究は連続するもので

あり、ともに制度の外でしか達成できないものであった。

それゆえ、大拙の、いわゆる公の「学歴」は、そこで終わってしまう。大拙の最終学歴は、「石川県専門学校付属初等中学校卒業」である。大拙が進むことを放棄したアカデミズムは、その直後から急速にシステムを整え、硬化していく。一度その進路からドロップアウトした者に対しては冷酷に門戸を閉ざした。大拙は、学問の自由と信仰の自由を求めて―大拙にとってその両者は不可分一体のものとして存在していた―これもまた近代という時代がはじめて可能にした日本の外側、すなわちアメリカに向けて旅立った。大拙は、アメリカの出版社で働き、英語から日本語へ、日本語から英語へ、仏教思想のエッセンスと考えられた他者の書物を翻訳し、自らの書物を他者の言語である英語を用いて書き上げていった。十数年におよぶ海外での生活を切り上げて日本に帰国した大拙は、学習院に職を得る。大拙が二十九歳を迎える直前のことだった。

しかし、この「時」までにすでに、大拙はその独創的な仏教哲学の体系をほぼ完成していた。寺院の外、大学の外、日本の外、つまりは近代的なあらゆる制度の外、さまざまな諸言語が入り混じり合う「翻訳」の時空で、自らにとつては外の言語、他者の言語であった英語を用いて、自らの内奥、自己の信仰と学問の骨格を創り上げている「大乘仏教」思想のもつ特色を抽出することによって。大拙は、日本の内側と外側の境界に立ち、日本とアメリカの間を、東洋思想と西洋思想の間を生き抜いた。そのことよって、日本でもアメリカでもない、東洋思想でも西洋思想でもない、いわば対立する両極を止揚してそこに統一を与えるような総合的な哲学「思想」を構築することに成功した。

それは大拙個人の営為を超えて、絶え間のない相互交流のもとで形が整えられていった近代日本の哲学「思想」と近代アメリカの哲学「思想」のそれぞれ最も実り豊かな成果を体現するものとなった。大拙がアメリカに招かれる直接のきっかけになったのは、一八九三年にシカゴで開催された万国博覧会、特にそ

こに併催された万国宗教会議によって、である。コロンブスによる新大陸アメリカ発見四百年を記念して開催されたこの万国博覧会で、名高い演説が行われた。すなわち、もはやアメリカでは、現実のフロンティア——開拓可能な未踏の地——は消滅した。だからこそ、いまここから精神のフロンティアを切り拓いていく必要があるのだ。そのためにこそ、ヨーロッパの外に位置するアジアの諸宗教を代表する者たちが一堂に集められたのだ。

ヨーロッパ（およびアメリカ、つまりは「西洋」）では自明のものとされた二元論、精神と身体（物質）、自己の内側と外側、無限の神と有限の人間等々といった二項対立の図式は、アジアの宗教思想においては無化されてしまう。実践的な身体技法——ヨーガや瞑想——を通して精神の新たな次元がひらかれる。そこではもはや、精神と身体（物質）、無限と有限といった二項対立は姿を消し、聖と俗が一つに入り混じった一元的な領野がひらかれる。精神と物質、人間と自然、あるいは主観と客観とを分割することを拒否する、ヨーガを中心に据えたヒンドゥー思想および瞑想を中心に据えた仏教思想、すなわち広義の東洋神秘主義思想——「神秘」は言語化不可能な体験を意味する——の核心が、はじめて十全な形でヨーロッパ圏（アメリカ圏）に紹介されたのである。精神的な理念のみならず身体的な実践を通して……。

ヨーロッパでもまた、「我」からはじまる哲学、「自我」（エゴ）を中核に据えた諸学問の限界とその乗り越えが模索されていた。人間は神の似姿として造られたものではなく、自然のなかで、森羅万象あらゆるものと関連をもちながら形づくられ、それゆえ、未来に向かって絶えず変化してゆく存在である。人間と森羅万象あらゆるものは一つにつながり合い、しかもそれらすべてに共通する生命の力は、意識の表層ではなく意識の深層、つまりは無意識（潜在意識）を通して人間にまで伝えられている。進化論によって生物学が刷新され、無意識（潜在意識）論によって心理学が刷新されようとしていた。ヨーロッパではわずか百年に満たない間に為された近代科学の力によってはじめて可能になった一元的な領野の探究が、アジアでは数千年の歴史の持続をもって為された宗教の力によって、より具体的かつ論理的に探究されていた。

「自我」を破壊することによって、二項対立が生まれる以前の一元的な領野、

哲学と宗教がともに発生してくる始原の場所をいまここに顕現させること。東洋の神秘主義思想の一翼を担う仏教——そのなかでも特に「大乘仏教」——が説いていたのは、そのような未曾有の事態であった。禅は、主客の対立、精神と物質という対立を止揚して、「心」という「一」なる地平を切り拓く。大拙は自らの禅の師であり（「大拙」という居士号を授けてくれた人物でもある）、シカゴの万国宗教会議に招かれた釈宗演が担当する講演の英文草稿を仕上げた。その万国宗教会議の会場で、東洋神秘主義思想の一つの淵源としてドイツで新たな哲学を構築しつつあったショウベンハウアーやニーチェの影響を受け、アメリカに移住——宗教的な亡命——をしていたポール・ケラスは、自らが確立しようとしていた生物学的・心理学的な一元論哲学を宗教的に裏付けてくれる原理を、宗演の演説のなかに見出した。ケラスと宗演は運命的な出会いを遂げる。そしてケラスは宗演に、仏教的な素養をもち英語にも堪能な一人の若者を、自分のアシスタントとして紹介してくれるよう依頼する。

宗演が白羽の矢を立てたのが大拙だった。大拙はケラスのもとに渡り、ケラスが創設者の一人であった出版社オープン・コートで働きはじめる。大拙は、生物学から心理学、さらには哲学にまでをその範囲に広げた近代ヨーロッパが生み出した科学的な一元論の詳細を学び、その教えと接合可能な大乘仏教の理論書、『大乘起信論』を選び、それを英語に翻訳した（一九〇〇年）。さらには、その翻訳の過程で見出された「真如」「如来蔵」「アラーヤ識」「法身」といった諸概念を、あらためて自らの内で再構築することによって、大拙の真の処女作と称することも可能な『大乘仏教概論』（一九〇七年）を英語で書き上げた。この『大乘仏教概論』こそ、大拙思想のアルファであり、オメガである。

『大乘仏教概論』全体を通して大拙が説いている、「一」なる真如（法身）から「多」なる森羅万象が生み出されてくるというヴィジョン、さらには、そうしたヴィジョンを得るために経なければならない主客が消滅してしまう「体験」（純粹経験）を、最も創造的に換骨奪胎することで書き上げられたのが、大拙の第四高等中学校以来の盟友——ともに高等中学校を中退して辛酸をなめた——西田幾多郎の『善の研究』（一九一一年）である。それだけではない。大拙は、当時とにもまったく無名であった、後に偉大な民俗学者となる南方熊楠と、シカゴとロ

ンドンの間で文通を重ねながら大乘仏教の可能性を探り合った。さらに、大拙の説いた主客が消滅してしまう純粹経験の世界に詩的言語の発生を幻視していたのが、これもまた後に特異な民俗学者となる、当時まだ大学生であった折口信夫である。折口の大学卒業論文『言語情調論』がまとまる上で、大拙の當為は間接的ながらも最も大きな影響を与えたと推定されている。

西田幾多郎の哲学と、南方熊楠および折口信夫の民俗学と。鈴木大拙の思想は、近代日本が生み出すことのできた最も創造的な二つの学の、いずれもその起源に位置していたのである。

『大乘仏教概論』は大拙思想のアルファであり、オメガである。

しかしながら、この書物は原著刊行から百年近くの間、封印されていた。大拙自身が再版に難色を示し、それゆえ、英語から日本語へと翻訳されることもなかった。一体なぜなのか。邦訳を担当し、本文批判の詳細な注と長文の解説を付した佐々木閑の見解をもとにまとめてみれば、次のようになる(岩波書店、二〇〇四年)。

まずそこには、サンスクリット表記の多くの誤りとともに、大乘仏教の発展史における重大な事実誤認が見受けられる。大拙が、『大乘仏教概論』で依拠しているのは『大乘起信論』に代表される「如来蔵」系の經典に表現された思想である。「如来蔵」には、大乘仏教の発展史の上で激烈な論争を繰り広げた中観派(「空」と「縁起」を重視する)と唯識派(意識の階層性と根底的な「識」の存在を重視する)の主張を一つに総合するような側面が存在する。大拙は「如来蔵」から中観(「ゼロ」と唯識(「意識」の階梯)が生まれたと考えたが(当時の一般的な理解でもあった)、現在ではまったく逆であることが文献学的に証明されている。「如来蔵」は源泉ではなく、結果だったのである。

次に、上記の点とも関係し、より本質的な問題であると思われるのが、「如来蔵」系の經典が生み出されたのは大乘仏教の展開としてはより後期の(あるいは終末期の)、特に「密教」的な思考方法の確立と密接な関係をもっていた、

という点である。大拙は「大乘仏教」全体のエッセンスを概説する、と主張していたが、そこで論じられていたのは、実は大乘仏教のうちのヒンドゥー教化されたごく一部分、特殊な一セクトたる「密教」思想——さまざまな仏たち(聖なる神的存在)が宇宙の根本原理たる「法身」から流出し、またそこに回歸する——のエッセンスに過ぎない、という非難である。当時のヨーロッパで劇的に発展したサンスクリット文献学の権威から、『大乘仏教概論』は痛烈に批判された。

大拙自身がその批判について直接答えた形跡はない。それでは、大拙は『大乘仏教概論』に記した自身の見解をその後、否定したのか。おそらく、そうではあるまい。大拙は『大乘仏教概論』で依拠した「如来蔵」という考えを生誕捨てることはなかった。逆に、それをより論理的かつ実践的に深めて行った。そこに最後の大拙が立ち現れてくる。『大乘仏教概論』の刊行からちょうど半世紀を経て、一九五七年に刊行された大拙最晩年——八十年代後半——の英文著作『神秘主義 キリスト教と仏教』(邦訳 坂東性純・清水守拙、岩波書店、二〇〇四年)には、『大乘仏教概論』の本文中で定義された重要な概念(「真如」= *Sunness*、等々)がほとんどそのまま使われ、さらに『大乘仏教概論』ではほのめかされるだけだった「神秘主義」を介した一神論の極たるキリスト教と無神論の極たる仏教の比較対象が全面的に論じられていた。大拙にとって、「如来蔵」思想を核としてもった大乘仏教によって、超越の「一神」と内在の「汎神」は一つに結ばれ合うのだ。

すでに『大乘仏教概論』の段階で、大拙は、こう記している。「宇宙は一元論的にして汎神論的体系 (*monisticpantheistic*、一即多)となる」(佐々木閑の訳文による)。それこそが、大乘仏教が明らかにしてくれた「絶対的な知識」のエッセンスなのだ。大拙にとって大乘仏教は、神人合一——如来蔵 菩提心を媒介として、人間は宇宙の最高存在たる法を体現した法身 真如と合一することが可能になる——をその信仰の核とした、仏教の「神秘主義」的展開であった。そうした点で、不二一元論——真の「我」たるアイトマンと宇宙の最高原理の「梵」たるブラーフマンは一つのものである(梵我一如)——をその信仰の核としたヒンドゥーのヴェーダーンタ哲学と比較可能になる。

ヒンドゥーの不二元論もまた、大乘仏教と同じく、一八九三年の万国宗会議で、インドからアメリカにたった一人で渡ってきた若者、ヴィヴェーカーナンダによってそのエッセンスがはじめてヨーロッパ圏（アメリカ圏）に紹介された。ヴィヴェーカーナンダは、言語化不可能なヨーガの「体験」を通して人ははじめて「梵我一如」の境地にたどり着くことが可能になると説いた。まさにインドの「神秘主義」思想である。ヴィヴェーカーナンダは、その地点から、さらなる一步を踏み込む。ヒンドゥーの不二元論は、大乘仏教の如来蔵思想（大乘仏教の密教的な展開、すなわち仏教の「神秘主義」とも比較可能であるし、キリスト教やイスラームなど一神教の「神秘主義」とも比較可能である。不二元論は、無限の神と有限の人間を、「一」なるものと「多」なるものを、一神教と多神教を、一つに結び合わせることを可能にするのだ、と。

ヴィヴェーカーナンダは明らかにヒンドゥーの不二元論を中心に据えた総合宗教の確立を目指していた（それは師であるラーマクリシュナが夢見たことでもあった）。ヴィヴェーカーナンダはヒンドゥーの伝統的な不二元論を現代的な実践哲学にして総合宗教論として甦らせたのだ。そのことが、同時に世界列強が相対峙するなかでのインドの独立——精神的な独立——へと直結していく。『大乘仏教概論』を書き上げる際、大拙がおそらく最も意識していたのは、ヒンドゥーの不二元論と大乘仏教の如来蔵思想の間に見出される同一性と差異性について、である。大拙もまた、大乘仏教の如来蔵思想を現代的な実践哲学にして総合宗教論として甦らせようとしていた。

如来蔵思想にまでたどり着く道が、インドで展開された仏教の大乗的な展開とはいくぶんかは異なっていたことについても、大拙は意識的であった。なぜなら、大拙は、『大乘仏教概論』という自らの試みが、「北方仏教」（インド北部から中央アジアにかけての仏教の北方的かつ大乗的な展開）でもなく、「南方仏教」（インド南部からスリランカにかけての仏教の南方的かつ小乗的な展開）でもなく、「東方仏教」（中国から朝鮮半島を経て極東の列島で習合し変容した仏教の密教的な展開）の真の姿を明らかにするものであると、その「序論」のなかで高らかに宣言していたからだ。さらに、この『大乘仏教概論』の段階ですでに、自らの提唱する「東方仏教」こそが、ヒンドゥー教（多神教）の神

秘主義思想ともキリスト教（一神教）の神秘主義思想とも接合可能であると確信していたことがうかがえる。「東方仏教」こそが、内在と超越を、多と一を、一つに結び合わせる大乘仏教思想の極致なのだ。

大拙と浅からぬ関係をもった、イスラーム神秘主義思想研究の世界的な権威である井筒俊彦が最後に取り組んだのも『大乘起信論』であった。『大乘起信論』の哲学」とサブタイトルが付され、結局は遺著となってしまう「意識の形而上学」（一九九三年）の「序」のなかに、井筒はこう記している。『大乘起信論』こそ、「東洋哲学全体の、共時論的構造化のための基礎資料」となるものなのだ、と。大拙による『大乘起信論』の英訳と『大乘仏教概論』の刊行から一世紀弱、大拙の提唱した「東方仏教」は、井筒によって、東洋思想の全体の共時論的な構造を抽出するための、来たるべき「東方哲学」として再生されようとしていた。鈴木大拙のもつ可能性は、おそらくは、そうした点に尽きるであろう。

来たるべき「東方哲学」の骨格を形づくるのは、大拙が『大乘仏教概論』のなかで「東方仏教」の特色を定義するために抽出してきた、「真如」「如来蔵」「アーヤ識」「法身」「菩提心」などの諸概念である。

ヒンドゥー教の不二元論のいう「梵」（ブラーフマン）も、大乘仏教の如来蔵思想のいう「真如」も、存在そのもの、宇宙そのものを成り立たせる根本的な原理、「一」なるものである。ただし、ブラーフマンは「有」（我）であり、真如は「空」（無我）である。「空」である真如は、森羅万象あらゆるものの可能性をそのなかに孕んでいる。真如は森羅万象あらゆるものに内在する生命の原理である（この地点に近代的な生物学的進化論が重なり合う）。形而上学的な対象、知的な対象としての真如は、宗教的な対象、情的な対象としては法身として立ち現れる。大拙は真如を哲学的に定義する際には『大乘起信論』を用い、法身をイメージ豊かに描写する際には『華嚴経』を用いている。

真如＝法身は、あらゆるものの可能性をそのなかに含んだ「空」（虚空＝大空）のような、あるいは「海」のような際限のない広がりであるとともに、あらゆるものに生命を与える「太陽」のような存在（「如来」＝太陽仏）なのだ。際限のない広がりのおかげで、さまざまな光が一つに融け合っている。人間は、やはり自らの内に生まれた「心」（菩提心）の奥底にひらかれるアーヤ識（如

来蔵「如来としての意識である」ともに如来になる可能性を種子のように孕んだ意識)を通して、法身「真如」にまで到達することができる。法身「真如」と一体化することができる。大拙は、その境地を「絶対的無意識の状態」と表現している(この地点に近代的な心理学的無意識論が重なり合う)。体森羅万象あらゆるものは、法身「真如」の表現なのだ。大拙が「心」(菩提心)のもつ諸段階を経た上での法身「真如」との一体化を説明する際に依拠するのは、伝龍樹による『菩提心論』(および『華嚴経』)である。

真如を『大乘起信論』によって定義し、法身を『華嚴経』によって定義し、菩提心を『菩提心論』によって定義する。その上で、あらゆるものが光として、あるいは空として一つに融け合っている宇宙の中心、太陽の「如来」(大日如来「ビルシャナ仏」)を自らの「心」として同定する。「心」を通じて「如来」と一体化することが可能になる。大拙よりも千年以上も前にそう説いていたのは、この列島日本に真言密教の体系を打ち立てた空海その人である。ヒンドゥーの伝統を、不二元論の体系としてまとめあげたシャンカラは、空海とほとんど同時代を生きていたと推定されている。ヒンドゥーと大乘仏教と、その相互の交流から不二元論が生まれ、如来蔵思想が生まれた。

空海は、「心」の真理にして宇宙の真理(すなわち「真如」)は、曼陀羅を中心とした総合芸術、色彩と音響をはじめさまざまな諸感覚が一つに融け合う瞑想を通じて表現されなければならないと説いた。第二世界大戦後、ふたたびアメリカで教鞭を執った大拙の教室には、アメリカの現代音楽を創り上げたジョン・ケージ、アメリカの現代文学を創り上げたジャック・ケルアックやアレン・ギンズバーグなどが集うことになった。来たるべき「東方哲学」は、新たな芸術哲学、新たな表現哲学としても再生しなければならないのだ。

(あんどうれいじ/多摩美術大学准教授)

多摩美術大学

(公財) 松ヶ岡文庫

鈴木大拙略年譜及び
主要著作一覧

西暦年号	年齢	鈴木大拙略年譜	主要著作一覧	その他
1870年(明3)	0歳	10月18日 金沢市本多町に生まれる。		
1876年(明9)	6歳	4月金沢市本多小学校入学。		
1882年(明15)	11歳	石川県専門学校付属初等中学校入学。山本良吉 藤岡作太郎 のちに西田幾多郎と出会う。		父鈴木良願没(54歳)
1885年(明18)	15歳	2月藤岡作太郎等と雑誌「明治余瀆」を創め その編集者となる。		
1887年(明20)	17歳	2月石川県専門学校附属初等中学校を卒業。教諭北条時敬に学ぶ。学制改革により西田幾多郎と共に同校の新制予科三年に編入 しかし間もなく家計の都合で中途退学す。		
1888年(明21)	18歳	第四高等中学校第一学年中退 飯田小学校助手となる。		
1889年(明22)	19歳	石川県美川小学校転任 高等科英語教師となる。		母鈴木増没(4月8日 59歳)
1890年(明23)	20歳	英語科教員仮免状得 石川県美川小学校高等科訓導となる5月15日付の辞令に「五等下級俸に賜ふ」とある。		
1891年(明24)	21歳	美川小学校退職。上京 東京本郷駒込西片町10番地 久徴館に下宿 安宅彌吉と出会う。		
1892年(明25)	22歳	専門学校で 坪内逍遙に英語を学ぶ(4カ月後退学)。鎌倉円覚寺今北洪川に参禅(在正伝處)。		今北洪川遷化(1月16日 77歳)
1893年(明26)	23歳	積宗演に参禅(宗演34歳) [東京] 帝国大学文科大 学哲学科選科入学。		
1894年(明27)	24歳	シカゴ万国宗教会議出席の積宗演の講演原稿を英訳。		
1895年(明28)	25歳	居士号「大拙」。		
1896年(明29)	26歳	5月に「東京」帝国大学文科大学中退。		
1897年(明30)	27歳	見性体験。「エマーソン論」を書く。 渡米。イリノイ州ラザールのポール・ケーラスの関係するオープン・コート出版社の一員となる(明治41年まで滞在)。 P・ケーラス編 英文誌「オープン・コート」に 東洋文学から英訳(1897-1905)。 P・ケーラスの「老子道德経」その他の道教関係 書の英訳を手伝う。	「仏陀の福音」(邦訳 Paul Carus (: Gospel of Buddha) 原著改版 1901 【新宗教論】(英文: New Theory of Religion)	

1917年(大6)	47歳	7月7日アラン勝を養子にする(ピアトリス39歳大拙47歳)。翌1918年7月〜8月学習院学生引率中国に渡る。	
1916年(大5)	46歳	ピアトリスの母エマ・アースキン・ハーン来日(71歳)。	
1915年(大4)	45歳		
1914年(大3)	44歳	学習院教授・寮長。教え子以下のおり。英国人ロバートソン・スコット主宰「ニュー・イースト」誌に禪の論文連載。	
1913年(大2)	43歳	鈴木家の家政婦になる関口このと初めて会う。	
1912年(大1)	42歳	ピアトリス・アースキン・レーン来日。ピアトリスと結婚。論文「自力と他力」。	
1911年(明4)	41歳	「東京」帝国大学講師辞任。国際スエデンボルグ総会に出席。「日本におけるスエデンボルグ」について報告。	
1910年(明3)	40歳	学習院教授就任。佐々木月樵との親交はじまる。雑誌「禅道」の主宰となる。	
1909年(明2)	39歳	大学の英語講師就任。	
1908年(明1)	38歳	渡欧。国際スエデンボルグ大会に出席。	
1907年(明0)	37歳	渡英。4月12年ぶりに帰国。学習院「東京」帝国大学英語講師就任。	
1906年(明39)	36歳	「モニスト」誌に古代シナ哲学史の研究論文を連載しはじめる。メイン州のグリーンエーカーで初めて仏教講義す。	
1901年(明34)	31歳	「モニスト」誌に古代シナ哲学史の研究論文を連載しはじめる。メイン州のグリーンエーカーで初めて仏教講義す。	
1900年(明33)	30歳	7月米国の西本願寺英文仏教誌「法の光」に連続シリーズ(1901-1907)。	
1898年(明31)	28歳	釈宗演ニューヨークでの講演(通訳は大拙)。この時ピアトリスと出会う。	

西暦年号	年齢	鈴木大拙略年譜	主要著作一覧	その他
1919年(大8)	49歳	釈宗演遷化により参禅をやめる。		釈宗演遷化(11月1日 62歳)
1920年(大9)	50歳	学習院に辞職願提出。		
1921年(大10)	51歳	真宗大谷大学(現大谷大学)教授就任 イースタン・ブライスト・ソサエティ(東方仏教徒協会)を設立。	「イースタン・ブライスト」創刊号 (英文雑誌: The Eastern Buddhist)	
1924年(大13)	54歳	6月タゴールと京都で会う。タゴールの講演を通訳。安宅彌吉の予算で京都の住宅建築完了。	「百醜千拙」	佐々木月樵没(3月6日 51歳)
1925年(大14)	55歳	山辺留学 佐々木月樵等と歎異抄の読得会。		
1926年(大15)	56歳	朝比奈宗源老師と二カ月同居。親鸞生誕記念式典に出席講演。龍谷大学で神智学会の会合をこの時より重ねる。		ピアトリスの母エマ没 (8月22日 81歳) 京都にて
1927年(昭2)	57歳	3月ピアトリス大手術を受ける。関口このと4月ピアトリスを正伝庵へ連れて帰る。	「禅論文集」第一(英文: Essays in Zen Buddhism, First Series) 随筆「今立吐酔の「歎異抄」(英訳: Tanisho)」	
1928年(昭3)	58歳	夫人と共に鎌倉に動物愛護慈園を建つ。大谷本願寺門跡辞令「大谷大学学部教授鈴木貞太郎 特授待遇」。		
1929年(昭4)	59歳	米国外交官チャールズ・クレインと会う。クレイン氏の援助で1935年ロンドン会議参加できる。10月戦後禅研究として活躍するルース・エヴェレット(ルース・佐々木) 婦人と会う。この年より外国人多数訪問有。	「楞伽經の研究」(英文: Studies in the Lankavatara Sutra) 「禅とは何ぞや」 改版 1946 1953 1954	
1930年(昭5)	60歳			
1932年(昭7)	62歳	9月大谷大学に阿部現亮 西谷啓治 横川頼正等と宗教学会を設立。	「梵文楞伽經」(英訳: The Lankavatara Sutra) 「敦煌出土神會錄」(影印本) 「神の真髓」 「興聖寺本六祖壇経」 「楞伽經索引」(英文: An Index to the Lankavatara Sutra)	
1933年(昭8)	63歳		「禅論文集」第二(英文: Essays in Zen Buddhism, Second Series)	
1934年(昭9)	64歳	大谷大学から文学博士号を授与される。朝鮮・満州・中国旅行(南北仏跡を訪ねる)。上海で王一亭 魯迅等と会う。	「梵文楞伽經梵漢蔵索引」(英文: An Index to the Lankavatara Sutra) 「敦煌出土荷沢神會禪師語録」 「敦煌出土六祖壇経」(共編) 「禅仏教入門」(英文: An Introduction to Zen Buddhism) 「禅論文集」第三(英	

1945年(昭20)	75歳	財団法人松ヶ岡文庫を設立(翌年認可)。5月20日不動産登記 閲覧室(34坪40のちの仏間 自安堂	文: Essays in Zen Buddhism, Third Series) [支那仏教印象記(英文: Impressions of Chinese Buddhism)] [興聖寺本六祖壇経]	西田幾多郎没(6月7日 76歳)
1944年(昭19)	74歳	単身ながら円覚寺山内 楽々庵に移住(西田幾多郎も一時居住)。大谷大学教学研究所開設式に出席。	【悟道禅】「禅堂の修業と生活」改訂版 1948 【敦煌出土少室逸書】影印本 【禅と日本人の気質】	山辺習学没(9月12日 62歳)
1943年(昭18)	73歳	西谷啓治の紹介で 妙好人浅原才市の時を発見。6月清沢満之没後40周年記念パーティに出席。	【中国仏教印象記】「中国語訳」【校刊少室逸書及解説】「附達磨の禅法と思想及其他」	
1942年(昭17)	72歳	日本学術振興会(明石照男理事)から研究賞交付を受く。	【禅と念仏の心理学的基礎】「真宗の立場から」(英文: From the Shin Sect) 【少し「宗教」を説く】	
1941年(昭16)	71歳	2月井上柳定 大工等と松ヶ岡の文庫建設の件について話し合う。10月ブライスと初めて会う。	【禅と日本文化】(英文: Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture) 【禅の諸問題】	次兄鈴木亨太郎没(4月29日 77歳)
1940年(昭15)	70歳	【禅堂生活】校訂完了。	【無心ということ】(英文: The Mind of Emptiness) 改訂1969年	ビートルズ没(7月16日 61歳)
1939年(昭14)	69歳	8月「正信偈」翻訳。	【浄土系思想論】(英文: Essays on Pure Land Thought) 【続禅と日本文化】「東洋的」【盤珠禅の研究】	チャールズ・クレイン没(81歳)
1938年(昭13)	68歳	春 夫人ヒアトリス病む。聖路加病院入院退院を繰り返す。	【禅堂の教育】「禅学入門」【韻州曹溪山六祖師壇経】	横川頼正没(5月29日 37歳)
1937年(昭12)	67歳	1月7日掃国(在正伝庵)。4月妙心寺派管長辞令「臨済学院学部教授ヲ囑託ス」。	【盤珠禅師語録】「禅問答と悟り」【仏教の核心】「真実の世界」	
1936年(昭11)	66歳	世界信仰会議出席のためロンドンに赴く。オックスフォード・ケンブリッジ・アメリカの諸大学等で「禅と日本文化」を講ずる。	【禅と念仏の心理学的基礎】「真宗の立場から」(英文: From the Shin Sect) 【少し「宗教」を説く】	

西暦年号	年齢	鈴木大拙略年譜	主要著作一覧	その他
1946年(昭21)	76歳	と称す。居宅(29坪48)のち隨庵と称す。廊下(5坪40)昭和41年廃棄。平屋書庫(12坪20)昭和35年1階大拙の書斎2階倉庫に改築。 2月6日設立許可(神奈川県)理事(監事)。4月天皇皇后に第1回御進講。ハンフレーズ御進講英訳口述筆記。5月韓国李皇太子皇女に講義。12月大谷大学教学研究所顧問。	「今北洪川」「日本の靈性的自覚」「靈性的日本の建設」「宗教的信について」(共著)「カルチュラル・イースト」一巻一号(英文雑誌:Cultural East Vol.1, with R. H. Blyth)「宗教にひびく」(共著)	岩波茂雄没(4月25日 65歳) 野口信二没(6月20日 53歳)
1947年(昭22)	77歳	デマルチーノ、カブロード、ドナルド・リチー等他と出会う。連合軍士官のグループに「禪 仏教について」講演する。	「宗教の大意」(The Essence of Buddhism)「宗教と生活」(自主的に考へる)「神秘主義と禪」	
1948年(昭23)	78歳	関口この没(1906年から36年間客人として国勢調査に記載有 富山県生)。9月世界聖典刊行協会の発会式に出席。大拙は同会長。11月沢庵禪師300年記念式典出席。12月天皇皇后に御進講。	「妙好人」(The Myokoin)「騷鞍橋」「禪堂生活」「禪一撈」「日本の靈性化」(宗教と文化) (Religion and Culture)「青年に与へる」(東洋と西洋)「宗教と近代人」他	関口この没(7月2日 67歳)
1949年(昭24)	79歳	3月松ヶ岡文庫で禪展覧会。日本学士院会員となる。6月ハワイ大学での第2回東西哲学者会議に出席。文化勲章を受ける。9月〜翌2月までハワイ大学にて講義。ロンドン仏協会から英語全集を新たに発行する。	「臨済の基本思想」(無心)「禪の教え」(英文:The Zen Doctrine of No-Mind)「真宗文集」(英文:A Miscellany on the Shin Teaching of Buddhism)「仏教とキリスト教」	安宅彌吉没(2月5日 77歳)
1950年(昭25)	80歳	アメリカのクレアモント・プリンスストン・ハーバード・エール・コーネル・コロンビア・シカゴ等諸大学で仏教哲学講義。松ヶ岡文庫後援会(日本工業倶楽部)増改築・閲覧室増築工事140万円(余寄附)⑤閲覧室(31坪47)のち応接間。「也風流庵」と称す)	「禪学」(S道) (英文: An Introduction to Zen Buddhism)「中国古代哲学史」(英文: A Brief History of Early Chinese Philosophy)「禅: 11よの生活」(Living by Zen)	
1951年(昭26)	81歳	コロンビア大学で「華嚴哲学」の集中講義始まる。6月一時帰国。9月再び渡米翌2月までクレアモント大学において講義。コーネリアス・クレイン寄附(第一回目)	「日本仏教の底に流れるもの」(英文: A Miscellany on the Shin Teaching of Buddhism)	
1952年(昭27)	82歳	コロンビア大学客員教授に就任。「華嚴哲学」継続講義。米國資産家コーネリアス・クレインが松ヶ岡文庫への寄附(第二回目)。鉄筋2階建新書庫新築	「禅思想史研究」第二 「宗教入門」(宗教の根本疑点について)	

1965年(昭40)	95歳	1965年(昭40)	95歳	1965年(昭40)	95歳
1964年(昭39)	94歳	1964年(昭39)	94歳	1964年(昭39)	94歳
1963年(昭38)	93歳	1963年(昭38)	93歳	1963年(昭38)	93歳
1962年(昭37)	92歳	1962年(昭37)	92歳	1962年(昭37)	92歳
1961年(昭36)	91歳	1961年(昭36)	91歳	1961年(昭36)	91歳
1959年(昭34)	89歳	1959年(昭34)	89歳	1959年(昭34)	89歳
1958年(昭33)	88歳	1958年(昭33)	88歳	1958年(昭33)	88歳
1957年(昭32)	87歳	1957年(昭32)	87歳	1957年(昭32)	87歳
1956年(昭31)	86歳	1956年(昭31)	86歳	1956年(昭31)	86歳
1955年(昭30)	85歳	1955年(昭30)	85歳	1955年(昭30)	85歳
1954年(昭29)	84歳	1954年(昭29)	84歳	1954年(昭29)	84歳
1953年(昭28)	83歳	1953年(昭28)	83歳	1953年(昭28)	83歳

多摩美術大学美術館

(27坪90 クレーン文庫と称す)。大拙文化功労年金50万円(昭和27~41年まで)文庫へ寄附。胡適 デマルチーノ等で論考検討。英国ユング博士と会う。住宅(11坪 現在管理人宅 昭和55年修理平成15年再修理)。

9月夏期休暇 一時帰国 文庫住居部分整備不十分のため正伝庵在。

「鈴木大拙選集」により朝日賞受賞 そのまま文庫へ寄附。1月渡米 コロンビア大学講義継続。9月関法善師のニューヨーク仏教協会除幕式のスピーチ 昭和30年1月柳宗悦仏書禪籍寄贈。

コーネリアス・クレインの援助で大拙の英訳の仕事を支えるためにニューヨークで禅学協会結成される。

1957年(昭32) コロンビア大学での講義終了。9月ケンブリッジに移り渡米中久松真一と共にハーバード大学において禪を講ず。メキシコで精神分析家エーリッヒ・フロムとのクエルナヴァカ会議。

1958年(昭33) 「教行信証」翻訳着手。ニューヨーク仏教協会会で「真宗入門」の英語講演シリーズ。11月帰国。

6月ハワイ大学で胡適と会う。第3回東西哲学会議。8月帰国 松ヶ岡文庫にて研究生活を続ける。大谷大学名誉教授となる。国賓としてインドを訪問翌1月帰国。出光佐三の寄附により鉄筋二階第二新書庫。(33坪07)及び木造二階建増(12坪20 研究室の改築)現在の姿となる。

4月金子大栄 曾我量深 西谷啓治と座談。親鸞型人700回大遠忌記念講演。印度学仏教学会創立10周年記念講演出光 軽井沢寮。

1月NHK国際放送中南米 北米西部向け「ラジオ年賀状」放送。

6月大谷大学で「清沢満之は生きている」記念講演。イースタ・ブッディスト再刊相談会西谷啓治等と。第1回タゴール生誕百年記念文化賞受賞。第4回ハワイ大学東西哲学会議。

【宗教】「よみがえる東洋」

【華嚴の研究】(英文: Essays in Zen Buddhism, Third Series)「禅の研究」(英文: Studies in Zen)

【神秘主義—キリスト教と仏教】(英文: Mysticism: Christian and Buddhist)「禅による生活」(選集追巻第二巻)(英文: Living by Zen)

【禅の研究】(選集追巻第三巻)(英文: Studies in Zen)

英文増補版の「禅と日本文化」(英文: Zen and Japanese Culture)

【金剛経の禅—禅への道—禅と精神分析】(英文: Zen Buddhism and Psychoanalysis)

昭和37年3月3日「趙州禪師語録」

【東洋的な見方】「仙崖カレンダー」(英文: Sengai Calendar)

【親鸞の世界】(座談会・講演集)

「イースタン・ブッディストニューシリーズ」一巻一号(英文雑誌: The Eastern Buddhist, New Series)

明石照男没(9月29日 75歳)

柳宗悦没(5月3日 73歳)

コーネリアス・クレイン没(57歳)

ブライス没(10月28日 65歳)

野村洋三没(3月27日 95歳)

西暦年号	年齢	鈴木大拙略年譜	主要著作一覧	その他
1966年(昭41)	96歳	5月バーナード・リーチと対談。6月金子大栄と対談。7月12日 東京聖路加病院にて没。戒名「也風流庵大拙居士」。	『妙好人浅原才市集』	石井光雄没(3月17日 86歳)
1967年(昭42)		百堂庵新築(29坪40)。4月古田紹欽財団法人松ヶ岡文庫文庫長。		
1968年(昭43)		以降 出光興産株式会社の協力で現在に至る。		
1970年(昭45)			英文: Shin Buddhism (『真宗入門』ニューヨーク講演集)	
1971年(昭46)			英文: Sengai - The Zen Master (『仙厓の書画』)	松永安左エ門没(6月16日 95歳)
1972年(昭47)			『教行信証』(英訳: The Kyogoshinsho : the collection of passages expounding the true teaching, living faith, and realizing of the Pure Land)	
1973年(昭48)			Collectd writings on Shin Buddhism (英訳: 英訳: Collected writings on Shin Buddhism)	出光佐三没(昭和56年3月7日 95歳)
1981年(昭56)			『鈴木大拙全集』全40巻(増補新版)(Collected Works of Suzuki Daisetz, 40 vols.)	
2003年(平15)			英文『鈴木大拙選集』第1巻『禪』(Selected Works of D. T. Suzuki, Volume I : Zen)	
2014年(平26)			英文『鈴木大拙選集』第2巻『浄土』(Selected Works of D. T. Suzuki, Volume II : Pure Land)	
2015年(平27)				

作成者: 伴勝代 平成二十八年(二〇一六年)一月二十四日

多摩美術大学美術館

(公財)松ヶ岡文庫

出品目録

1 鈴木大拙の軌跡と遺物

番号	作品名	作者・作家	制作年	材質・技法	頁数	寸法 (cm)
1-1	石川県専門学校時代	鈴木大拙	一八八六年頃	写真	一点	縦三三・三×横一六・八×厚〇・四
1-2	石川県英川小学校時代	鈴木大拙	一八九〇年頃	写真	一点	縦二〇・五×横一四・二×厚〇・四
1-3-1	西洋三字経	鈴木大拙	一八七二年	和綴じ冊子	一冊	縦二〇・五×横一四・二×厚〇・四
1-3-2	西洋三字経	鈴木大拙	一八七二年	和綴じ冊子	一冊	縦二〇・五×横一四・二×厚〇・四
1-3-3	衛生十二字歌・修身十二字歌	鈴木大拙	一八七四年	和綴じ冊子	一冊	縦二二・九×横一五・三×厚〇・三
1-4	今北洪川(一八一六・一八九二)	鈴木大拙	一九四六年	書籍	一点	縦一八・五×横一三・〇×厚一・五
1-5	鈴木大拙著「今北洪川」	鈴木大拙	一九四六年	書籍	一点	縦一八・五×横一三・〇×厚一・五
1-6	釈宗演(一八六〇・一九一九)	ポール・ケイラス著・鈴木大拙訳	一九〇二年一月二十一日	写真	一点	縦一九・〇×横一二・七×厚一・
1-7	「仏陀の福音」	鈴木大拙	一八九五年	書籍	一冊	縦一八・八×横一二・八×厚一・六
1-8	「新宗教論」	鈴木大拙	一九〇二年一月二十一日	書籍	一冊	縦一〇・三×横一二・八
1-9	米国ラサール滞在時の鈴木大拙	鈴木大拙	一九〇二年二月頃	写真、ポストカード	一点	縦一三・五×横九・四
1-10	学習院寮長時代	鈴木大拙	一九〇八年八月頃	写真	一点	縦一三・五×横九・四
1-11	中国大連にて	鈴木大拙	一九〇八年八月頃	写真	一点	縦一三・五×横九・四
1-12	大谷大学教壇にて	鈴木大拙	一九〇六年六月二十日	写真	一点	縦一〇・二×横一四・八
1-13	北京大学訪問、胡適らと共に	鈴木大拙	一九三四年六月八日	写真	一点	縦一〇・二×横一四・八
1-14	胡適より贈られた書	鈴木大拙	年代不詳	紙、墨	一点	縦四一・五×横三〇・六
1-15	滬英のため横浜より出航する「比叟」にて	鈴木大拙	一九三六年六月四日	写真	一点	縦一〇・七×横一四・八
1-16	横浜ニューグランドホテル屋上	鈴木大拙	一九三七年一月九日	写真	一点	縦二〇・五×横二五・四
1-17	星ヶ岡客寮にて	鈴木大拙	一九四四年五月二日	写真	一点	縦一〇・七×横一四・八
1-18	岩波重雄邸にて	鈴木大拙	一九四四年五月二日	写真	一点	縦一〇・七×横一四・八
1-19	安宅彌吉追悼会	鈴木大拙	一九四九年四月十六日	写真	一点	縦二〇・五×横二五・四
1-20	ハワイ大学での東西哲学者大会	鈴木大拙	一九四九年七月二十九日	写真	一点	縦二〇・五×横二五・四
1-21	メキシコのエリツヒ・フロム邸にて	鈴木大拙	一九五六年八月二十四日	写真	一点	縦二〇・五×横二五・四
1-22	ハイテッカー夫妻と共に	鈴木大拙	一九五三年七月八日	写真	一点	縦一一・三×横一六・〇
1-23	ドイツのマルブルクにて	鈴木大拙	一九五四年七月二十日	写真	一点	縦一一・三×横一六・〇
1-24	オーストリアのウイーン採訪時	鈴木大拙	一九五四年八月六日	写真、ポストカード	一点	縦八・八×横二三・八
1-25	福岡県大宰府政庁跡の大宰府碑にて	鈴木大拙	一九六〇年九月二十日	写真	一点	縦八・八×横二三・八
1-26	ジョン・ケージの來訪を受ける	鈴木大拙	一九六二年十月二日	写真	一点	縦八・八×横二三・八
1-27	福田恆存との対談	鈴木大拙	一九六五年頃	写真	一点	縦八・八×横二三・八
1-28	NHKテレビ「ユリ」に鐘は鳴る」	鈴木大拙	一九五九年九月二十四日	写真	一点	縦三三・三×横二二・三×厚四・三
1-29-1	NHKテレビ「ユリ」鐘は鳴る」フィルム	鈴木大拙	一九五九年九月二十四日	写真	一点	縦三三・三×横二二・三×厚四・三
1-29-2	東京テレビ「婦人ニュース」フィルム	鈴木大拙	一九六二年一月三日	写真	一点	縦三一・五×横一〇・三×厚三・八
1-29-3	NHKテレビ「婦人の時間」この人の道」	鈴木大拙	一九六四年五月十四日	十六ミリフィルム	一点	縦三〇・三×横一〇・三×厚二・三
1-29-4	鈴木大拙、西田幾多郎、山本良吉対談レコード	鈴木大拙	一九四一年三月	SPLレコード	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-30	東京テレビ「婦人ニュース」	鈴木大拙	一九六二年一月三日	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-31	NHKテレビ「婦人の時間」この人の道」	鈴木大拙	一九六四年五月十四日	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-32	震災後の倒壊した円覚寺	鈴木大拙	一九三三年九月二十五日	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-33	震災後の倒壊した正伝庵	鈴木大拙	一九三三年九月二十五日	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-34	震災後の鎌倉六仏	鈴木大拙	一九三三年九月二十五日	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-35	茨城県茨城	鈴木大拙	一九二〇年代頃	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-36	京都の自宅での集會写真	鈴木大拙	一九二〇年代頃	写真	一点	縦二八・五×横二八・五×厚二・八
1-37	「鎌倉日本文化」	鈴木大拙	一九三六年	書籍	一冊	縦二二・三×横一五・五×厚四・〇
1-38	Zen and Japanese Culture	鈴木大拙	一九三九年	書籍	一冊	縦三三・五×横一六・四×厚四・五
1-39	「日本の精神」半藤六郎校訂	鈴木大拙	一九四四年	書籍	五点	縦二一・〇×横一四・八×厚〇・五
1-40	「THE CULTURAL EAST」創刊号、第二期	鈴木大拙	一九四六年・一九四七年	雑誌	二冊	縦二一・〇×横一五・〇×厚二・一

出品掲載作品は全て公益財団法人松ヶ岡文庫所蔵。

番号	作品名	作者・作家	制作年	材質・技法	員数	寸法 (cm)
41	「大乗佛教概論」	鈴木大拙	一九〇七年	書籍	一冊	縦二〇・四×横一四・一×厚三七
42	「教行信証」	鈴木大拙	一八三八年	和綴じ冊子	一冊	縦一六・七×横二一・〇
43	「教行信証のタイプ原稿 (未完)」	鈴木大拙	一九六三年	原稿	十帖	縦二八・〇×横二二・七
44	「教行信証のラフドラフト」	鈴木大拙	一九六二年	校正刷り	一冊	縦二九・四×横二〇・五
45	「仙道修論の英文タイプ原稿」	鈴木大拙	一九六〇年頃	原稿	二帖	縦三四・四×横二二・〇
46	「老人と小児性」手書き原稿	鈴木大拙	一九六六年	原稿	九帖	縦二五・〇×横一七・九×厚一五
47	「大拙のもとに道された多くの書簡類」	鈴木大拙	一九五一年・一九五二年	原稿	五冊	各縦二三・五×横一五・四
48	「大拙が執筆した様々な雑誌や刊行物のための手稿」	鈴木大拙	一九五一年・一九五二年	原稿	五冊	各縦二三・五×横一五・四
49・1	「The Way」	鈴木大拙	一九五一年・一九五二年	書籍	一冊	縦一八・三×横三二・二
49・2	「妙好人 遠原才一を説き解く」	鈴木大拙	一九五一年・一九五二年	書籍	一冊	縦一八・三×横三二・二
50	「妙好人 遠原才一全集之図 (複製)」	若林春暎	一九五〇年	複製印刷	一点	縦一八・三×横四二・四
51	鈴木大拙肖像	方君暉	一九五〇年代	水彩、紙	一点	縦五四・〇×横六一・〇
52	鈴木大拙肖像	方君暉	一九五〇年代	水彩、紙	一点	縦四九・七×横三九・〇
53	大拙のバスポート	方君暉	一九四九〜五〇年代	旅券	五点	各縦一五・一×横九・三×厚〇・三
54	大拙が愛用していた腕時計と懐中時計	方君暉	一九四九	時計	二点	縦九・八×横九・八×厚三・六
55	大拙が愛用していた米俵製の補聴器	方君暉	一九四九	補聴器	一点	縦二〇・五×横一一・八
56	大拙が愛用していた文化靴	方君暉	一九四九	靴	一点	縦二〇・五×横一一・八
57	旅行用トランクに納められた大拙の日記類	方君暉	一九三八年〜一九六二年	日記	十八帖	縦一四・〇×横三〇×厚三〇
58	大拙が愛用していた杖	方君暉	一九三八年〜一九六二年	竹、ゴム	一点	縦一四・〇×横三〇×厚三〇
59	大拙が使用していた印	方君暉	一九三八年〜一九六二年	石	二点	縦一四・〇×横三〇×厚三〇
60	大拙が使用していた印	方君暉	一九三八年〜一九六二年	石	二点	縦一四・〇×横三〇×厚三〇
61	鈴木大拙印「To do good is my religion. The world is my home. Daisetz」	方君暉	一九三八年〜一九六二年	写真、額	一点	縦一三・三×横一一・三×厚〇・九
62	松ヶ岡文庫の大拙肖像	方君暉	一九三八年〜一九六二年	写真、額	一点	縦一三・三×横一一・三×厚〇・九
II 鈴木大拙の交友と松ヶ岡文庫						
1	西田幾多郎	西田幾多郎	一九二六年十二月六日	写真	一点	縦一八・〇×横十一・五
2	西田幾多郎・鈴木大拙宛書状	西田幾多郎	一九二七年一月七日	紙本墨書	一通	縦一八・八×横二十二・一
3	西田幾多郎 (自写)	西田幾多郎	明治、昭和時代	紙本墨書	一面	縦三十一・四×横八十二・二
4	大拙・松ヶ岡文庫自写書状	鈴木大拙	一九五一年	写真	一点	縦十四・七×横一〇・五
5	鈴木大拙・西田幾多郎宛書状	鈴木大拙	一九二九年	紙本墨書	一通	縦二十四・〇×横十八・〇
6	西田幾多郎一週忌、西田幾多郎	西田幾多郎	一九四七年六月七日	写真	一点	縦三十三・五×横四十五・七
7	花壇	西田幾多郎	一九五六年	油彩	一点	縦十四・〇×横十・〇
8	二十代前半の「マナリス」	西田幾多郎	一九〇〇年頃	写真	一点	縦三十三・五×横四十五・七
9	大拙「マナリス」	鈴木大拙	一九〇七年頃	写真	一点	縦三十三・五×横四十五・七
10	FLIGHT ON THE PATH	鈴木大拙	一八八六年	紙本印刷	一冊	縦一八・二×横十一・四×厚二・一
11	THINGS SEEN IN JAPAN	鈴木大拙	一九〇七年頃	紙本印刷	一冊	縦二二・六×横十三・八
12	「マナリス」	鈴木大拙	一九〇八年二月二十八日	紙、ペン	二冊	縦二二・一×横十七・六
13	「マナリス」	鈴木大拙	一九〇八年二月二十八日	紙、ペン	二冊	縦二二・一×横十七・六
14	「マナリス」	鈴木大拙	一九〇八年二月二十八日	紙、ペン	二冊	縦二二・一×横十七・六
15	「マナリス」	鈴木大拙	一九〇八年二月二十八日	紙、ペン	二冊	縦二二・一×横十七・六
16	「マナリス」	鈴木大拙	一九〇八年二月二十八日	紙、ペン	二冊	縦二二・一×横十七・六
17	「The Eastern Buddhist (The Eastern Buddhist Society, Kyoto)」	鈴木大拙	一九〇九年	新聞、紙、ペン	研究ノート二十冊	縦二二・六×横十三・八
18	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
19	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
20	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
21	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
22	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
23	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
24	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
25	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八
26	「FESSAY IN ZEN BUDDHISM」 (Luac and Company, London)	鈴木大拙	一九〇九年	紙本印刷	二冊	縦二二・六×横十三・八

38	弘法大師像		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦九十三×横四十八〇
37	弘法大師像		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦五十六〇×横三三〇
36	千手観音像		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十七五×横二六一
35	長谷寺式十一面観音菩薩像		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦五十七〇×横三三二
34	十三仏図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦五十九〇×横三三〇
33	浪切不動明王図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦五十九〇×横三三〇
32	不動明王三童子図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦三二二〇×横一九〇
31	五大明王像		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦三二二〇×横一九〇
30	光明真言尊茶籠		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦九十四〇×横四十三八
29	胎藏界種子曼荼羅		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十一五×横二二〇×厚一八
28	金剛界種子曼荼羅		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十四〇×横二二七
27	『真宗聖王』	恵忍撰	(版本) 江戶時代 寛政九年(一七九七年)	版本・装綴	三冊	(各冊) 縦二五〇×横一八〇
26	『真宗聖王』	恵忍撰	(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	版本・装綴	三冊	(各冊) 縦二七〇×横一八〇
25	真宗聖王行状繪伝 巻中(九十)		(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦二七〇×横一八〇
24	親鸞聖人行状繪伝		(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦二七〇×横一八〇
23	親鸞聖人行状繪伝		(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦二七〇×横一八〇
22	親鸞聖人行状繪伝		(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦二七〇×横一八〇
21	親鸞聖人行状繪伝		(版本) 江戶時代 天明二年(一七八二年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦二七〇×横一八〇
20	西園三十三番札所観音圖		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十三五×横三三三×厚一〇
19	台賢菩薩圖		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十五九×横三三九
18	文殊菩薩圖		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦四十三五×横三三三×厚一〇
17	岡本三郎来迎図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦六十三五×横二六六×厚一三
16	『THE EASTERN BUDDHIST NEW SERIES VOL.1 No.2』		昭和時代 昭和四一年(一九六六年)	紙・インク・オフセット印刷	一冊	縦二二七×横二二六
15	釈迦涅槃図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦五十六四×横二六三×厚二〇
14	釈迦涅槃図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦六〇〇×横三三〇
13	清涼寺式釈迦如来図		(版本) 平成時代 平成二十八年(二〇一六年)	(版本) 和紙・墨	一面	(版本) 縦六十三五×横二六六×厚一三
12	『神門至願(白隠上人本)』		江戶時代 延宝九年(一六八一年)	版本・墨書・装綴	四冊	(各冊) 縦二七七八×横二二七
11	『探訪録』		明治時代末 明治四十三年頃(一九一〇年)	紙本墨書(野線原用紙)・装綴	一冊	縦二二四三×横一六三三
10	『應永法華(仏頂国師手次本)』		江戶時代 寛永年間中葉(一六三〇年頃)	紙本墨書・装綴	一冊	縦二二九八×横二二二
9	『應永法華(仏頂国師手次本)』		江戶時代 寛永年間中葉(一六三〇年頃)	紙本墨書・装綴	一冊	縦二二九八×横二二二
8	『應永法華(仏頂国師手次本)』		江戶時代 寛永年間中葉(一六三〇年頃)	紙本墨書・装綴	一冊	縦二二九八×横二二二
7	『應永法華(仏頂国師手次本)』		江戶時代 寛永年間中葉(一六三〇年頃)	紙本墨書・装綴	一冊	縦二二九八×横二二二
6	『應永法華(仏頂国師手次本)』		江戶時代 寛永年間中葉(一六三〇年頃)	紙本墨書・装綴	一冊	縦二二九八×横二二二

多摩美術大学美術館

(公財)松ヶ岡文庫

68	石造三重塔(京本書収録のみ)		鎌倉時代(十二後半~十四世紀初)	花崗岩系	一面	版木・参考) 縦五十九〇×横二十四九×厚一九
67	銅造般若菩薩坐像(京本書収録のみ)	田中後次	大正時代 大正十一年(一九二二年)	金銅製	一椀	版木・参考) 縦四十九〇×横三十一〇
66	『新編弘法大明録』(京本書収録のみ)	沢庵宗彭書写	江戸時代 正保二年(一六四五年)	紙本墨書 袋綴	四冊	版木・参考) 縦四十二〇×横三十一〇
65	『新編弘法大明録』(京本書収録のみ)		鎌倉時代 正嘉元年(一二五七年)	紙本墨書 糸綴(元粘葉莖)	八冊	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
64	西王母・侍女・寿老人図		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
63	歳徳神		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
62	弁財天十五童子像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
61	荒神図(鏡治神図)		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
60	寶面金剛図		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
59	秋葉権現		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
58	多賀大社神		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
57	茶枳尼天		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
56	馬鳴大菩薩像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
55	龍野三神像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
54	稲荷大明神・弁才天・大黒天像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
53	金刀比羅宮神図(大物主尊像)		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
52	天孫降臨真祖神影図		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
51	雨宝童子図		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
50	愛宕山尊茶屋		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
49	朝熊岳尊茶屋		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
48	朝熊岳尊茶屋		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
47	殿主権現尊茶屋		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
46	役行者図		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
45	牛頭天王		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
44	千支八尊像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
43	天台・伝教両大師像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
42	真言八祖像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
41	真言八祖像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
40	弘法大師行状絵(頂法宗論の場面)		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六
39	弘法大師像		(版木) 江戸時代(十七~十九世紀) (版木) 平成時代(十七~十九世紀)	(版木) 桜材 (版木) 和紙・墨	一面	版木・参考) 縦四十九〇×横三十五〇×厚一六

多摩美術大学美術館

(公財) 松ヶ岡文庫

大拙と松ヶ岡文庫展

多摩美術大学美術館

展覧会

二〇一六年七月二日～九月十一日

主催・会場 多摩美術大学美術館

特別協力 公益財団法人松ヶ岡文庫

協力 岩波書店

春秋社

ノンブル社

後援

鎌倉市教育委員会

助成

公益財団法人朝日新聞文化財団

関連イベント

【講演会】

◇7月3日(日)

「鈴木大拙の思想」

末木文美士氏(国際日本文化研究センター名誉教授)

◇8月28日(日)

「D・T・スズキとビート世代」

重松宗育氏(静岡大学・関西医科大学元教授)

◇9月3日(土)

「大拙先生が残されたもの―東西文化の見方から見えてくること―」

新田雅章氏(福井県立大学名誉教授)

【トークセッション】

◇7月30日(土)

●第1部「鈴木大拙の神秘哲学」

安藤礼二氏(多摩美術大学准教授)

●第2部「松ヶ岡文庫七十年のあゆみ」

―大拙と柳宗悦、そして継承される仏教と東洋文化研究の精神―

若松英輔氏(批評家・随筆家)

安藤礼二氏(多摩美術大学准教授)

伴 勝代氏(公益財団法人松ヶ岡文庫主任)

【学芸員によるギャラリートーク】

◇7月24日(日) ◇8月21日(日) ◇9月4日(日)

(公財) 松ヶ岡文庫

カタログ

撮影

大屋孝雄

(1・3、5、7、8、14、29、

37、63、11・6、8、14、16、18、

21、22、27、34、37、40、71、

111・168)

編集

小林宏道 淵田雄 吉田公子

デザイン

百瀬梓

印刷

株式会社オフィスエENZ

製版

坂巻広志

発行

多摩美術大学美術館

発行日

2016年7月2日

版画版本制作

竹芳洞

©Tama Art University Museum 2016

本書の図版および文章の無断転用を禁じます。

多摩美術大学美術館

P・132	II・24	出品目録に追加	(誤) 一九三九年六月四日	(正) 一九四〇年六月四日
P・94	III・41 III・42	解説4箇所 解説4行目	(誤) 受け	(正) 授けられ
P・77	III・13	解説4箇所	(誤) 清涼寺	(正) 清涼寺
P・61	II・59	解説1行目	(誤) パーセル	(正) パーセル
P・60	II・58	解説5行目	(誤) 仏教界釈	(正) 仏教界釈
P・38	I・16	岩波重雄	(誤) 岩波重雄	(正) 岩波茂雄
P・35	I・6	解説1行目	(誤) 今川洪川	(正) 今北洪川
P・9	註四 3行目	高橋秀栄に多大なご教示をいただいた。	(誤) 高橋秀栄に多大なご教示をいただいた。	(正) 高橋秀栄に多大なご教示をいただいた。
P・4	20行目	東大寺速弁拓本	(誤) 東大寺速弁拓本	(正) 東大寺速弁拓本
P・3	凡例 19行目	出品リスト	(誤) 出品リスト	(正) 出品目録
		風数、材料・技法、寸法	(誤) 風数、材料・技法、寸法	(正) 材料・技法、風数、寸法

鈴木大拙 没後五十年記念

大拙と松ヶ岡文庫展

カタログ 正誤表

(公財)松ヶ岡文庫